

河内長野市遺跡調査会報 V

向野遺跡

1993年3月

河内長野市遺跡調査会

序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野四是、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向う南河内の交通の要衝として発展してきたまちです。

このため市内には数多くの文化財が残されています。

このような河内長野市も大阪への通勤圏に位置しているため住宅都市として近年、開発の波がおしよせてきています。

開発がもたらす文化財や自然に対する影響も大きいものがあります。特に、埋蔵文化財は開発と直接に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージを現在の市民、更には未来の市民へ伝えてゆかなければなりません。

本書は発掘調査の成果を収録しています。先人達のメッセージの一部でも理解するための資料として活用していただければ幸いです。

これらの発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に末尾ながら謹意を表すものです。

平成5年3月

河内長野市遺跡調査会
理事長 中尾 謙二

例　　言

1. 本報告書は昭和63年度から平成元年度に河内長野市遺跡調査会が河内長野市から委託を受けた向野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、本市教育委員会社会教育課文化係尾谷雅彦を担当者として実施した。
3. 調査にかかる事務は調査会事務局長釜ヶ谷正己（昭和63年度）、植田兵武（平成元年度）が主担した。
4. 本書は尾谷雅彦、中村清美が執筆した。
5. 編集は尾谷が担当し、本書の文責は尾谷が負うものである。
6. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。
鈴木（明地）奈緒美・阿部園子・梶谷佳世・喜多順子・久保八重子・結城（阪本）桂子・今西（杉山）和良・高田加容子・中西和子・中野雅美・平井令子・松尾寿美子・村上貴美
7. 調査の実施に関しては下記の方々の協力を得た。
河内長野市都市整備部地域整備課・同向野住宅街区整備事務所（平成4年10月廃止）
8. 本調査の記録はスライドフィルム等でも記録しており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡　　例

1. 本報告書に掲載されている標高はTPを基準としている。
2. 十色は新版標準上色帳による。
3. 平面測量基準は国家座標第VI系による5mメッシュを基に実施したものである。
4. 図中の北は座標北である。
5. 掲載の遺物の縮尺は土器1/4、石器1/2を基準に各遺物の状況により、縮尺は替えている。

目 次

序文

例言

凡例

I.はじめに.....	1
II.位置と環境.....	1
III.調査の結果.....	5
(1) 調査に至る経過.....	5
(2) 位置と環境.....	5
(3) 遺構と遺物.....	5
(4)まとめ.....	74

挿 図 目 次

第1図 河内長野市遺跡分布図.....	2
向野遺跡	
第2図 向野遺跡調査区配置図及び地形分布図.....	6
第3図 S K - 1 遺構実測図 (1/40)	7
第4図 S K - 1 出土遺物実測図.....	7
第5図 S K - 2 遺構実測図 (1/40)	7
第6図 S B - 1 遺構実測図 (1/80)	8
第7図 S B - 1 出土遺物実測図.....	8
第8図 S K - 3 + 4 遺構実測図 (1/40)	9
第9図 S K - 4 土器出土状況図 (1/30)	10
第10図 S B - 3 + 4 出土遺物実測図.....	11
第11図 P - 7 ~ 12 出土遺物実測図.....	12
第12図 S B - 2 遺構実測図 (1/80)	12
第13図 S B - 3 遺構実測図 (1/80)	13
第14図 S A - 1 遺構実測図・平面図 (1/150)・断面図 (1/100).....	14
第15図 S A - 1 出土遺物実測図.....	15
第16図 S E - 1 遺構実測図 (1/30)	15
第17図 S E - 2 遺構実測図 (1/30)	15

第18図	S E - 2 出土遺物実測図(1).....	15
第19図	S E - 2 出土遺物実測図(2).....	16
第20図	S E - 3 遺構実測図 (1/30)	16
第21図	S E - 3 出土遺物実測図(1).....	17
第22図	S E - 3 出土遺物実測図(2).....	18
第23図	S E - 4 遺構実測図 (1/30)	19
第24図	S E - 5 遺構実測図 (1/30)	19
第25図	S E - 5 出土遺物実測図.....	19
第26図	S D - 1 遺構実測図 (1/40)	20
第27図	S D - 1 出土遺物実測図.....	20
第28図	S D - 2 ~ 7 遺構実測図 (1/40)	20
第29図	S D - 3 出土遺物実測図.....	21
第30図	S D - 4 出土遺物実測図.....	21
第31図	S D - 5 出土遺物実測図.....	22
第32図	S D - 6 出土遺物実測図.....	22
第33図	S D - 7 出土遺物実測図.....	23
第34図	S W - 1 遺構実測図 (1/50)	24
第35図	S W - 1 出土遺物実測図(1).....	25
第36図	S W - 1 出土遺物実測図(2).....	26
第37図	S W - 2 、 S K - 8 遺構実測図 (1/40)	27
第38図	S W - 3 遺構実測図 (1/40)	28
第39図	S W - 3 出土遺物実測図.....	28
第40図	S W - 4 、 S K - 30 遺構実測図 (1/40)	29
第41図	S W - 4 出土遺物実測図.....	29
第42図	S W - 5 、 S K - 29 遺構実測図 (1/40)	30
第43図	S W - 5 出土遺物実測図.....	31
第44図	S K - 5 遺構実測図 (1/30)	32
第45図	S K - 7 遺構実測図 (1/40)	32
第46図	S K - 6 遺構実測図 (1/40)	33
第47図	S K - 5 ~ 7 出土遺物実測図.....	34
第48図	S K - 9 、 10 遺構実測図 (1/40)	35
第49図	S K - 11 遺構実測図 (1/40)	35
第50図	S K - 12 遺構実測図 (1/40)	35
第51図	S K - 8 ~ 41 出土遺物実測図(1).....	36

第52図	S K - 8 ~ 41出土遺物実測図(2).....	37
第53図	S K - 8 ~ 41出土遺物実測図(3).....	38
第54図	S K - 8 ~ 41出土遺物実測図(4).....	39
第55図	S K - 13・14遺構実測図 (1/30)	40
第56図	S K - 15・16遺構実測図 (1/40)	40
第57図	S K - 17遺構実測図 (1/40)	41
第58図	S K - 18遺構実測図 (1/40)	42
第59図	S K - 19遺構実測図 (1/40)	42
第60図	S K - 21遺構実測図 (1/40)	43
第61図	S K - 22遺構実測図 (1/40)	43
第62図	S K - 23遺構実測図 (1/40)	43
第63図	S K - 24遺構実測図 (1/40)	43
第64図	S K - 25遺構実測図 (1/40)	43
第65図	S K - 26遺構実測図 (1/40)	44
第66図	S K - 27遺構実測図 (1/50)	45
第67図	S K - 28遺構実測図 (1/40)	45
第68図	S K - 31遺構実測図 (1/40)	45
第69図	S K - 32・33遺構実測図 (1/40)	46
第70図	S K - 34遺構実測図 (1/40)	46
第71図	S K - 35遺構実測図 (1/40)	47
第72図	S K - 36遺構実測図 (1/40)	47
第73図	S K - 37遺構実測図 (1/40)	47
第74図	S K - 38遺構実測図 (1/40)	47
第75図	S K - 39遺構実測図 (1/40)	48
第76図	S K - 40遺構実測図 (1/40)	48
第77図	S K - 41遺構実測図 (1/40)	48
第78図	S K - 42、S X - 6・7遺構実測図 (1/30)	49
第79図	S X - 1 遺構実測図 (1/20)	49
第80図	S X - 1 出土遺物実測図.....	49
第81図	S X - 2 遺構実測図 (1/20)	50
第82図	S X - 2 出土遺物実測図.....	50
第83図	S X - 3 遺構実測図 (1/20)	50
第84図	S X - 3 出土遺物実測図.....	50
第85図	S X - 4 遺構実測図 (1/20)	51

第86図	S X - 4 出土遺物実測図	51
第87図	S X - 5 遺構実測図 (1/20)	51
第88図	S X - 5 出土遺物実測図	51
第89図	S X - 6 出土遺物実測図	52
第90図	S X - 7 出土遺物実測図	52
第91図	N R - 1 土層図 (1/40)	52
第92図	N R - 1 出土遺物実測図	53
第93図	N V - 1 出土遺物実測図	53
第94図	P - 13~19出土遺物実測図	53
第95図	P - 20~23出土遺物実測図 (1/10)	54
第96図	P - 20~23出土遺物実測図	54
第97図	縄文土器実測図(1)	56
第98図	縄文土器実測図(2)	57
第99図	縄文土器実測図(3)	58
第100図	縄文時代石製品実測図	59
第101図	平安時代出土遺物実測図	60
第102図	中世~近世出土遺物実測図(1)	63
第103図	中世~近世出土遺物実測図(2)	64
第104図	中世~近世出土遺物実測図(3)	65
第105図	中世~近世出土遺物実測図(4)	66
第106図	中世~近世出土遺物実測図(5)	67
第107図	中世~近世出土遺物実測図(6)	68

表 目 次

第1表	河内長野市遺跡地名表	3
-----	------------	---

図 版 目 次

図版 1	遺構
図版 2	遺構
図版 3	遺構
図版 4	遺構 SK - 1・2、SB - 1
図版 5	遺構 SK - 3・4、SK - 4 土器出土状況
図版 6	遺構 SB - 2・3、SD - 7 (南西から)、SB - 2・3、SD - 7 (北から)
図版 7	遺構 SA - 1、SE - 2

図版8	遺構	S E-3、S E-4
図版9	遺構	S E-5、S D-1
図版10	遺構	S D-4、S D-5・6
図版11	遺構	S W-1、S W-2
図版12	遺構	S W-3、S W-4
図版13	遺構	S W-5、S K-5
図版14	遺構	S K-6、S K-8
図版15	遺構	S K-9、S K-14
図版16	遺構	S K-18、S K-30
図版17	遺構	S K-42、S X-1
図版18	遺構	S X-2、S X-3
図版19	遺構	S X-4、S X-5
図版20	遺構	S X-6、S X-7
図版21	遺構	N R-1、P-20
図版22	遺物	1～9・47・48
図版23	遺物	10・11・15・22・24・28・30・31・33・36・38・115～119
図版24	遺物	13・14・16・18・19・20・21・23・25～27・29・32・35・37
図版25	遺物	43・44・268・269・270・271・275・278～282・307・308
図版26	遺物	50～65
図版27	遺物	66・68～82・84
図版28	遺物	85～104
図版29	遺物	105～114・120・121・123・125～130
図版30	遺物	131～134・143・150～159・163
図版31	遺物	135～140・144～149
図版32	遺物	39～42・45・46・160～162・164～166・272～274
図版33	遺物	167～169・171・172・174～181・183・185
図版34	遺物	170・182・184・186～190・194～198・200
図版35	遺物	191～193・199・201～205・207～214・216～226
図版36	遺物	223・228・229・231・232・234～239・241～244
図版37	遺物	240・245～258
図版38	遺物	260・283～306・309
図版39	遺物	259・261～267
図版40	遺物	310～327・329～332・334・335・337
図版41	遺物	338～359・361・364・356・369

図版42 遺物 360・362・363・366～368・370～372・376・379～382・384・385

図版43 遺物 375・386～390・392～396・398・399・401～409

図版44 遺物 410～424

図版45 遺物 425～429・431～440・443

図版46 遺物 441・442・444～453

付 図 目 次

付図 向野遺跡遺構全体図 (1/400)

I. はじめに

近年の地価の高騰は、比較的安価であった河内長野市の住宅開発に拍車をかけるきっかけとなつた。また大規模な住宅開発はなくなってきたが、ミニ開発や集合住宅の建設が盛んとなった。

このような状況の中で、河内長野市は公共上下水道、アクセス道路、公園等の都市機能の整備、文化会館などの文化施設の充実に努めている。

しかし、このような、公共関係の整備も一般の開発と同じように埋蔵文化財を避けて通ることはできず、教育委員会と都市整備部は文化財保護と開発の調整に力を注いできた。

公共事業に関する埋蔵文化財の取扱いについては、前年度からの計画段階での保存協議を進めている。

II. 位置と環境

和泉山脈、金剛山地に源を発する石川の各支流や西除川は狭小な河谷を形成しながら北流する。河内長野市はこれら河川によって作られた谷や河岸段丘上に集落が発達している。特に中心となる長野や三日市は谷口の集落として、また、各谷筋を通る街道の要衝として発達してきたものである。

遺跡もまた、谷筋に毎に分布している。縄文時代の遺跡は最近増加しているが、石川本流から天見川沿いに北から向野遺跡、喜多町遺跡、三日市遺跡の3遺跡があり、後期を中心とする土器が出土している。また、石川本流には高向遺跡や宮山遺跡があり、宮山からは中期後半の土器と共に竪穴住居も確認されている。さらに、三日市遺跡からは早期の土器も出土している。これらの遺跡以外に高向遺跡、高木遺跡、寺ヶ池遺跡、菱子尻遺跡からはサヌカイト片や石器が出土している。

弥生時代は石川左岸の塩谷遺跡や天見川右岸の三日市遺跡から中期が、大師山遺跡からは後期が出土している。

古墳時代は犬見川を見下ろす位置に前期の前方後円墳大師山古墳、中期の三日市遺跡の古墳群、後期の鳥帽子形古墳が分布している。石川本流の向野町から寿町にかけては五の木古墳、法師塚、双子塚などの古墳が分布していた。また、石川の左岸上原には塚穴古墳が現存している。集落遺跡では前期から中期にかけては天見川沿いに三日市遺跡があり、後期前半では同じく天見川沿いに喜多町遺跡や小塩遺跡、加塩遺跡がある。

奈良時代になると、高向遺跡や喜多町、加塩遺跡から掘立柱建物や土坑が検出されている。また、本市と大阪狭山市との市境の小山田町からは2基の火葬墓が発見されている。

平安時代の遺跡は、まだ尾崎遺跡の10世紀の掘立柱建物や三日市遺跡の11~12世紀の掘立柱建



第1図 河内長野市遺跡分布図

第1表 〈河内長野市遺跡地名表〉

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	鳴尾遺跡	弥生時代・中世	47	尾崎北遺跡	古墳時代後期
2	堀谷遺跡	弥生時代～中世	48	尾崎遺跡	古墳時代～中世
3	小山田1号古墓	奈良時代	49	加賀田神社遺跡	中世
4	小山田2号古墓	奈良時代	50	ジョウノマエ遺跡	中世
5	菱子尻遺跡	繩文時代～中世	51	庚申堂	中世
6	千代田神社遺跡	中世	52	栗山遺跡	中世
7	市町東遺跡	弥生時代・中世	53	寺元遺跡	奈良時代～平安時代
8	寺ヶ池遺跡	旧石器時代～繩文時代	54	觀心寺	平安時代～
9	住吉元宮遺跡	中世	55	延命寺	
10	西之山町遺跡	中世	56	川上神社遺跡	中世
11	野作遺跡	中世	57	金剛寺	平安時代～
12	西代神社遺跡	中世	58	日の谷城跡	中世
	本多藤原星跡	飛鳥・藤原時代・近世	59	汐の山城跡	中世
13	古野町遺跡	中世	60	峰山城跡	中世
14	鶴所藩陣屋跡	近世	61	日野観音寺遺跡	
15	向野遺跡	繩文時代～中世	62	仁王山城	
16	双子塚古墳伝承地	古墳時代	63	岩立城	中世
17	五の木古墳跡	古墳時代後期	64	タコラ城	中世
18	法師冢古墳伝承地	古墳時代	65	国見城跡	中世
19	長野神社遺跡	中世	66	福岡山城跡	中世
20	青ヶ原神社遺跡	中世	67	旗藏城跡	中世
21	長池窯跡群	平安時代～近世	68	大江家	中世
22	伝「仲哀廟」		69	石仏城跡	中世
23	上原近世瓦窯	江戸時代	70	左近城跡	中世
24	上原北遺跡		71	清水遺跡	中世
25	上原中遺跡	古墳時代・中世	72	薬師寺	中世
26	琴穴古墳・上原遺跡	古墳時代後期～中世	73	千早口駅南遺跡	中世
27	大日寺遺跡	中世	74	地藏寺	中世
28	河合寺城跡	中世	75	旗尾城跡	中世
29	末広窯跡	中世	76	葛城第18姫塚	中世
30	河合寺	中世～	77	天見駅北方遺跡	中世
31	福田家	近世	78	葛城第16姫塚	中世
32	鳥帽子形古墳	古墳時代後期	79	東御堂跡	中世
	鳥帽子形城跡	中世～近世	80	流谷八幡神社遺跡	中世
	鳥帽子形八幡宮	中世	81	小野塚	中世
33	喜多町遺跡	繩文時代～中世	82	蟹井潤北遺跡	中世
34	上田町遺跡	古墳時代	83	蟹井潤神社遺跡	中世
35	上田町窯跡	近世	84	蟹井潤南遺跡	中世
36	大瀬山遺跡	弥生時代後期～	85	清水阿努陀堂跡	中世
	大瀬山古墳	古墳時代前期	86	椎現城跡	中世
37	大瀬山南古墳	古墳時代後期	87	瀧源理墓	中世
38	高向遺跡・高向南遺跡	繩文時代～中世	88	紫村地蔵堂跡	中世
39	高向神社遺跡	中世	89	天神社遺跡	中世
40	懇持寺跡	中世	90	中村阿努陀堂跡	中世
41	野間里遺跡	奈良時代～平安時代	91	西の村阿努陀堂跡	中世
42	宮山遺跡	繩文時代～平安時代	92	東の村觀音堂跡	中世
43	宮山古墳	古墳時代後期	93	光施寺	中世
44	高木遺跡	繩文時代	94	葛城第15姫塚	中世
45	三日市遺跡	旧石器時代～近世	95	岩湯寺	中世～
46	小塙遺跡	繩文時代～奈良時代	96	鳩原遺跡	中世
	加須遺跡	古墳時代後期	97	西浦遺跡	古墳時代

物以外は確認されていない。しかし、観心寺や金剛寺などの寺院はこの時期、広大な庄園を有していた。

中世になると、各谷筋（高野街道や天野街道沿い）に集落が分布している。とくに、高野街道に沿っては、西高野街道では北から菱子尻や古野町遺跡があり、東高野街道では向野遺跡がある。西、東が一つとなって天見川を南に伸びる高野街道では、合流付近の長野神社遺跡や、烏帽子形遺跡、更に南に、三日市遺跡、石仏遺跡、尾崎遺跡、清水遺跡、千早口駅南遺跡、天見駅北方遺跡、蟹井遺跡、蟹井南遺跡と続く、これらは明らかに街道と共に発達した遺跡である。集落跡以外では、同じように街道を見下ろす尾根上には南北朝から戦国時代にかけての城砦が20数か所分布している。生産遺跡としては平安時代末から中世にかけての炭焼き窯と思われる窯跡が市内の山間部に分布している。

近世になると近江膳所藩や河内西代藩の陣屋跡があり、さらに、確認数は少ないが瓦窯も、地元の伝承通り確認されている。

III. 調査の結果

(1) 調査に至る経過

当遺跡の調査は河内長野市都市計画事業向野住宅街区整備事業に先立ち実施したものである。当事業の策定がなされ後、昭和62年度に当事業に伴う埋蔵文化財の取扱について協議がなされ、事業予定地について埋蔵文化財の試掘調査を実施した。その結果、中世を中心とする遺構・遺物が確認され、新規発見の遺跡として河内長野市長から文化財保護法第57条の3項により、発見通知が提出された。

これを受け、教育委員会と都市整備部向野事務所と協議がなされ、調査については河内長野市遺跡調査会が実施することになった。調査は道路計画部分（4,000m²）を対象に昭和63年10月1日から12月21日まで第1次調査、集合農地（4,200m²）については平成元年5月1日から8月1日まで第2次調査として実施した。

(2) 調査地の位置と環境

当該遺跡は、向野町の南海電鉄高野線と石川とに挟まれた石川左岸の河岸段丘上に所在するもので、標高120mを測る。

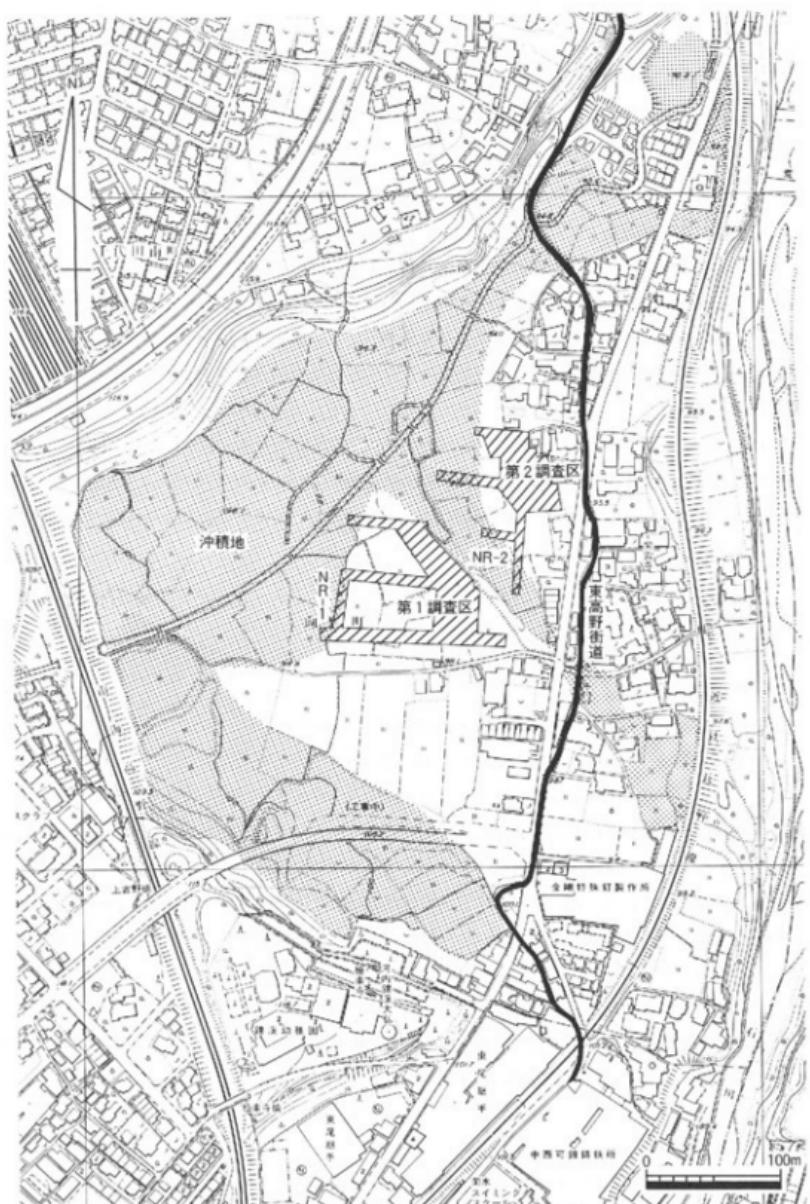
調査は、西側の南海高野線と東側の旧国道170号線との間の事業予定地内について実施した。

この地域の微地形としては、河内長野市の中心部の位置する台地（中位段丘上段）から南と北に石川に向かって東に伸びる丘陵に挟まれ、石川に向かって扇状に広がる盆地状を呈する地形である。現状はこの盆地状の部分の北側よりを谷川が流れ、上下2段の平坦面をなす。上下2段の比高差は5mである。試掘結果からは、谷川の旧流路が南側と上段と下段の境とに大きな2条の流れが、確認されている。このため、地質的には微高地となる段丘疊層と流路部分の沖積状の堆積物からなっている。遺構は微高地状の段丘疊層を地山として検出され、上段部分と下段部分の2ヶ所に分布している。

この遺跡に近接する遺跡としては、南側の丘陵末端に位置していた後期古墳の五の木古墳や双子塚古墳跡・法師塚古墳跡がある。北側丘陵上には市町東遺跡が所在する。また、東側の旧国道170号線に平行するように、東高野街道が南北に伸びている。

(3) 遺構と遺物

本報告では、調査結果については第1次調査及び第2次調査とも含めて報告する。このため、調査区の呼称については、大きく上段を第1調査区、下段を第2調査区とし、細部については国



第2図 向野遺跡調査区配置図及び地形分布図

土標に基づく5mメッシュの区割りを実施した。

遺構と遺物は縄文時代、平安時代、室町時代、近世の各時期が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが判明した。

遺構

A. 縄文時代

確実な遺構は第2調査区の土坑状のものしか確認されなかった。また、遺物も第2調査区からの出土が大半であった。第2調査区はG L -40cmで黒色の礫を含む層厚30cmのシルト層が挟在し、これが縄文土器を含む包含層に相当するようである。

[土坑]

S K - 1



第3図 SK-1 遺構実測図
(1/40)



第4図 SK-1出土
遺物実測図

第2調査区の南側に位置し、平面形は、不定形な土坑である。埋土は、にぶい褐色(7.5Y3/5)細礫混りシルトの単層で、規模は長径2.24m×短径0.95m、深さ0.24mを測る。

遺物は深鉢形土器片(1)が出土している。

S K - 2

第2調査区の南側に位置し、SK-1の東側6mに位置する。平面形は、楕円形を呈する土坑である。埋土は、にぶい褐色(7.5YR3/5)細礫混りシルトの単層で、規模は長径1m×短径0.08m、深さ0.18mを測る。

遺物は、深鉢形土器細片が出土している。

その他、遺物は出土していないが、こ

れらの土坑周辺には同じ埋土の土坑が分布している。

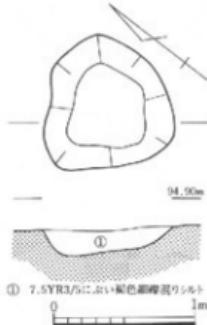
B. 平安時代

平安時代の遺構は、第1調査区の南東部分(現向野2号線の東側半分)で集中して検出され、掘立柱建物1、土坑2が確認された。

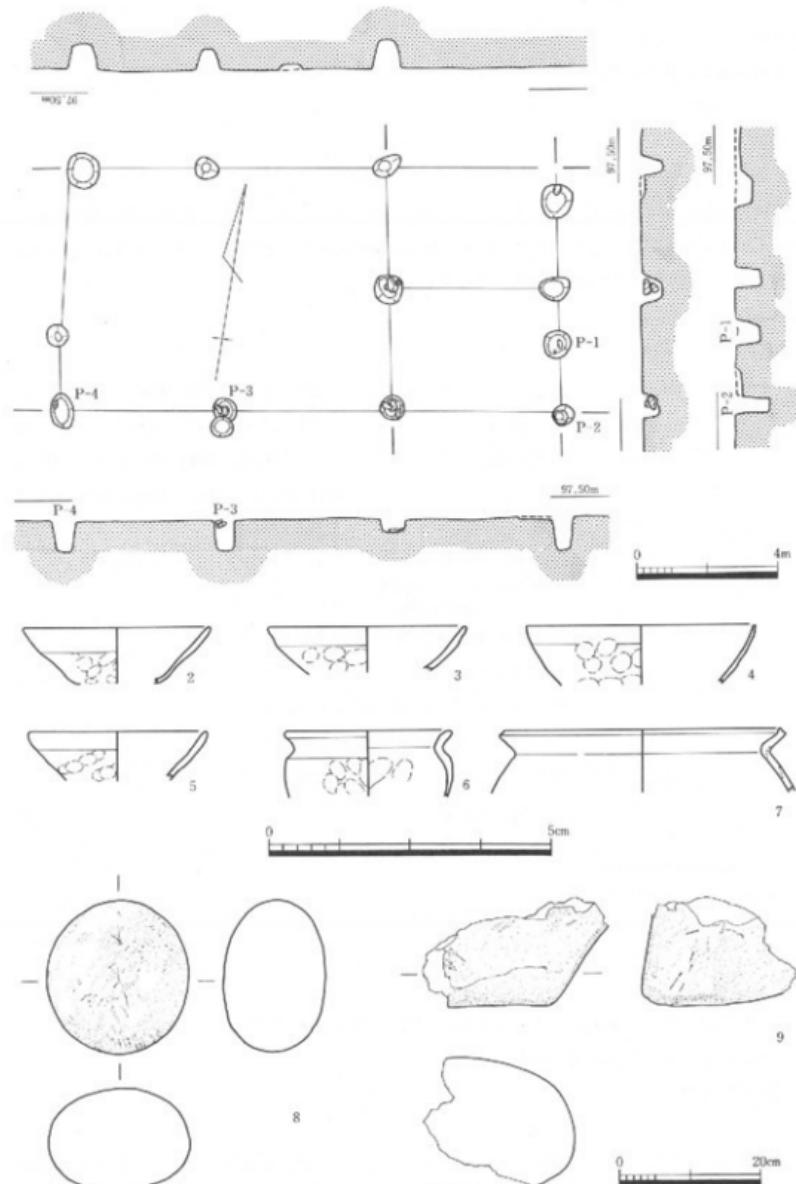
[掘立柱建物]

S B - 1

第1調査区の平安時代の遺構集中部分の中央で検出された掘立柱建物である。規模は桁行3間(7.4m)×梁行2間(3.5m)で桁行東側中央に柱穴をもつ。主軸方向N-87°-E、柱間は桁



第5図 SK-2 遺構
実測図(1/40)



第7図 SB-1出土遺物実測図

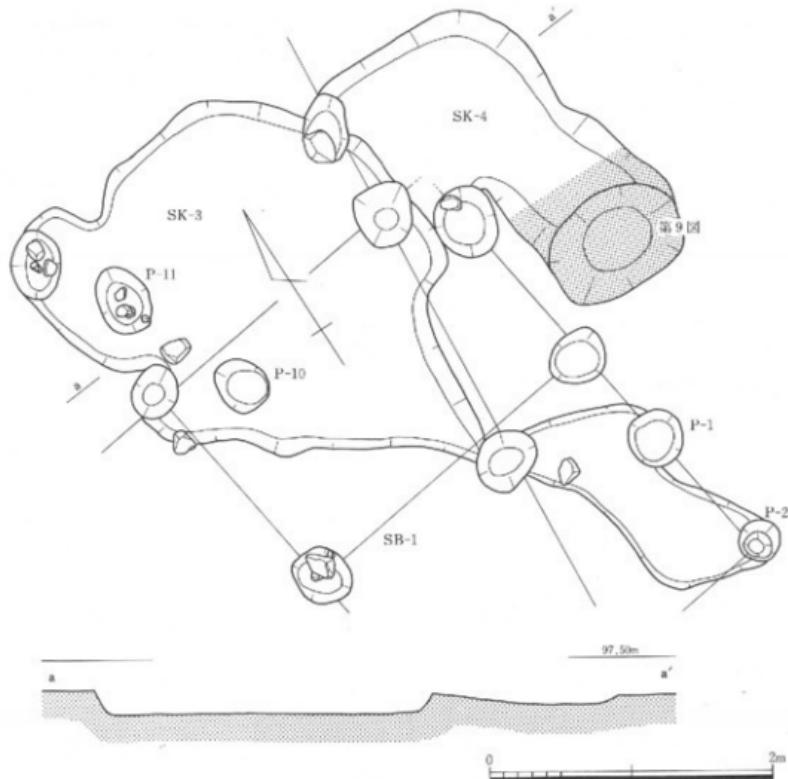
行2.4m・梁行1.8m、柱穴の径0.4m・深さ0.5mを測り、根石状の石も3箇所の柱穴に見られる。平面的には柱間も一定せず東側の柱列も通りにくいが、他の柱穴の配置から建物として復元できるものと思われる。

遺物は、建物を構成する柱穴内から出土している。図示できた遺物は、P-1から土師器塊(4)、P-2から土師器壺(5)・甕(7)、P-3から土師器壺(6)・砥石(9)・叩き石(8)、P-4から土師器塊(2)が出土している。これら以外にも黒色土器、土師器皿類の破片が出土している。

[土坑]

SK-3

SB-1の東側部分に位置し、SK-4と切り合い関係を示す。平面形は、不定形な三角形を



第8図 SK-3・4 遺構実測図

呈する。長軸3.56m、短軸2.54m、深さ0.14mを測る。

遺物は土師器皿(12)・壺(22)・片口鉢(28)・須恵器瓶(36)が図示できた。

S K - 4

S B - 1 の東側部分に位置し、S K - 3 と切り合い関係を示す。平面形は不定形な長椭円を呈する。長径(南北)2.8m×短径(東西)0.8m×深さ0.32mを測る。上坑の南端部分は長径(東西)1.1m×短径(南北)0.7m×深さ0.3mに椭円形を呈しながら一段低くなり、遺物が集中して出土した。

遺物は、土師器壺(15~21・23~27)・皿(10・11・13・14)・黒色台付皿(29)・黒色土器A類壺(30~35)・須恵器壺(37)・砥石(38)が図示できた。

[遺物出土ピット]

P - 7

第1調査区の南東端に位置する。平面形が円形を呈する径0.15m、深さ0.15mのピットで、堀り方いっぽいに、土師器壺が納まっていた。

遺物は、土師器壺(41・43)・黒色土器A類壺(44)が図示できた。

P - 8

S B - 1 の南側平行近くに位置する。平面形が円形を呈する径0.3m、深さ0.46mのピットである。

遺物は、土師器壺(40)・壺(45)が図示できた。

P - 9

P - 8 の北西側の1.8mに位置する。平面形が円形を呈する径0.47m、深さ0.43mのピットである。

遺物は、砥石・土師器壺類などが出土した。

P - 10

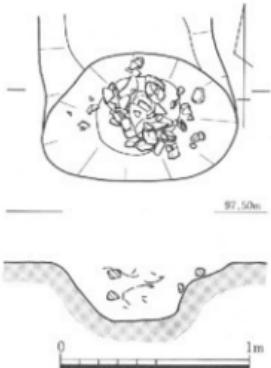
P - 8 の北側3.5mのS K - 3 の底部に位置する。平面形が円形を呈する径0.4m、深さ0.34mのピットである。

遺物は、土師器壺(42)が図示できた。

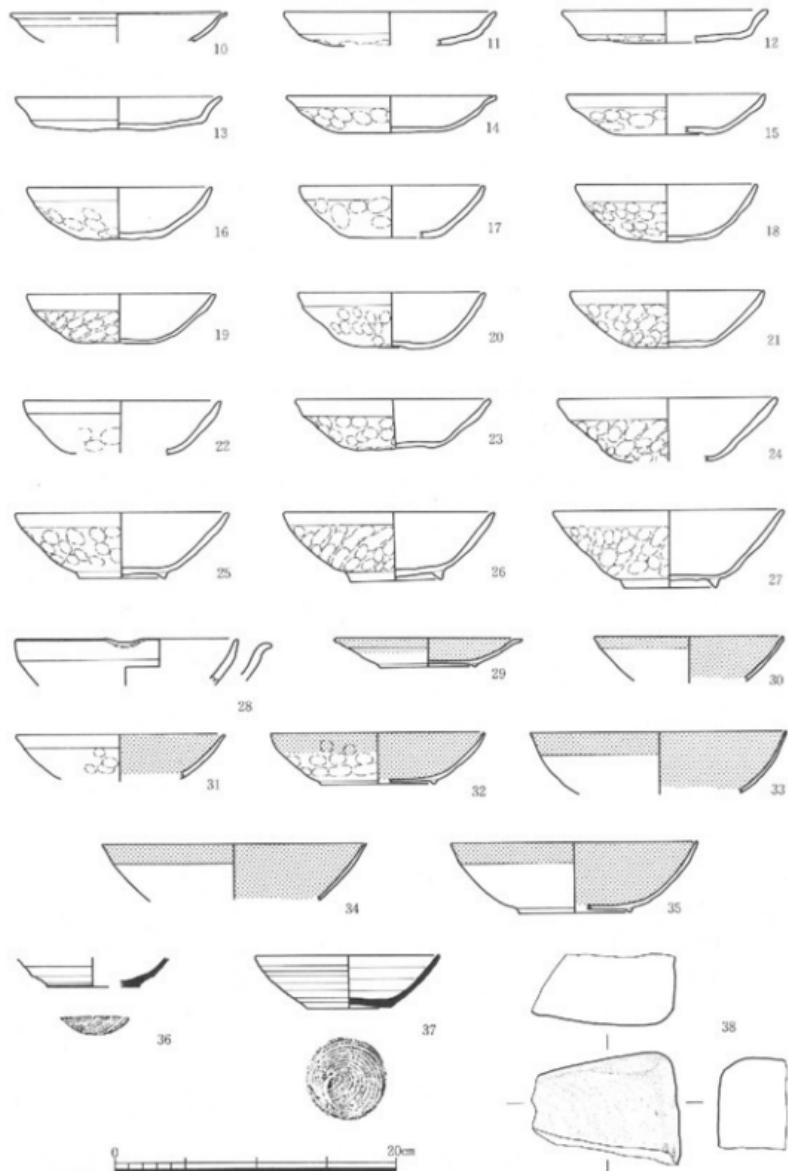
P - 11

P - 10と同様にS K - 3 の底部に位置し、P - 10の北側1mに位置する。平面形が椭円形を呈する長径0.5m×短径0.35m×深さ0.15mのピットである。

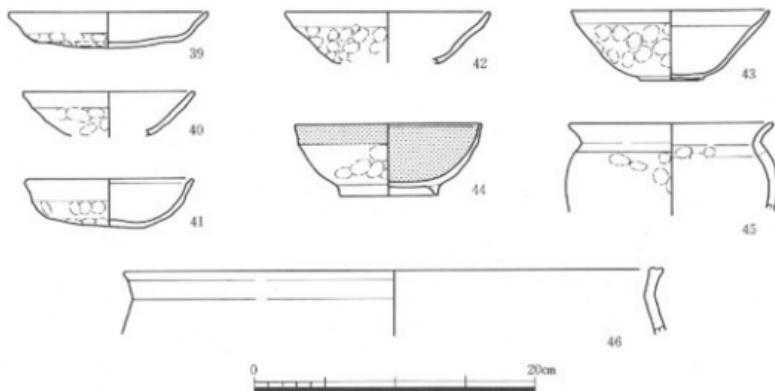
遺物は、土師器壺(46)が図示できた。



第9図 SK-4 土器出土状況図
(1/30)



第10図 SB-3・4出土遺物実測図



第11図 P-7~12出土遺物実測図

P-12

P-11の西側5.5mに位置する。平面形が円形を呈する径0.42m、深さ0.28mのピットである。遺物は、ピットの埋土中位から出土した。土師器皿(39)が図示できた。

C. 中世～近世

この時期の遺構は第1・2

調査区とともに広がっていた。

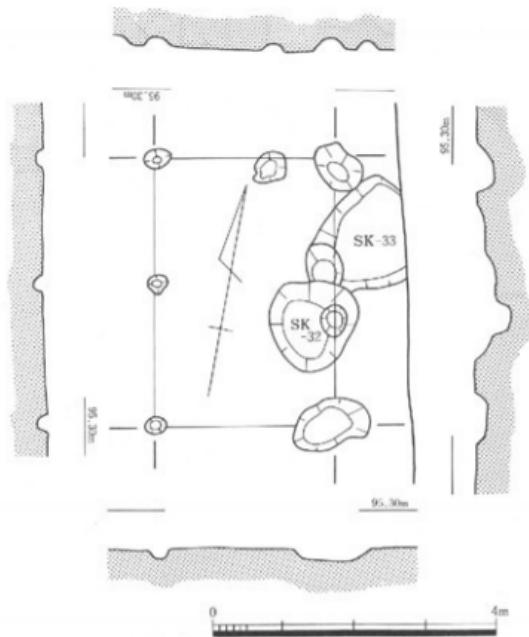
しかし、第1調査区と第2調査区との間には地形的には5mの比高差の段と自然流路があり、遺構は連続せず、遺構の様相は両地区とも相違を示した。

【掘立柱建物】

S B-2

第2調査区の南東側端でSD-7の東側に平行するように検出された掘立柱建物である。規模は桁行2間(3.8m)×梁行1間(2.5m)で調査区外に広がる可能性がある。

主軸方向N-87°-E、柱間は桁行1.9m・梁行2.5m、柱



第12図 S B-2 遺構実測図(1/80)

穴の径0.4m・深さ0.2mを測る。

遺物は建物を構成する柱穴内から出土している。図示できるものは出土していないが羽釜、土師質小皿等の破片がある。

S B - 3

第2調査区の南東側端でS B - 2と並列し、S D - 7の東側に平行するよう検出された掘立柱建物である。規模は桁行2間(4m)×梁行1間(2m)で調査区外に広がるようである。主軸方向N-87°-E、柱間は桁行2m・梁行2m、柱穴の径0.5m・深さ0.3mを測る。平面的にはS B - 2と対を成すものと考えられる。

遺物は、出土していない。

【柵列】

S A - 1

第1調査区の平安時代遺構面の上層で確認された。平面形は方形で1辺16.5mを測る。囲い込まれた内部には、建物等はみられず、わずかにSK - 5が確認されただけである。性格等は不明である。構成するピットは径0.4~0.5m、深さ0.3~0.4mを測る。

遺物は、ピットから土師質皿(47・48)が出土している。

【井戸】

井戸は第1調査区で4箇所、第2調査区で1箇所検出された。いずれも石組の井戸である。

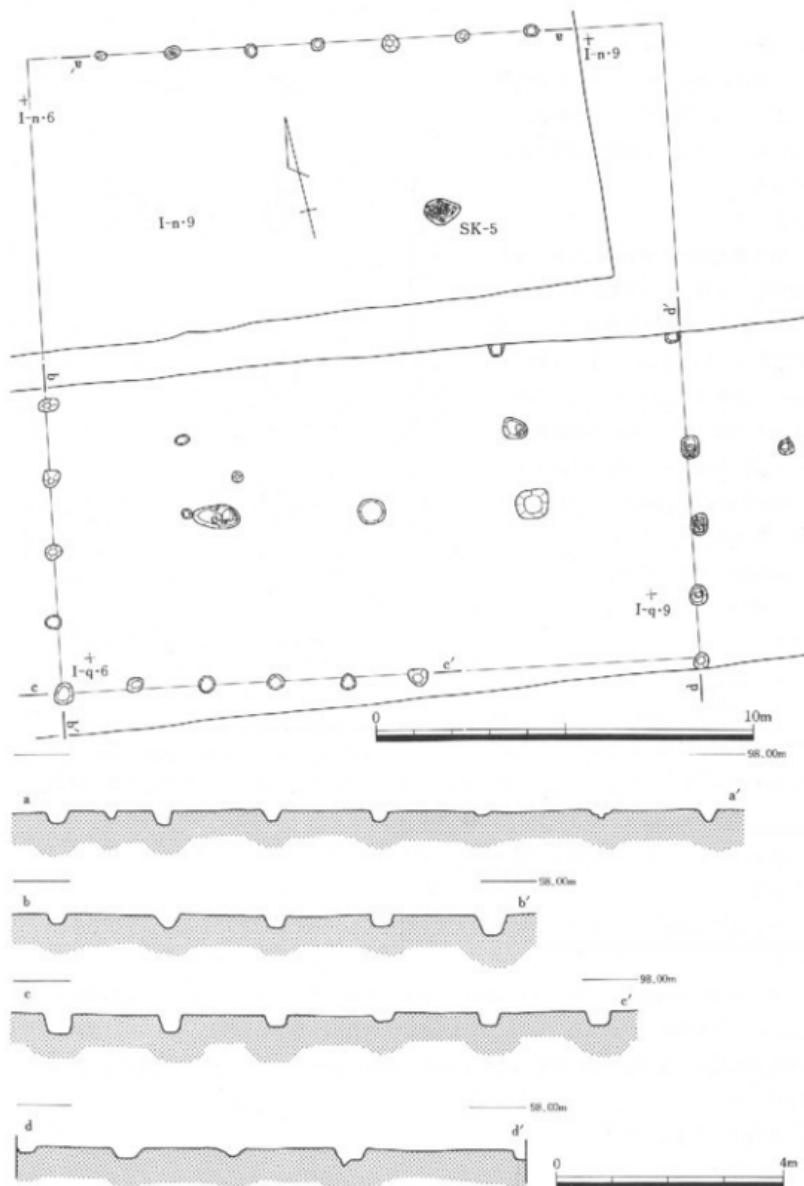
S E - 1

第1調査区の南側で、SD - 1の南端に位置する石組の井戸である。この井戸は調査前から確認され、調査前まで使用されていたものである。このため、詳細な調査は実施していない。石組の内径0.75m、深さ2.9mを測る。石組を構成する石は最も大きなもので、約32×22×20cmの川原石であった。

遺物は、出土していない。

S E - 2

第1調査区のSK - 9の北約1mに位置する石組井戸である。掘り方の平面形は不定形で長軸



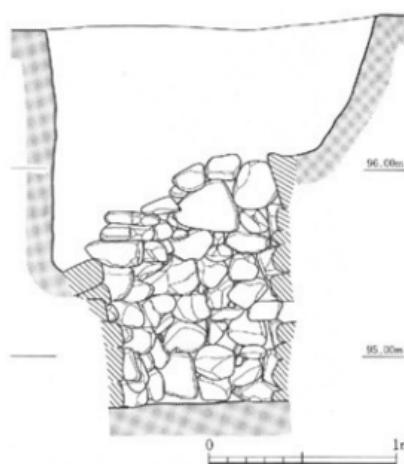
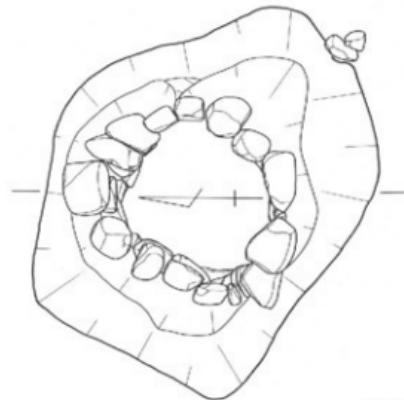
第14図 SA-1 遺構実測図・平面図(1/150)・断面図(1/100)



第15図 SA-1 出土遺物実測図

2.05m、短軸1.6mを測る。石組は地表下0.7mで確認され、石組は底から10段確認され、上部は崩壊していた。現存の石組の内径0.7~0.85m、井戸の深さは2mを測った。

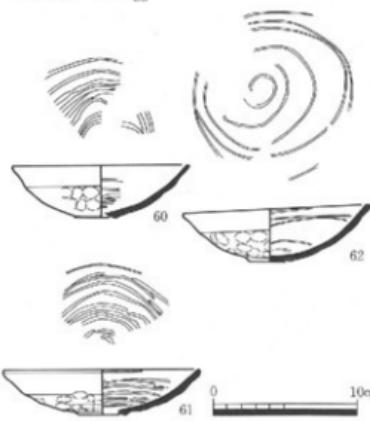
遺物は、土師質小皿(49~51)・瓦器小皿(52~56)・塊(57



第17図 SE-2 遺構実測図(1/30)



第16図 SE-1 遺構実測図(1/30)



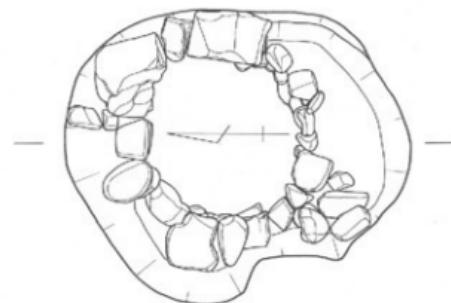
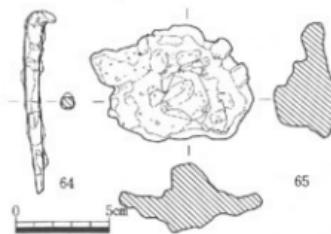
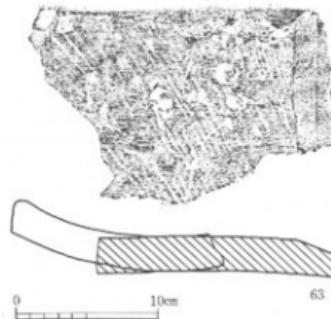
第18図 SE-2 出土遺物実測図(1)

鉄釘（64）・鉄岸（65）が図示できた。

S E - 3

第1調査区のSK-18の北約1mに位置する石組井戸である。掘り方の平面形は不定形な椭円形を呈し、長径1.8m、短径1.3mを測る。石組は南側部分が上から3段程度欠損していたが、ほぼ完存していた。現存の石組の上端内径0.8m、底径0.9m、井戸の深さは2.1mを測った。

遺物は、土師質小皿（66）・羽釜（68～71）・すり鉢（77）・瓦器小皿（67）・羽釜（72～75）・甕（78～81）・



第19図 S E - 2 出土遺物実測図(2)

須恵質練り鉢（76）が図示できた。

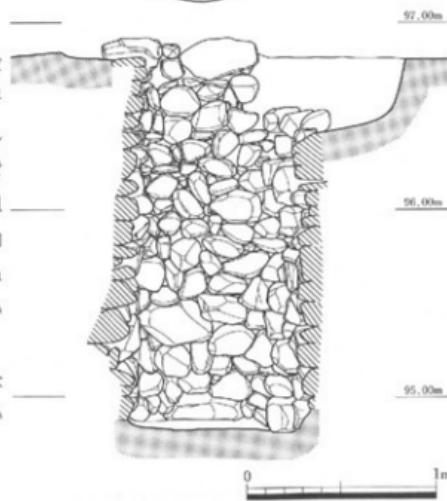
S E - 4

第1調査区のSW-4の東約1m、上段端に位置する石組井戸である。掘り方は平面形が不定形な椭円形を呈すると考えられるが、北側は調査区外の為、詳細は不明である。長径1.8m、短径1.5mを測る。石組はほぼ完存していた。現存の石組の上端内径0.7m、底径0.9m、井戸の深さは1.8mを測り、底部がやや広がる袋状となっている。

遺物は、実測可能なものは出土していないが、土師質小皿・甕・平瓦が出土地してい

S E - 5

第2調査区の調査区南西端で辛うじて検



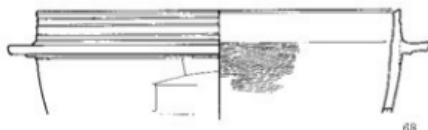
第20図 S E - 3 遺構実測図(1/30)



66



67



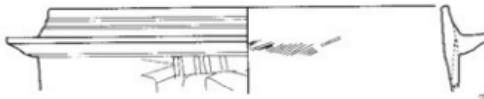
68



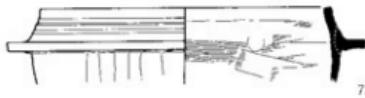
69



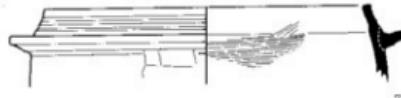
70



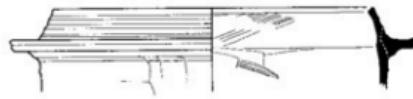
71



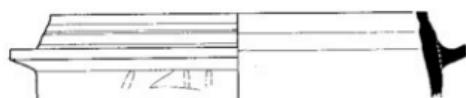
72



73



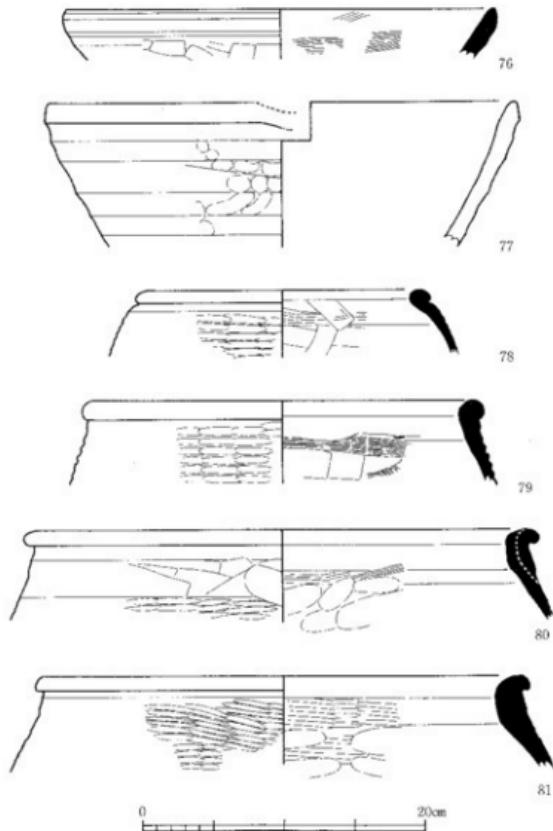
74



75



第21図 S E - 3 出土遺物実測図(1)



第22図 S E - 3 出土遺物実測図(2)

出された石組井戸である。掘り方は一部調査区外のため不明であるが、梢円形を呈すると考えられる。掘り方の径1.5m以上と考えられる。石組はほぼ完存していた。現存の石組の上端内径0.9m、底径0.5m、井戸の深さは1.2mを測り、断面は逆台形を呈している。底部は石組の基底部よりさらに0.2m程度深くなっている。

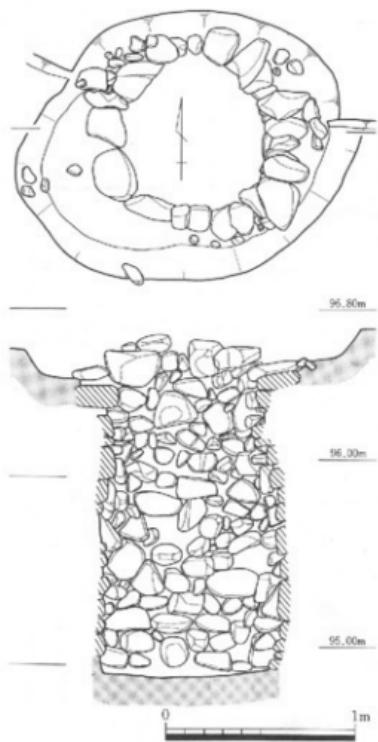
遺物は、土師質皿(82)・羽釜(84)・瓦器塊(83)が図示できた。

[溝]

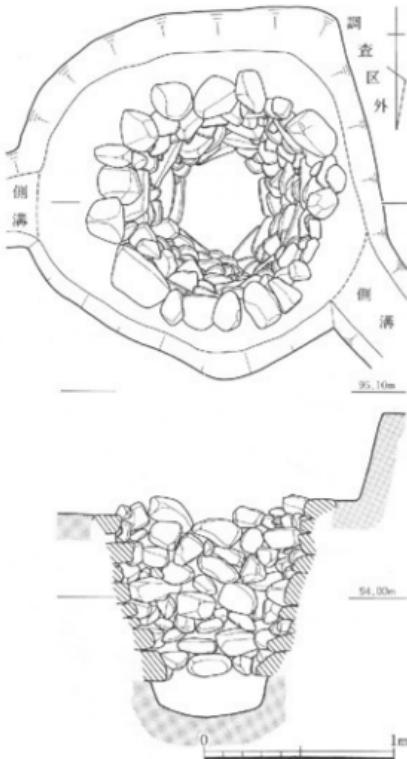
溝は第1調査区で7条、第2調査区で3条検出された。

S D - 1

第1調査区の中央部で検出された当調査区では最長の溝である。溝は北東から南西に11m伸び

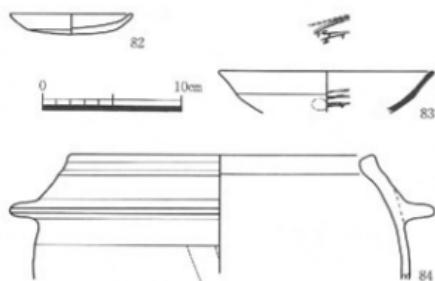


第23図 SE-4 遺構実測図(1/30)



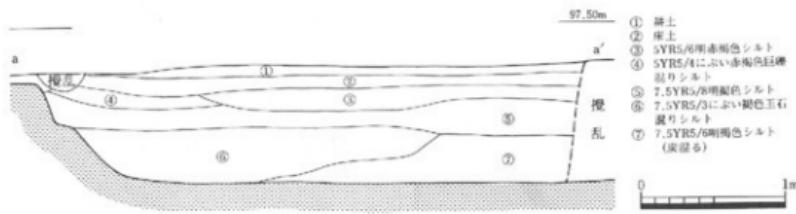
第24図 SE-5 遺構実測図(1/30)

た後直角に屈曲し、南東方向に25m走り、更に彎曲しながら再び北東方向に10m走り、調査区外に伸びる。この溝は大きく2区分でき、北東から南西にのびる部分は幅0.7m、深さ0.2mで一定である。しかし、屈曲し南東に走る部分は最大幅6mであり一定しない。一番深い部分は屈曲部のところで深さ0.8mを測り、河原石が多く落ち込んでいた。



第25図 SE-5 出土遺物実測図

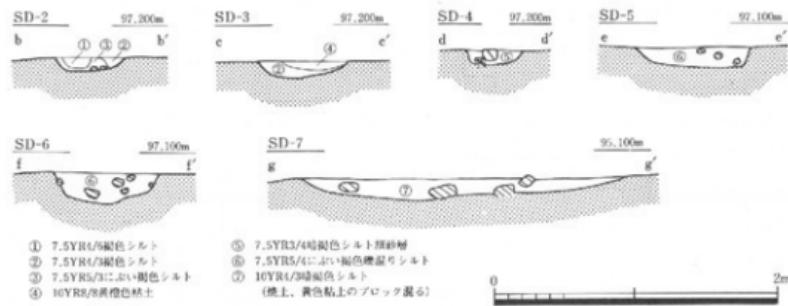
遺物は、上師質小皿(85~91)・瓦質小皿(92~94)・塊(95)・羽釜(98)・すり鉢(99)・青磁塊(96)・白磁皿(97)・須恵質壺(100)・鉄釘(101・102)が出土した。



第26図 SD-1 遺構実測図(1/40)



第27図 SD-1 出土遺物実測図



第28図 SD-2 ~ 7 遺構実測図(1/40)

SD-2

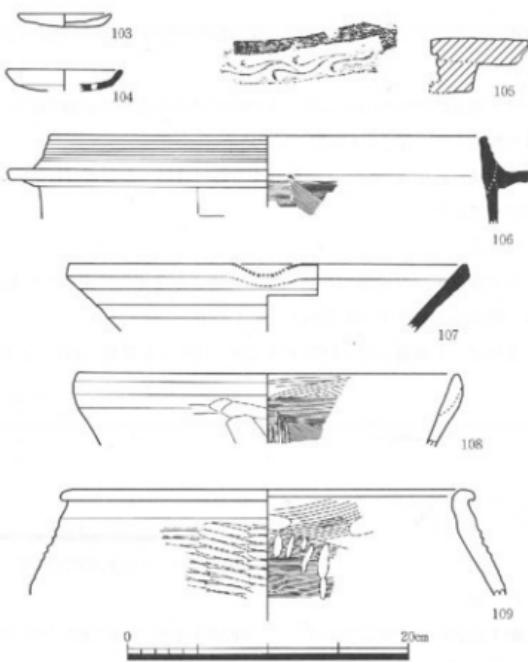
第1調査区の中央部でSW-2の北側1.2mを南西から北東に4.5m走り調査区外に伸びる。溝の幅0.7m、深さ0.1mで一定である。

遺物は、実測可能なものは出土しなかったが、土師質土器の細片が出土している。

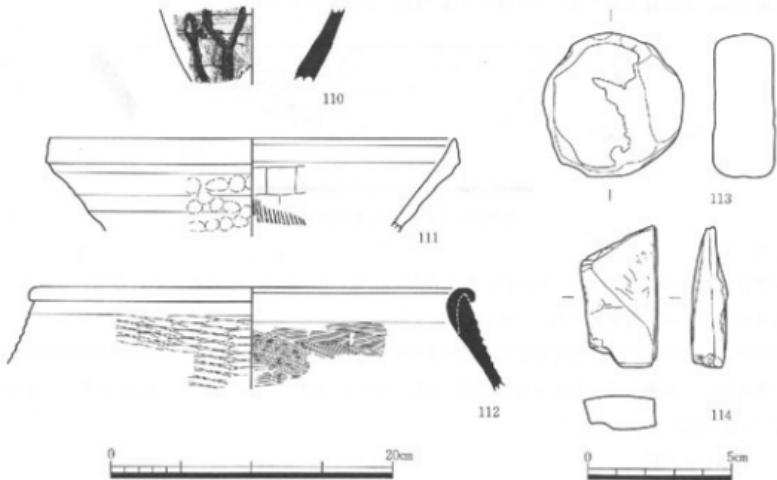
SD-3

第1調査区の中央部でSD-2の北側1.3mを平行に南西から北東に4.5m走り調査区外に伸びる。南西端では北西側に1.2m、南東側に0.5m伸びる。溝の幅0.7m、深さ0.1mで一定である。

遺物は、土師質小皿(103)・すり鉢(108)・壺(109)・瓦



第29図 SD-3 出土遺物実測図



第30図 SD-4 出土遺物実測図

質小皿（104）・羽釜（106）・練り鉢（107）・軒平瓦（105）が図示された。

S D - 4

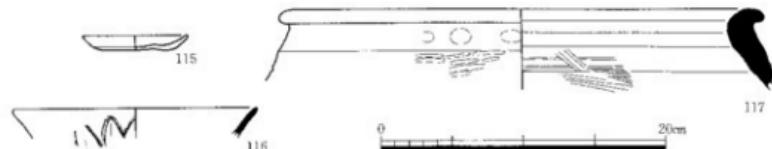
第1調査区の中央部で S D - 1 の中央部から北西に直線的に4.5m走り S K - 20 に合流する。溝の幅は 1 m、深さ 0.1m で一定である。

・遺物は、施釉塊（110）・土師質すり鉢（111）・瓦質甕（112）・瓦二次製品（113）・砥石（114）が図示された。

S D - 5

第1調査区の中央部で S D - 1 の北側 2 m を平行に南西から北東に3.5m走り調査区外に伸びる。溝の幅 1 m、深さ 0.15m で一定である。

遺物は、土師質小皿（115）・青磁塊（116）・瓦質甕（117）が出土している。

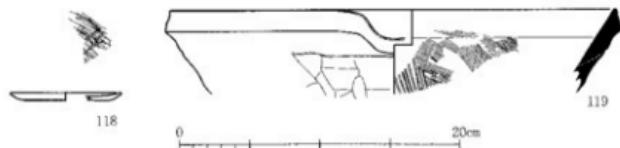


第31図 S D - 5 出土遺物実測図

S D - 6

第1調査区の中央部で S D - 5 の北側 1 m を平行に南西から北東に3.5m走り調査区外に伸びる。溝の幅 1 m、深さ 0.2m で一定である。

遺物は、土師質小皿（118）・瓦質すり鉢（119）が図示された。



第32図 S D - 6 出土遺物実測図

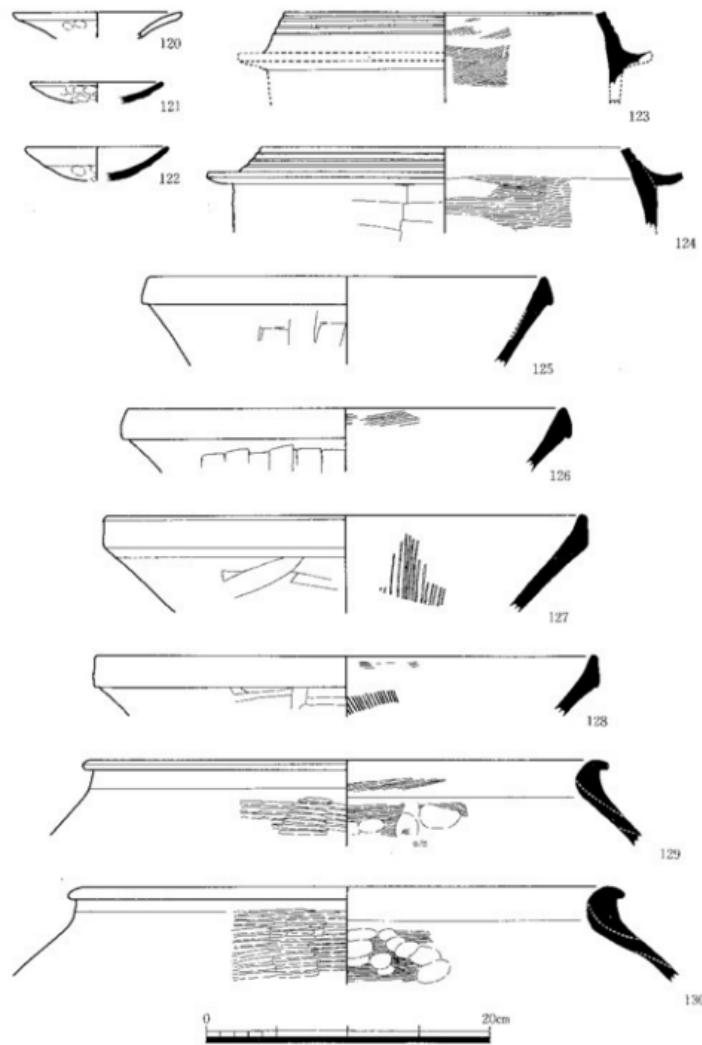
S D - 7

第2調査区の南側東端で、やや西に偏しながら南北に19.5m走り、南側で東に屈曲し 3 m 伸び調査区外に走る。最大幅 3.2m で深さ 0.15m を測る。この溝の内側に当たる東側には S B - 2 ・ 3 が位置し、これらの建物を画する溝の可能性が高い。

遺物は、土師質小皿（120）・瓦質小皿（121・122）・羽釜（123・124）・すり鉢（125～128）・甕（129・130）が図示された。

〔方形石組遺構〕

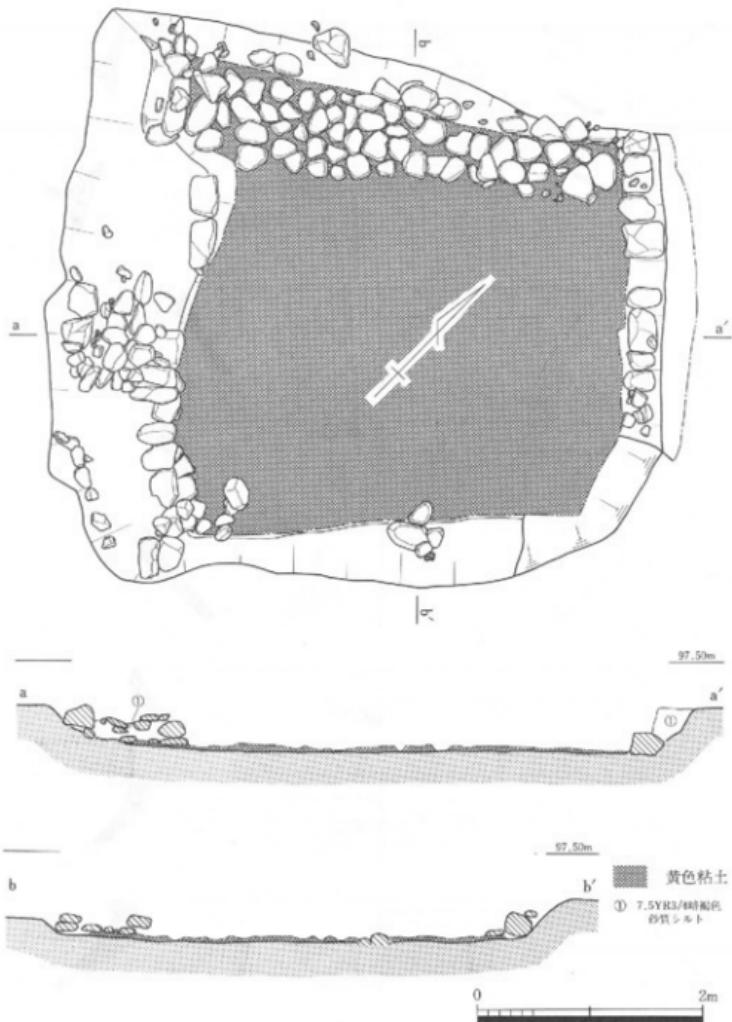
第1調査区で 5 基検出された。



第33図 SD-7 出土遺物実測図

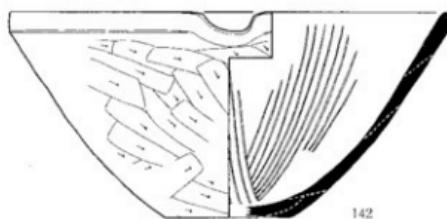
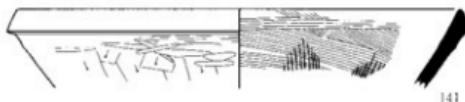
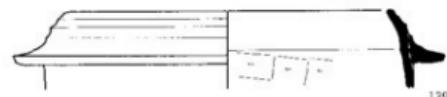
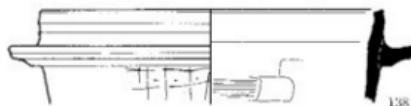
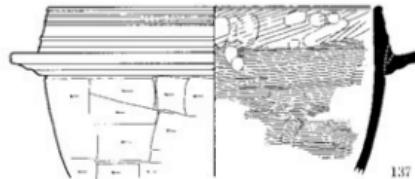
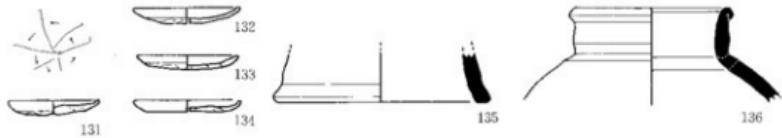
SW-1

第1調査区のSK-6の南東4mに位置する。平面形は台形を呈している。石組は4辺に積まれていたようであるが、現存部は3辺に、1段ないし2段分の30×30×20cm程度の川原石が内側

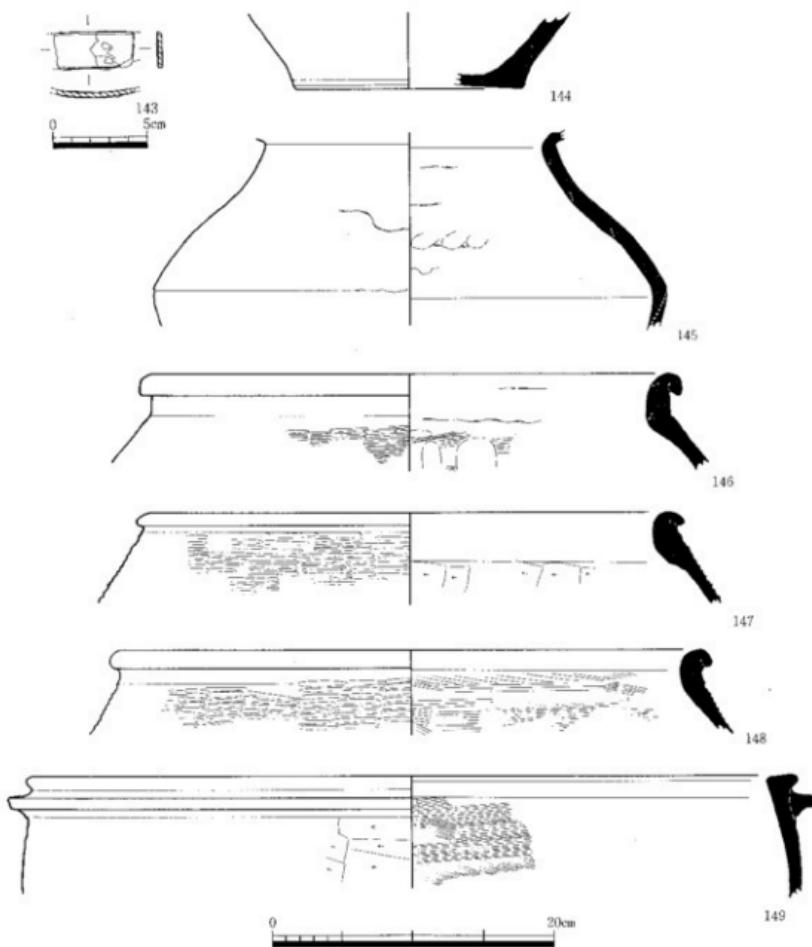


第34図 SW-1 遺構実測図(1/50)

に面を揃えかろうじて確認される。また、底部には約0.1mの厚さで黄色粘土が敷かれ、更にその上に約20×20cm、厚さ8～10cmの川原石が平らな面を上に敷かれていたようで、一部北西側に幅1m程度で残存していた。また、他の底部分には抜き取り穴が確認されている。規模は掘り方の長辺5m、短辺3m、軸通り5.5m、深さ0.4mを測り、主軸方向N-49°-Eを示す。石組の



0 20cm
第35図 SW-1 出土遺物実測図(1)



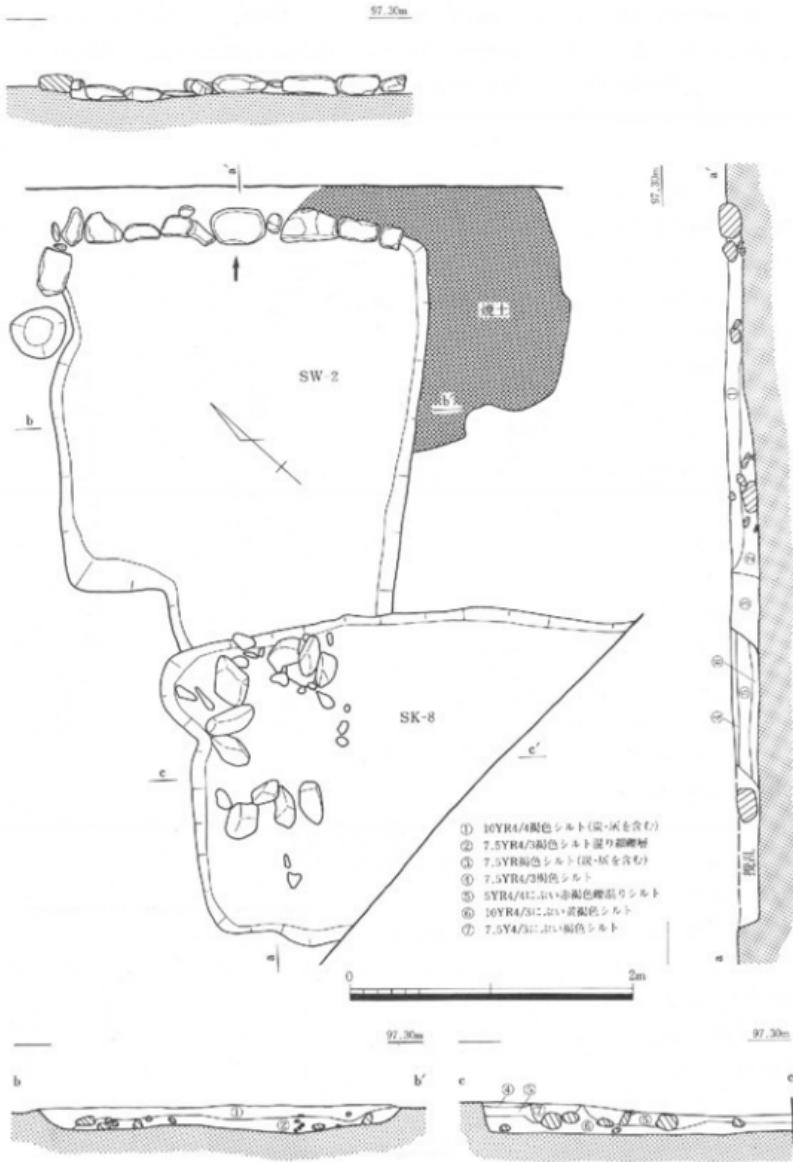
第36図 SW-1 出土遺物実測図(2)

内法は残存部で3.9mを測り、深さ0.3mを測る。

遺物は、土師質小皿（131～134）・須恵質短頸壺（135～136）・瓦質羽釜（137～140・149）・すり鉢（141・142）・甕（146～148）・備前焼甕（144）・常滑焼甕（145）・刀子（143）が図示できた。

SW-2

第1調査区のSW-1の北8mに位置し、SK-8によって切られている。平面形は方形を呈



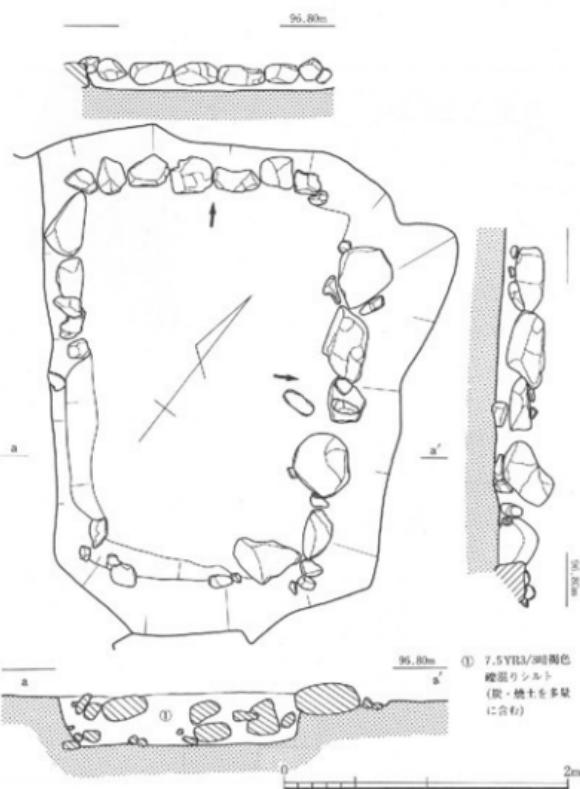
第37図 SW-2, SK-8 遺構実測図(1/40)

し、西南側に突出部分を有する。石組は掘り方いっぽいに4辺に積まれていたようであるが、現存部は北東辺の1辺に、1段のみ約 $20\times20\times15$ cm程度の川原石が内側に面を揃えて確認されている。また、東側の外側には焼土が幅1m程度で広がっている。また、埋土は褐色(10YR4/4、7.5Y4/3・4/6)で炭・焼土を多量に含むシルトが3層確認された。規模は石組の残存する辺が2.6m、北西辺が同じく2.6m、南東辺が2.7m、軸通りが3mを測り、主軸方向N-43°-Wを示す。石組の内法はこれより川原石の幅で0.2m程度小さくなる。

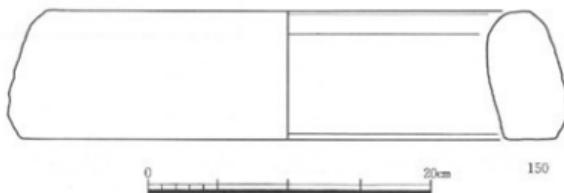
遺物は、実測可能なものは出土しなかったが、土師質羽釜・壺・瓦質塼が出土している。

SW-3

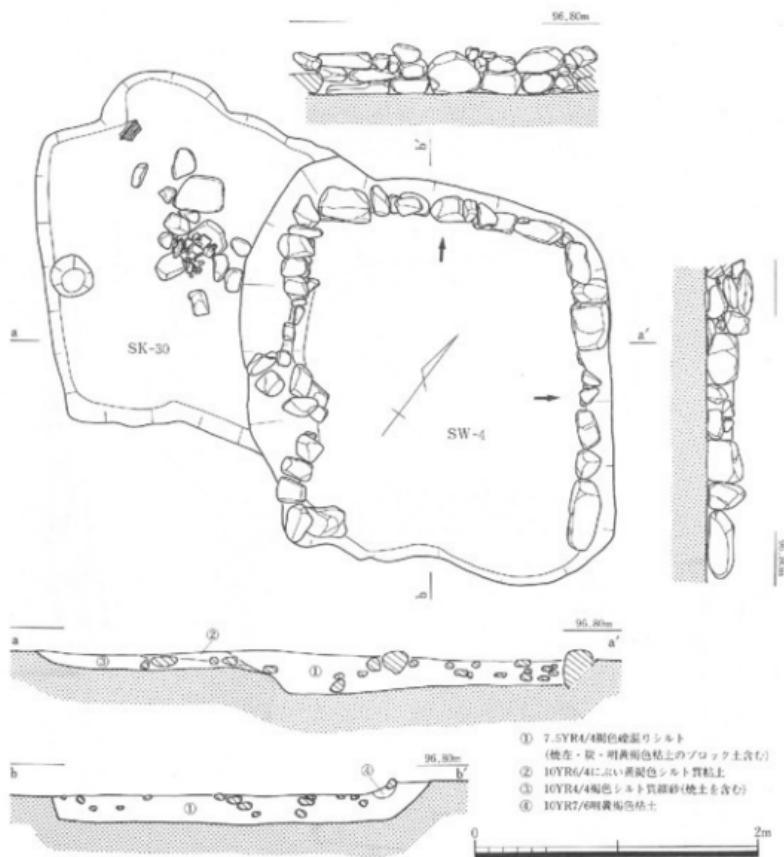
第1調査区のSW-5の西2.5mに位置する。平面形は不整形な長方形を呈する。石組は4辺に積まれていたようであるが、現存部は3辺に1段のみ部分的に見られる。北東辺の石は大きく約 $50\times30\times30$ cm程度の川原石が使用されている。それと比較して北西側は約 $30\times20\times20$ cm程度のものが使用されている。



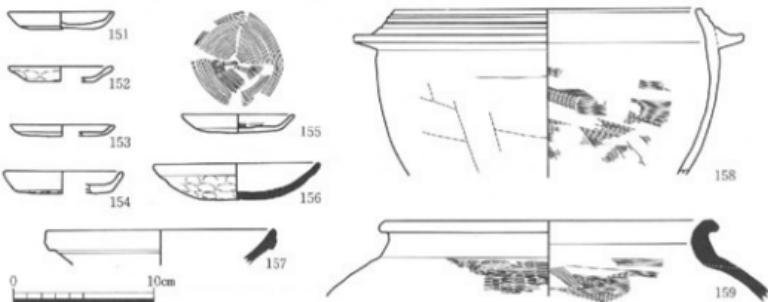
第38図 SW-3 遺構実測図(1/40)



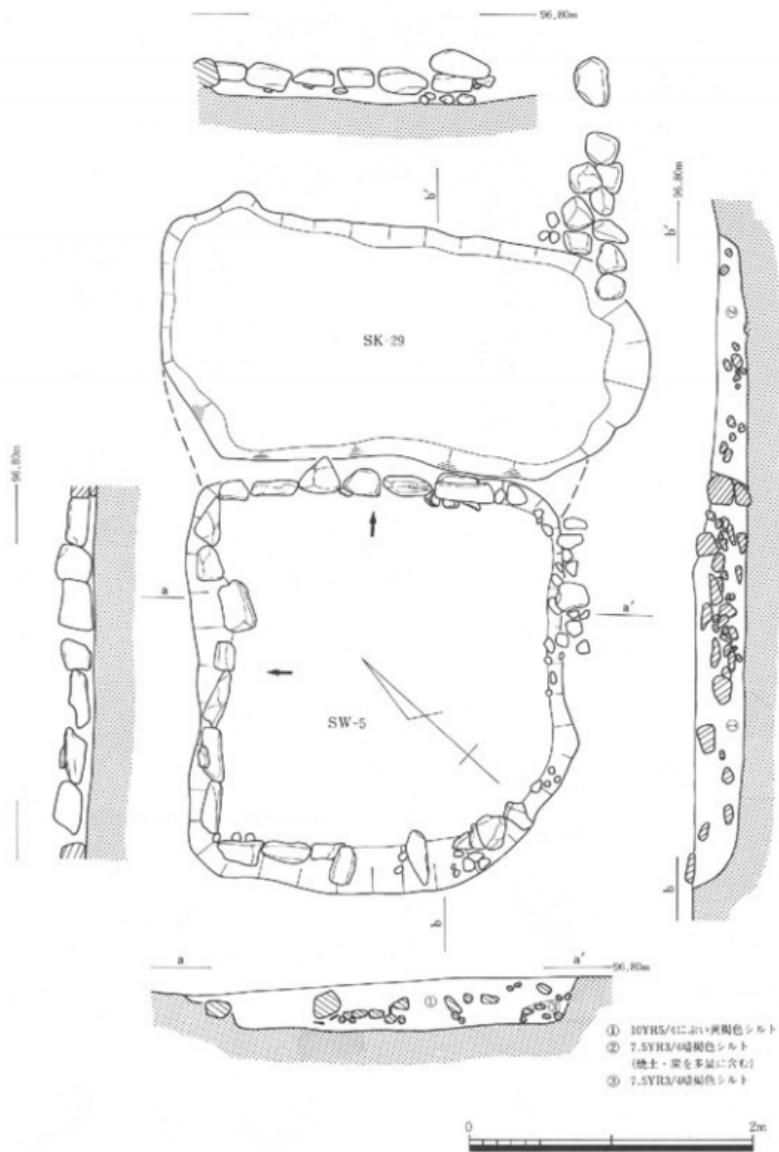
第39図 SW-3 出土遺物実測図



第40図 SW-4, SK-30 遺構実測図(1/40)



第41図 SW-4 出土遺物実測図



第42図 SW-5, SK-29造構実測図(1/40)

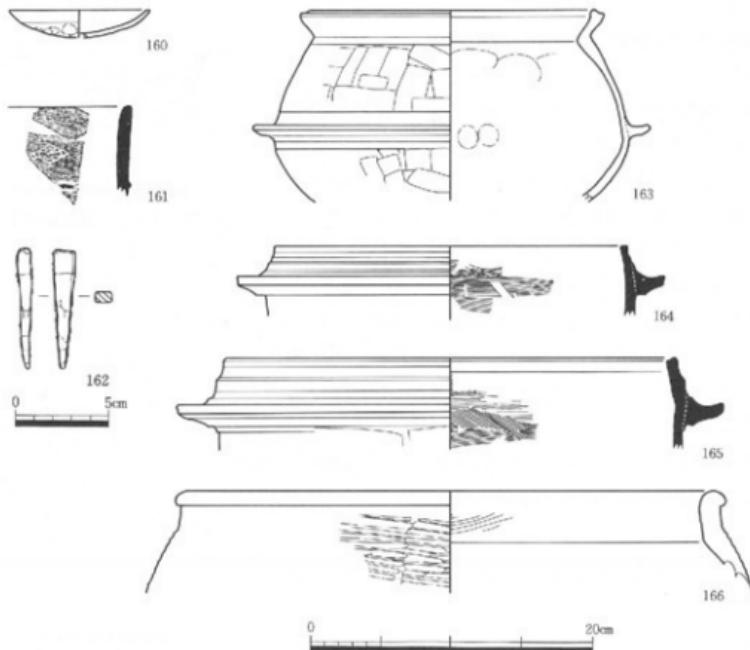
埋土は暗褐色(7.5YR3/3)の炭・焼土を多量に含む疊混じりシルトである。規模は掘り方が長軸3.5m、短軸2.5m、深さ0.35m、石組の内法は残存部で長軸2.5m、短軸1.8m、主軸方向N-38°-Wを示す。

遺物は、鉄型状の土製品(150)が出土し、他には土師質土器、瓦質土器の細片が出土している。

SW-4

第1調査区のSW-3の東4mに位置し、SK-30を切っている。平面形は長方形を呈する。石組は4辺に積まれていたようであるが、現存部は3辺に1段ないし2段が部分的に見られる。北東辺および北西辺の石組はよく残存しており、約30×20×20cm程度の川原石を主に使用し間約20×20×10cm程度の石で詰めている。埋土は褐色(7.5YR4/4)の炭・焼土及び明黄褐色の粘土のブロックを多量に含む疊混じりシルトである。規模は掘り方の長軸2.8m、短軸2.6m、深さ0.35m、石組の内法は残存部で長軸2m、短軸1.8m、主軸方向N-36°-Wを示す。

遺物は、土師質小皿(151~155)・羽釜(158)・瓦器塊(156)・瓦質甕(159)・白磁甕(157)が図示できた。



第43図 SW-5 出土遺物実測図

SW-5

第1調査区のSW-4の南0.5mに位置し、SK-29を切っている。平面形は長方形を呈する。石組は4辺に積まれていたようであるが、石組の現存部は3辺に見られるが、1段のみ残存している。約30×30×20cm程度の川原石が主に使用されている。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)焼土及び炭を含むシルトである。規模は掘り方の長軸3m、短軸2.6m、深さ0.3m、石組の内法は残存部で長軸2.3m、短軸1.8m、主軸方向N-48°-Eを示す。

遺物は、土師質小皿(160)・羽釜(163)・甕(166)・瓦質羽釜(164・165)・火舎(161)・鉄楔(162)が図示できた。

[土坑]

多くの土坑を検出したが、今回説明する土坑については遺物の出土したものに限った。

SK-5

第1調査区の南側、SK-4の北東12mに位置する。平面形は梢円形を呈する。規模は長径0.95m、短径0.67m、深さ0.3mを測る。土坑内部には15×10×15cm程度の河原石が充填されていた。

遺物は、伊万里染付壺(185)が図示できた。

SK-6

第1調査区の中央、SW-1の北西3mに位置する。平面形は不整形な円形を呈する。底部は2段に落ち込み、川原石が多量に落ち込んだ状態で確認された。埋土は4層からなるが、主に2層に別れる。下層は地山とにぶい赤褐色(5YR5/4)シルトのブロック土、上層は暗赤褐色(5YR3/2)シルトからなる。規模は長径5.5m、短径4m、深さ0.9mを測る。

遺物は、土師質小皿(167・169)・台杯皿(170)・瓦質小皿(171)・甕(172・174・176・178・180)・須恵質すり鉢(182・184)・平瓦(186・187)・フィゴ羽口(188)・石鍋(189)が図示できた。

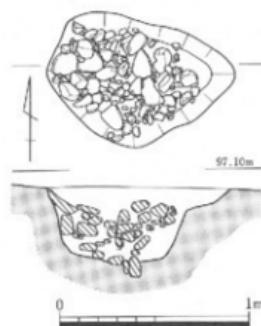
SK-7

第1調査区のSK-6の南西2mに位置する。平面形は梢円形を呈する。規模は長径5.5m、短径4m、深さ0.9mを測る。主軸方向N-59°-Eを示す。

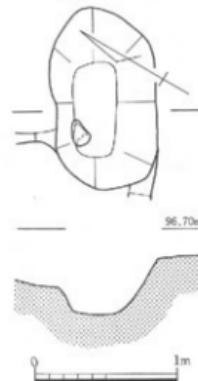
遺物は、土師質小皿(168)・瓦器甕(175・177・181)・須恵質すり鉢(183)・不明鉄製品(190)が出土している。

SK-8

第1調査区のSW-2の南西側端を切って位置する。平面形は長方



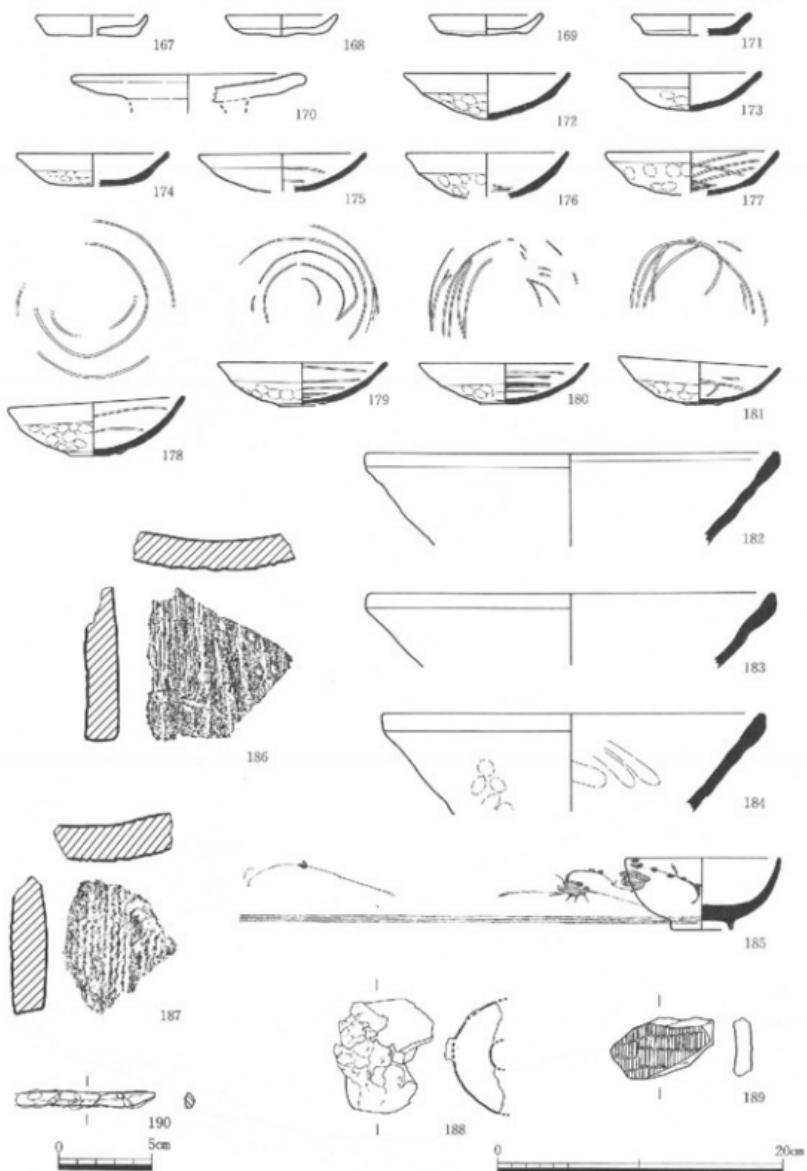
第44図 SK-5 遺構実測図
(1/30)



第45図 SK-7 遺構実測図
(1/40)



第46図 SK-6 遺構実測図(1/40)



第47図 SK-5~7 出土遺物実測図

形を呈するが、南側は一部の搅乱と SK-6 によって切られ、全容は判明しない。土坑中には最大約 $40 \times 30 \times 20$ cm の川原石が北西側に落ち込んでいた。埋土は上層から褐色 (7.5YR4/3) シルト・にぶい赤褐色 (5YR4/3) 糜混じりシルト・にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト・にぶい褐色 (7.5YR4/3) シルトで焼土塊を含んでいる。規模は残存長軸 3.3m、短軸 2.1m、深さ 0.2m を測る。主軸方向は N-46°-W を示す。

遺物は、青磁塊 (237) が図示できた。

SK-9

第 1 調査区の SK-8 の南西側 1 m に位置する。平面形は長方形を呈するが、南側は一部の搅乱と SK-6 によって切られ、全容は判明しない。埋土は上層から褐色 (7.5YR4/3) 細砂混りシルト・焼土層・暗褐色 (7.5YR3/4) 細砂混りシルト・褐色 (7.5YR4/6) 細砂混りシルトで、すべての層に焼土と炭が多量に含まれている。規模は残存長軸 1.7m、短軸 1.35m、深さ 0.35m を測る。主軸方向は N-42°-W を示す。

遺物は、瓦質小皿 (211) が図示できた。

SK-10

第 1 調査区の SK-9 の西側に近接する。平面形は長方形を呈すると考えられるが、搅乱ため全容は判明しない。

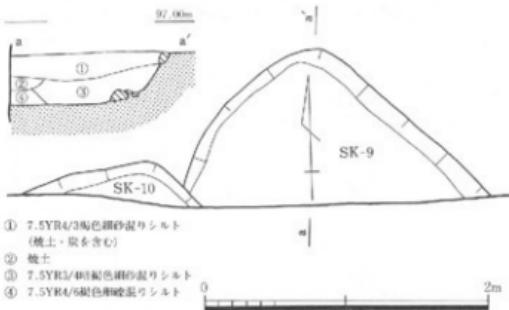
規模は残存長軸 1.2m、短軸 0.25m、深さ 0.1m を測る。主軸方向は N-42°-W を示す。

遺物は、瓦質小皿 (212) が図示でき

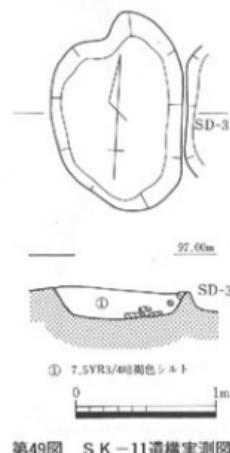
た。

SK-11

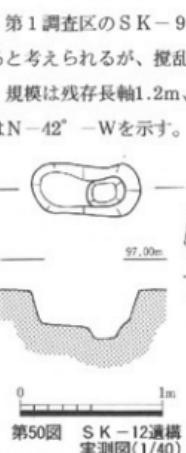
第 1 調査区の SE-3 の北側 1 m に位置する。平面形は不整形な梢円形を呈する。東側には SD-2 が接している。埋土は暗褐色 (7.5YR3/4) シルトの単層である。規模は長径 1.4m、短径 0.9m、深さ 0.2m を測る。主軸方向は N-0°-W を示す。



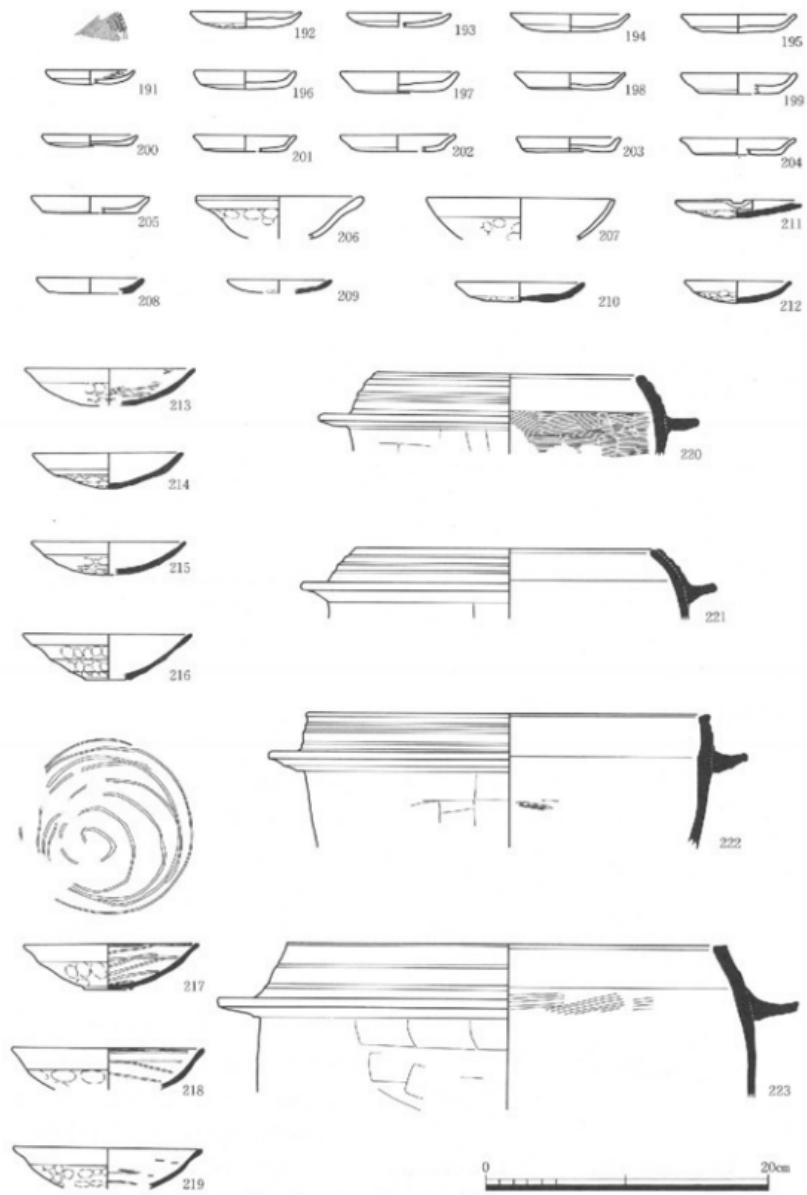
第48図 SK-9・10遺構実測図(1/40)



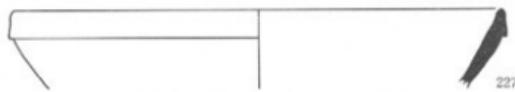
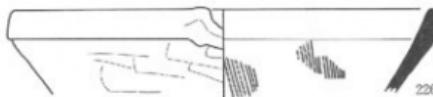
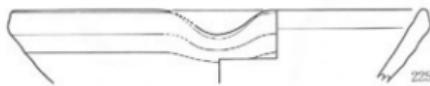
第49図 SK-11遺構実測図



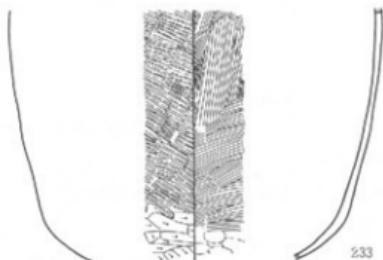
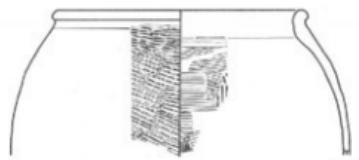
第50図 SK-12遺構実測図(1/40)



第51図 SK-8~41出土遺物実測図(1)

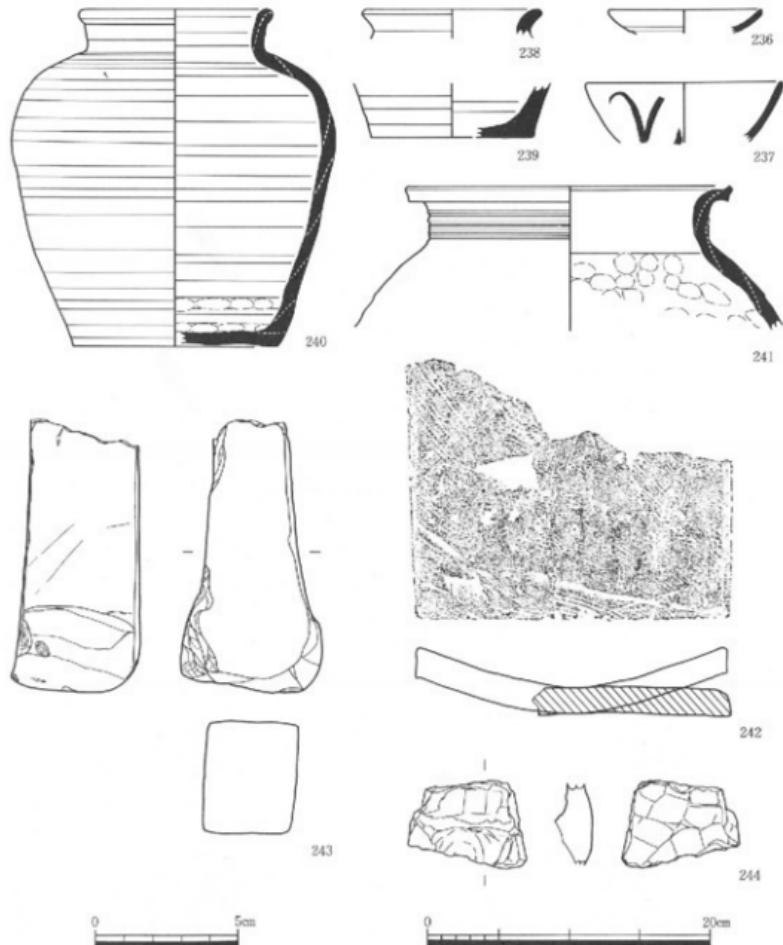


0 20cm



0 40cm

第52図 SK-8~41出土遺物実測図(2)



第53図 SK-8～41出土遺物実測図(3)

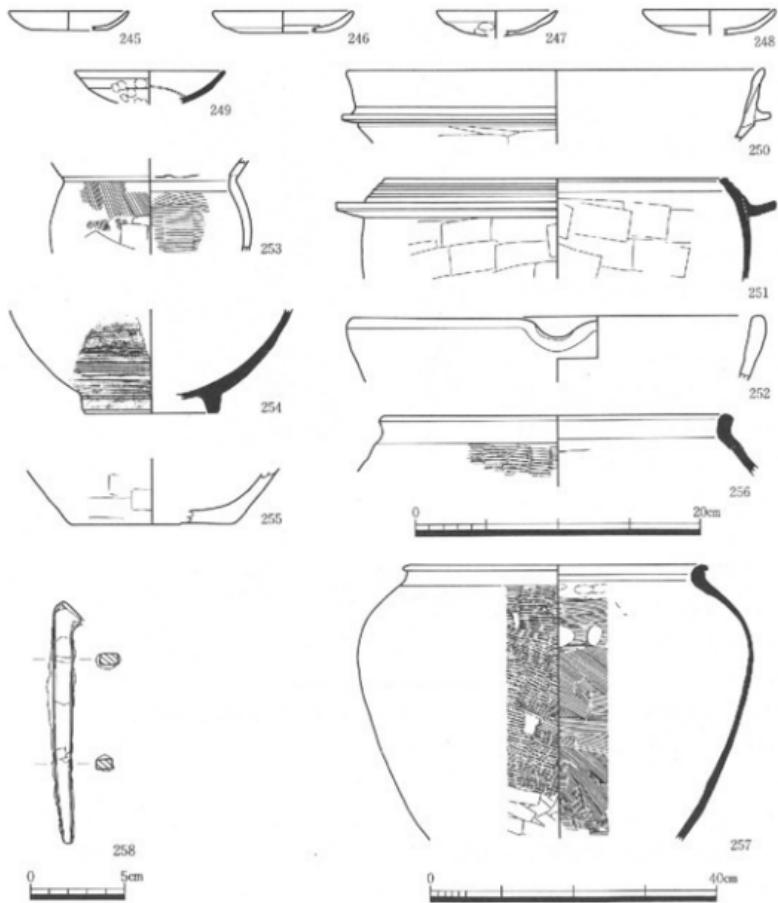
Wを示す。

遺物は、土師質小皿（200）が図示できた。

SK-12

第1調査区のSE-2の西側0.5mに位置する。平面形は不整形な椭円形を呈する。規模は長径0.75m、短径0.35m、深さ0.3mを測る。主軸方向はN-90°-Wを示す。

遺物は、土師質小皿（201）・塊（207）・壺（228）が図示できた。



第54図 SK-8~41出土遺物実測図(4)

S K - 13

第1調査区のSK-14の南側に接するように位置する。平面形は不整形な椭円形を呈する。土坑底部の西側は一段深くなっている。規模は長径1.05m、短径0.65m、深さ0.2mを測る。主軸方向はN-48°-Wを示す。

遺物は、土師質小皿(192)・瓦質小皿(210)・瓦器塊(216・218・219)が図示できた。

S K - 14

第1調査区のSE-2の北側2.5mに位置する。平面形は椭円形を呈する。土坑の北側の一部

は搅乱を受けている。土坑内部には最大 $40 \times 30 \times 20$ cmの河原石が充填されており、下層から土器類が出土している。土坑の南側の壁面の一部は火を受け、赤褐色に変化している。また、出土した河原石も火を受けている。埋土は暗灰黄色(2.5YR4/2)シルトの単層である。規模は長径2.25m、短径0.9m、深さ0.23mを測る。主軸方向はN-41°-Eを示す。

遺物は、土師質小皿(206)・鍋(224)・甕(230・233)・須恵質短頸壺(240)・甕(238)が図示できた。

S K - 15

第1調査区のS D - 1の北側屈曲部分の北側1mに位置する。平面形は不整形な梢円形を呈する。規模は長径0.95m、短径0.63m、深さ0.55mを測る。

遺物は、土師質小皿(191・197)が図示できた。

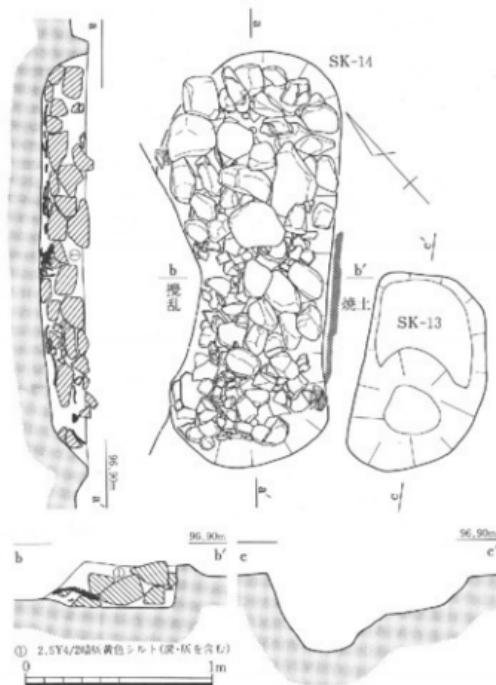
S K - 16

第1調査区のS K - 15の北側1mに位置する。平面形は梢円形を呈する。規模は長径0.74m、短径0.7m、深さ0.44mを測る。

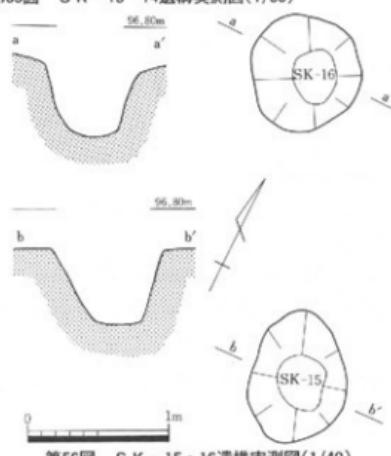
遺物は、土師質小皿(193)が図示できた。

S K - 17

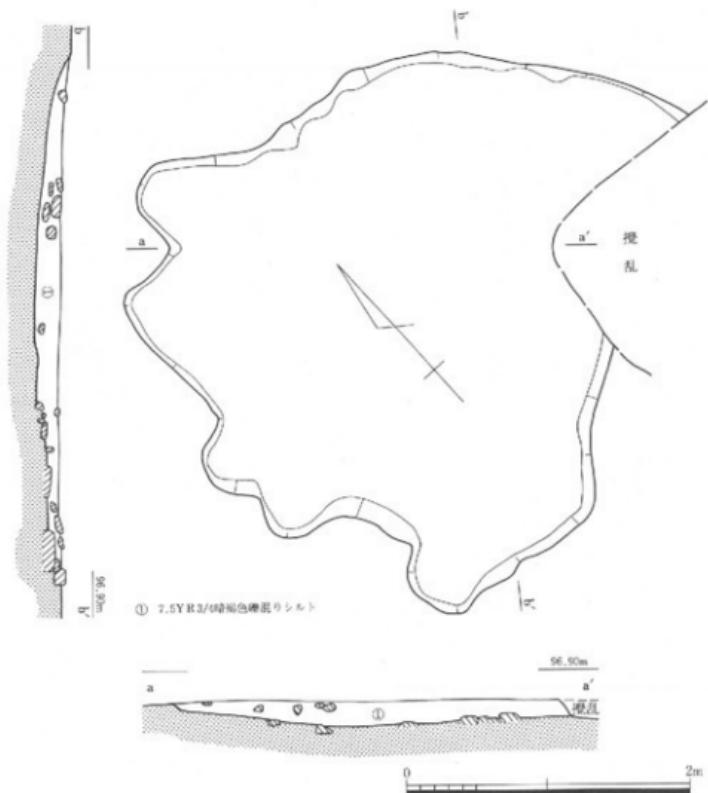
第1調査区のS K - 15の北側2mに位置する。平面形は不定形を呈する大型の土坑である。規模は長径4.2m、短径2.8m、深さ0.18mを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)礫混じりシルトの単層である。



第55図 SK-13 + 14遺構実測図(1/30)



第56図 SK-15 + 16遺構実測図(1/40)



第57図 SK-17遺構測定図(1/40)

遺物は、瓦質小皿（209）・須恵質甕（239）が図示できた。

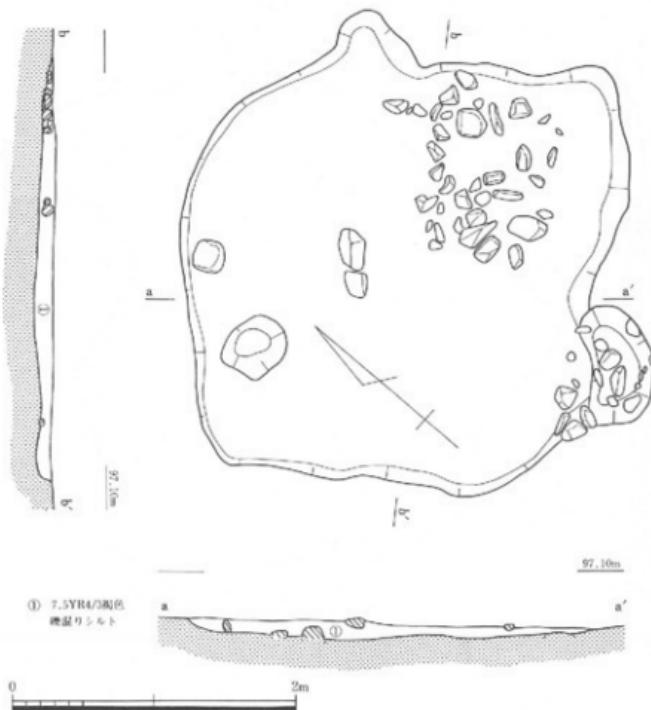
S K-18

第1調査区のSK-17の北側2mに位置する。平面形は不整形な方形を呈する大型の土坑である。内部の東側には川原石が集石している。埋土は褐色（7.5YR4/3）疊混りシルトの単層である。規模は長軸3m、短軸2.8m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-41°-Eを示す。

遺物は、瓦質小皿（208）・甕（213）・羽釜（222）・すり鉢（226）・常滑焼甕（241）が図示できた。

S K-19

第1調査区のSK-18の西側2mに位置する。平面形は不定形を呈する。埋土は褐色（7.5YR 4/4）焼上を含む疊混じりシルトの単層である。規模は長軸1.82m、短軸1.4m、深さ0.4mを測る。



第58図 SK-18遺構実測図(1/40)

遺物は、白磁皿(236)が図示できた。

S K - 20

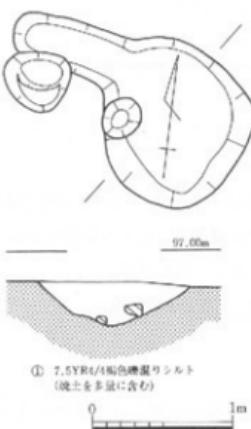
第1調査区のS D-4の北端から広がる。平面形は長方形を呈すると考えられる。規模は長軸6m、短軸2m、深さ0.3mを測る。北側辺は不明である。

遺物は、上師質すり鉢(225)が図示できた。

S K - 21

第1調査区のSK-19の北3mに位置する。平面形は不整形な椭円形を呈する。規模は長径0.76m、短径0.56m、深さ0.3mを測る。

遺物は、瓦質すり鉢(227)が図示できた。



第59図 SK-19遺構実測図(1/40)

S K-22

第1調査区のSK-21の北2mに位置する。平面形は不整形な長方形を呈する。内部の南側には川原石が4点置かれている。埋土は褐色(7.5YR4/3)疊混じりシルトの単層である。規模は長軸1.7m、短軸0.95m、深さ0.16mを測る。

遺物は、土師質小皿(205)が出土している。

S K-23

第1調査区のSK-21の西1mに位置する。平面形は不整形な橢円形を呈する。規模は長径1.1m、短径0.5m、深さ0.2mを測る。

遺物は、瓦器塊(215)が図示できた。

S K-24

第1調査区のSK-22の西1mに位置する。平面形は不定形を呈する。埋土は褐色(7.5YR4/3)疊混りシルトの単層である。規模は長軸1.8m、短軸0.85m、深さ0.16mを測る。

遺物は、砾石(243)

が図示できた。

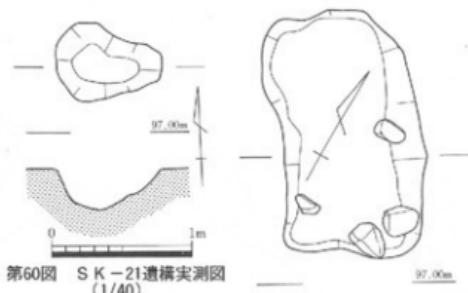
S K-25

第1調査区のSK-22の北1.5mに位置する。平面形は円形を呈する。埋土は褐色(7.5YR4/4)焼土を含む疊混りシルトの単層である。規模は長径0.86m、短軸0.83m、深さ0.38mを測る。

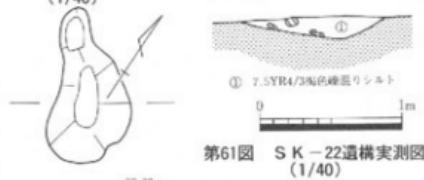
遺物は、土師質小皿(199)・瓦器塊(214)が図示できた。

S K-26

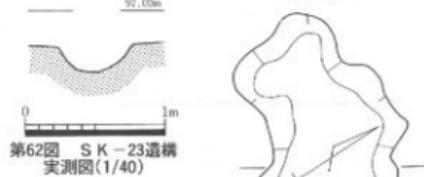
第1調査区のSK-21の西4m位置する。平面形は不定形を呈する。埋土は東側と西側とでは相違し、東側では上層、下層とも褐色(7.5YR4/4)焼土を含む疊混じりシルトで下層のほうが焼



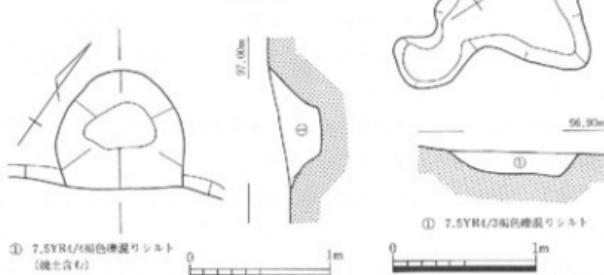
第60図 SK-21遺構実測図(1/40)



第61図 SK-22遺構実測図(1/40)



第62図 SK-23遺構実測図(1/40)

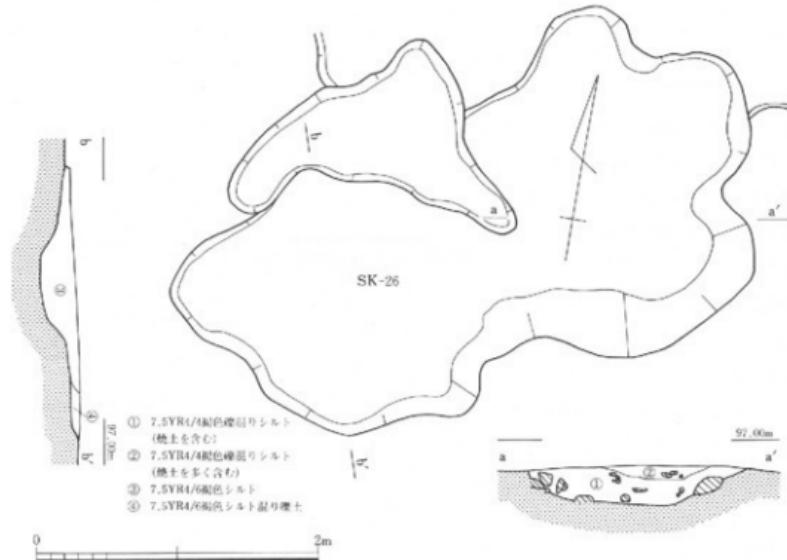


第64図 SK-25遺構実測図(1/40)

第63図 SK-24遺構実測図(1/40)



第63図 SK-24遺構実測図(1/40)



第65図 SK-26遺構実測図(1/40)

土の量が多い。西側は焼土がなく上層は、褐色(7.5YR4/6)シルト、下層は褐色(7.5YR4/6)煙混じシルトである。規模は長軸4m、短軸1.7m、深さ0.28mを測る。

遺物は、土師質小皿(196)・甕(229)・瓦質羽釜(220・221)が図示できた。

S K - 27

第1調査区のSW-3の西側に位置する。平面形は不定形を呈する大型の土坑である。規模は長軸7.4m、短軸2.5m、深さ0.22mを測る。

遺物は、土師質小皿(203)・瓦質甕(234・235)・鉄型(244)が図示できた。

S K - 28

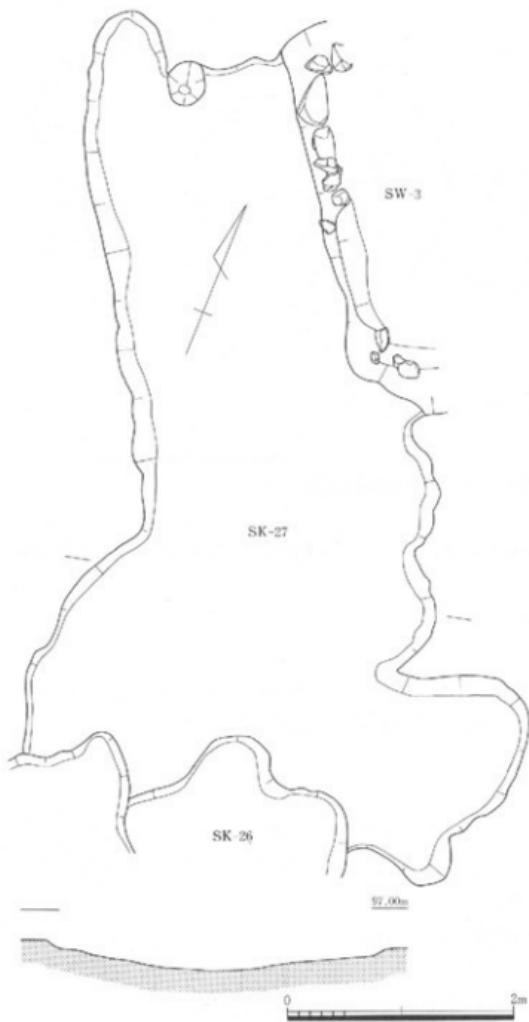
第1調査区のSK-27の西に位置する。平面形は梢円形を呈す。埋土は灰褐色(5YR5/2)シルトの単層である。規模は長径1.3m、短径1.05m、深さ0.35mを測る。

遺物は、土師質小皿(194・195・202)・瓦器塊(217)が図示できた。

S K - 29

第1調査区の北側、SW-5と重複する。平面形は長方形を呈する。土坑の西側はSW-4によって切られているため全容は不明である。埋土は単層で暗褐色(7.5YR3/4)シルトで多量の焼土と炭を含んでいる。規模は検出部分で長軸2.55m、短軸1.32m、深さ0.12mを測る。主軸方向はSW-5と同じである。

遺物は、土師質小皿(204)が図示できた。



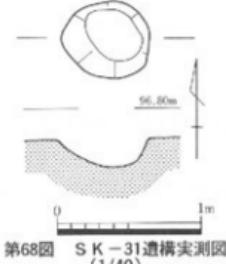
第66図 SK-27遺構実測図(1/50)

YRA/4)シルト細砂で焼土を含んでいる。規模は検出部分で長軸2.5m、短軸2.1m、深さ0.12mを測る。

遺物は、土師質小皿(198)・瓦質羽釜(223)が図示できた。



第67図 SK-28遺構実測図
(1/40)

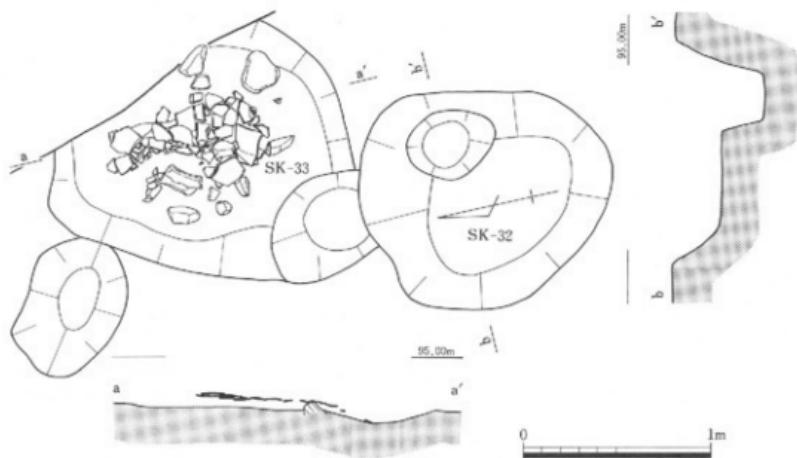


第68図 SK-31遺構実測図
(1/40)

SK-30

第1調査区の北側、SK-4と重複する。平面形は不定形な長方形を呈する。土坑の東側はSK-4によって切られているため全容は不明である。土坑はSK-4よりは15cm程度レベルが高い。埋土は2層からなり上層はにぶい黄褐色(10YR6/4)シルト質粘土、下層は褐色(10

YRA/4)シルト細砂で焼土を含んでいる。



第69図 SK-32・33遺構実測図(1/40)

SK-31

第1調査区の北側、SW-4の北1mに位置する。平面形は円形を呈する。規模は長径0.6m、短径0.55m、深さ0.1mを測る。

遺物は、平瓦(242)が出土している。

SK-32

第2調査区の南側、SB-2の東側平行中央に位置する。平面形は円形を呈する。土坑の東側にはピットが重複している。規模は長径1.3m短径1.15m、深さ0.25mを測る。

遺物は、瓦質甕(256)が図示できた。

SK-33

第2調査区の南側、SB-2の北東に位置し、南側はSK-32に接する。また、東側は調査区外に広がり、全容は不明である。土坑内には瓦質の甕が検出されている。規模は検出された長軸1.6m、短軸1.35m、深さ0.1mを測る。

遺物は、土師質すり鉢(252)・瓦質甕(257)が図示できた。

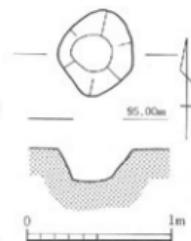
SK-34

第2調査区の南側、SB-3の北側2mに位置する。平面形は梢円形を呈する。規模は長径0.6m、短径0.5m、深さ0.22mを測る。

遺物は、土師質小皿(245)が出土している。

SK-35

第2調査区の南側、SD-7の東側肩部に接して位置する。平面形は円形を呈するが西側の一部がSD-7によって切られている。規模は長



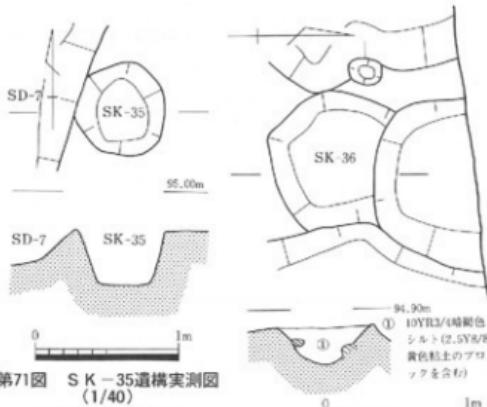
第70図 SK-34遺構実測図(1/40)

径0.65m、短径0.6m、深さ0.4mを測る。

遺物は、鉄釘（258）が図示できた。

S K - 36

第2調査区の南側、SK-35の北側2mに位置する。平面形は円形を呈するが、北側の一部が他の土坑にによって切られている。埋土は単層で暗褐色(10YR3/4)シルトで黄色(2.5Y8/8)粘土のブロック土を含んで



第71図 SK-35遺構実測図
(1/40)

第72図 SK-36遺構実測図
(1/40)

いる。規模は検出長径1m、短径0.9m、深さ0.25mを測る。

遺物は、土師質小皿(247)・すり鉢(255)が図示できた。

S K - 37

第2調査区の中央東側、N V-1の中央に位置する。平面形は円形を呈するが東側の半分が調査区外に広がり、全容は不明である。規模は検出長径3m、短径2.5m、深さ0.25mを測る。



第73図 SK-37遺構実測図(1/40)

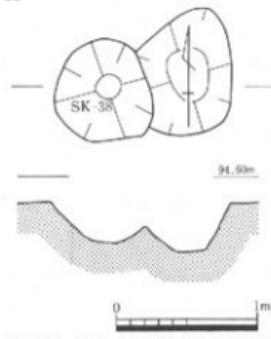
遺物は、瓦器塊(249)が図示できた。

S K - 38

第2調査区の中央東側、N V-1の内側でSK-37の北7mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.72m、短径0.68m、深さ0.3mを測る。

遺物は、瓦質羽釜(251)が出上している。

S K - 39

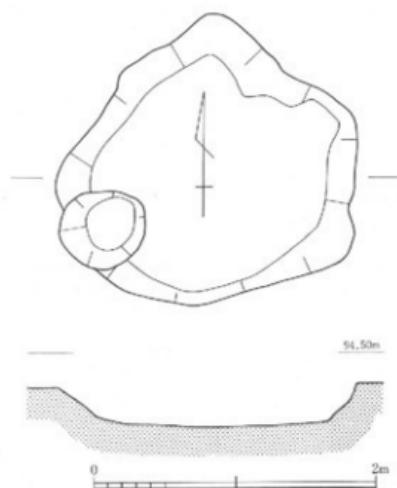


第74図 SK-38遺構実測図(1/40)

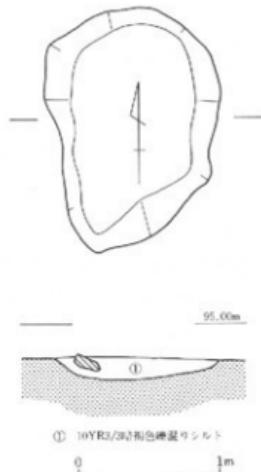
第2調査区の北西側に位置する。平面形は不定形な椭円形を呈する。規模は長径2.18m、短径1.85m、深さ0.3mを測る。

遺物は、土師質甕（253）が出土している。

S K - 40



第75図 SK-39遺構実測図(1/40)



第76図 SK-40遺構実測図(1/40)

第2調査区の北側、調査区端に位置する。平面形は不定形な椭円形を呈する。規模は長径2.18m、短径1.85m、深さ0.3mを測る。埋土は単層で、暗褐色（10YR3/3）疊混りシルトである。

遺物は、土師質小皿（248）・刷毛目唐津鉢（254）が図示できた。

S K - 41

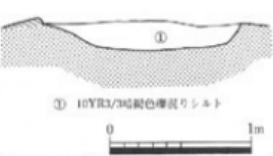
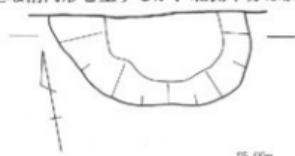
第2調査区の北側、調査区端に位置する。平面形は不安定な椭円形を呈するが、北側半分は調査区外にひろがる。規模は長径1.45m、短径0.65m、深さ0.3mを測る。埋土は単層で、暗褐色（10YR3/3）疊混りシルトである。

遺物は、土師質小皿（246）・抱洛（250）が図示できた。

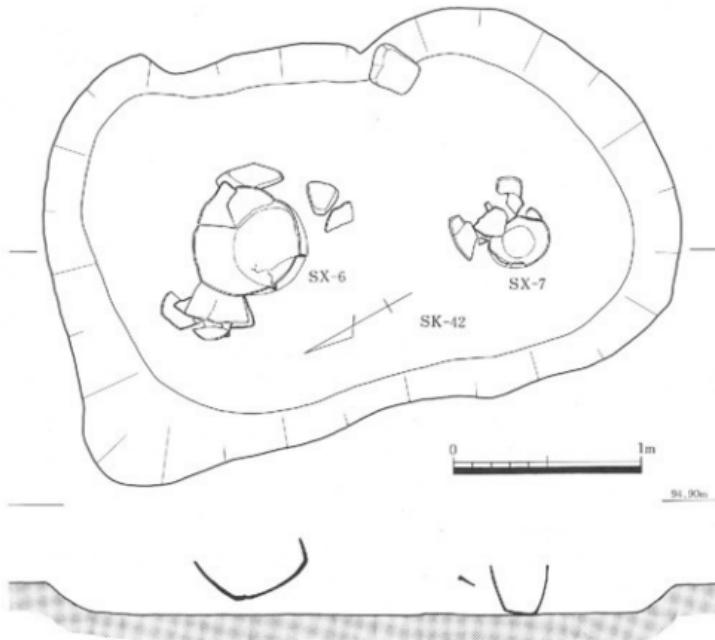
S K - 42

第2調査区の北側に位置する。平面形はやや東に偏した南北に長い不定形な椭円形を呈する。土坑内にはS X - 6・7が検出された。規模は長径3.2m、短径2.0m、深さ0.2mを測る。

遺物は、出土していない。



第77図 SK-42遺構実測図(1/40)



第78図 SK-42, SX-6.7遺構実測図(1/30)

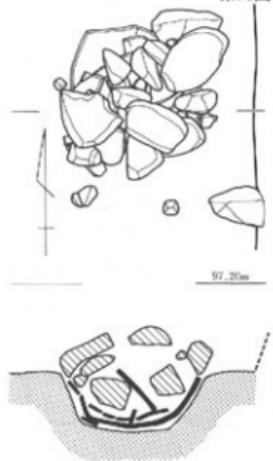
【埋甕】

埋め甕は第1調査区で2、第2調査区で5検出された。

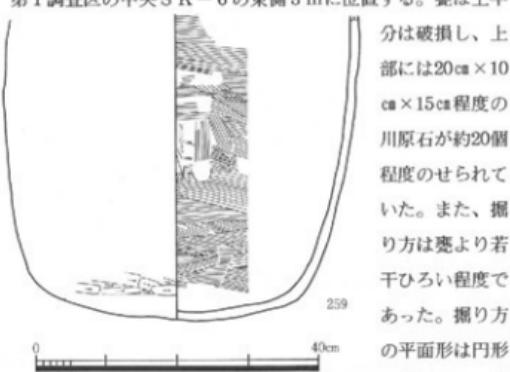
SX-1

第1調査区の中央SK-6の東側3mに位置する。甕は上半

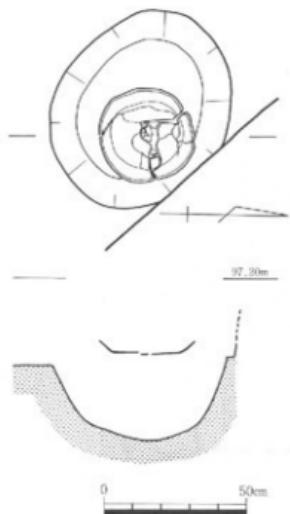
分は破損し、上部には20cm×10cm×15cm程度の川原石が約20個程度のせられた。また、掘り方は甕より若干ひろい程度であった。掘り方の平面形は円形で径0.5m、深



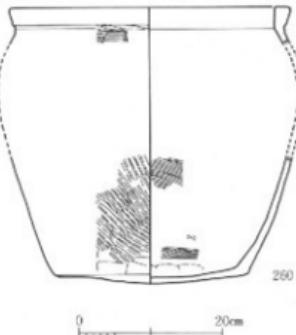
第79図 SX-1 遺構実測図(1/20)



第80図 SX-1 出土遺物実測図



第81図 S X-2 遺構実測図(1/20)



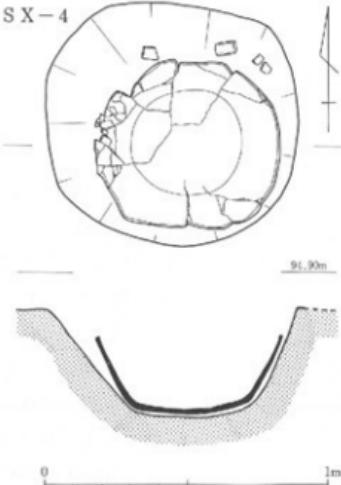
第82図 S X-2 出土遺物実測図
椭円形を呈し長径0.75m、短径0.6m、深さ0.3mを測った。
壺は掘り方の底部より0.3m上に位置していた。

遺物は、土師質壺(260)が図示できた。

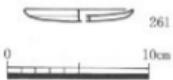
S X-3

第2調査区の南側のS B-2の東側1mに位置する。壺は上半分が削平され下半部と底部しか残存していない。掘り方は平面形が円形を呈し径0.95m、深さ0.4mを測った。掘り方は壺の大きさとあまり違わない程度に掘削してあった。

遺物は、土師質小皿(261)・壺(262)が出土している。



第83図 S X-3 遺構実測図(1/20)



第84図 S X-3 出土遺物実測図

さ0.2mを測った。

遺物は、土師質壺(259)が出土している。

S X-2

第1調査区の北側S E-4の西3mに位置する。壺は削平され底部しか残存していない。

掘り方は平面形が

壺は掘り方の底部より0.3m上に位置していた。

遺物は、土師質壺(260)が図示できた。

S X-3

第2調査区の南側のS B-2の東側1mに位置する。壺は上半分が削平され下半部と底部しか残存していない。掘り方は平面形が円形を呈し径0.95m、深さ0.4mを測った。掘り方は壺の大きさとあまり違わない程度に掘削してあった。

遺物は、土師質小皿(261)・壺(262)が出土している。

第2調査区の南側のS K-40の西側0.8mに位置する。壺は大部分が削平され、底部しか残存していない。掘り方は平面形が椭円形を呈し長径0.85m、短径0.7m、深さは著しく削平されているが0.03mを測った。

遺物は、土師質

壺(263)が図示

できた。

S X - 5

第2調査区の南側のS X - 4の南側1.5mに位置する。掘り方は平面形が梢円形を呈し、長径0.75m、短径0.65m、深さは削平されているが0.15mを測った。掘り方内には $25 \times 20 \times 20$ cm程度の河原石と最大 $10 \times 15 \times 10$ cmの河原石が3点置かれていた。

遺物は、土師質抱洛（264）・甕（265）が図示できた。

S X - 6・7

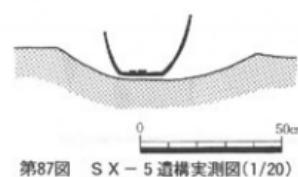
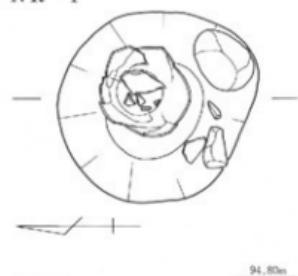
第2調査区の南側のS K - 42の内部の北側と南側に据えられていた。北側がS X - 6、南側がS X - 7で、S X - 6は体部から口縁にかけて欠損しS X - 7は小型の甕で口縁部が欠損していた。

遺物は、土師質甕（266・267）が図示できた。

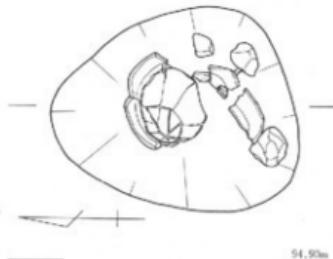
〔自然流路〕

自然流路は全て現在の谷川の旧流路で、調査では2条確認された。しかし、その幅、最終の深さ等は確認されていない。

N R - 1



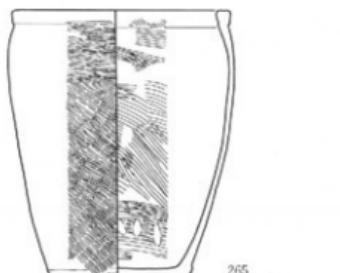
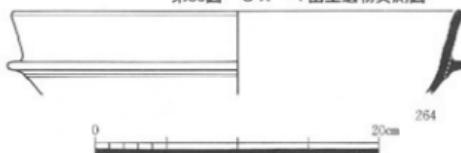
第87図 S X - 5 遺構実測図(1/20)



第85図 S X - 4 遺構実測図(1/20)



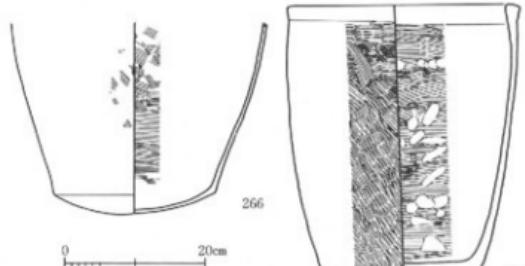
第86図 S X - 4 出土遺物実測図



第88図 S X - 5 出土遺物実測図

第1調査区の西側を南北に流れるもので、調査区の西端で一部肩が確認された。深さは1m程度である。また、第2調査区の西側にも、第1調査区との間に路路N R-2が位置している。これらの位置関係は第2図に示しているが、第1調査区と第2調査区以外は旧路路か低湿地を呈していたようである。

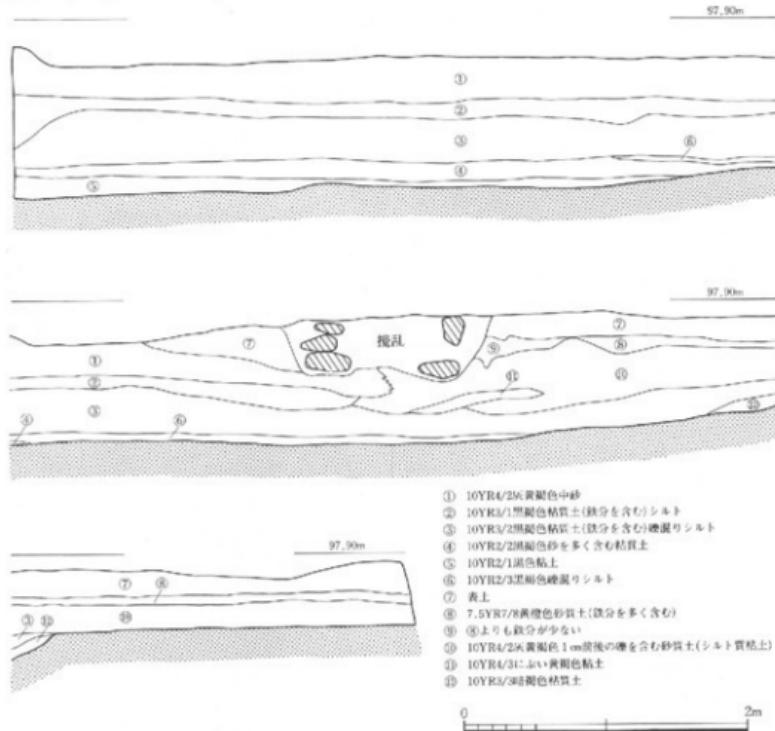
遺物は、土師質小皿（268）・瓦器塊（269）・瓦質羽釜（270）・石鏃（271）が出土している。



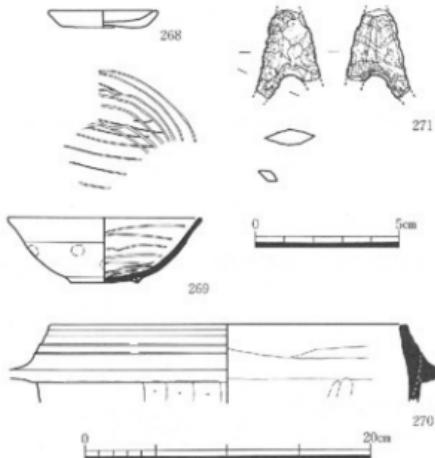
第89図 S X-6出土遺物実測図



第90図 S X-7出土遺物実測図



第91図 N R-1 土層図(1/40)



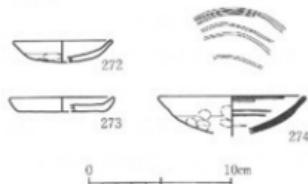
第92図 N R - 1出土遺物実測図
瓦器塊（274）が図示できた。

〔落ち込み〕

N V - 1

第2調査区の中央東側に位置し、東側肩部は調査区外で、全容は不明である。平面形は不定形で、南北に長い。検出長は18m、深さ0.3mで、検出幅6mを測る。

遺物は、土師質小皿（272・273）・



第93図 N V - 1出土遺物実測図

〔遺物出土ピット〕

遺物の出土したピットは10箇所あり、第1調査区で7箇所、第2調査区で4箇所検出され、その中でP-20は明らかに土器埋納を目的としたものであった。

P - 13

第1調査区の中央、S D - 1の東側1mに位置する。平面形が円形を呈する。規模は径0.3m、深さ0.4mを測る。

遺物は、土師質小皿（275）が出土している。

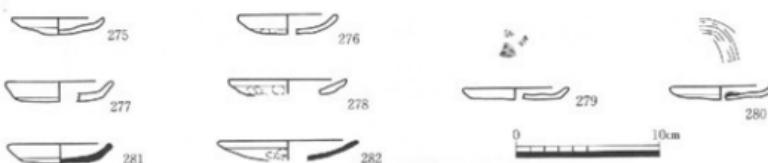
P - 14

第1調査区の中央、S D - 1の東側1.5mに位置する。平面形が円形を呈する。規模は径0.3m、深さ0.26mを測る。

遺物は、土師質小皿（280）が出土している。

P - 15

第1調査区の中央、S K - 8の北側1mに位置する。平面形が橢円形を呈する。規模は長径



第94図 P - 13~19出土遺物実測図

0.4m、短径0.24m、深さ0.3mを測る。

遺物は、瓦質小皿（281）が出土している。

P-16

第1調査区の中央、SK-13の南側0.4mに位置する。平面形が円形を呈する。規模は径0.2m、深さ0.09mを測る。

遺物は、土師質小皿（276）が図示できた。

P-17

第1調査区の中央、SK-11の西側に接して位置する。平面形が円形を呈する。規模は径0.4m、深さ0.19mを測る。

遺物は、瓦質小皿（282）が図示できた。

P-18

第1調査区の北側、SK-25の東側1mに位置する。平面形が梢円形を呈する。規模は長径0.3m、短径0.25m、深さ0.3mを測る。

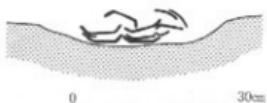
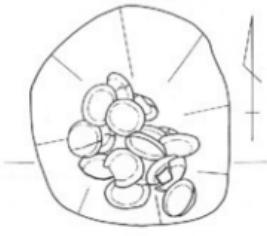
遺物は、土師質小皿（278・279）が図示できた。

P-19

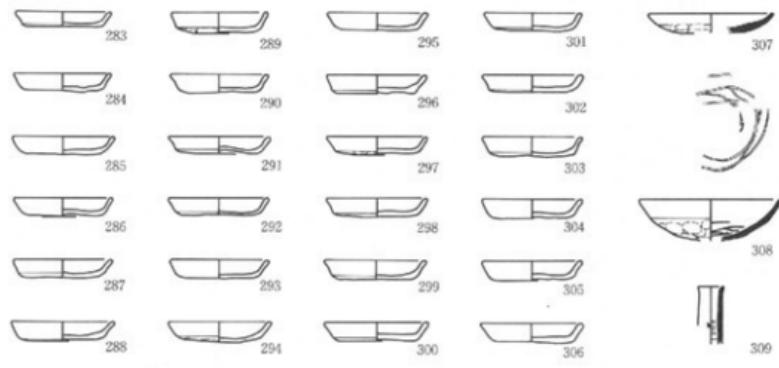
第1調査区の北側、SW-4の北側3.5mに位置する。平面形が梢円形を呈する。規模は長径0.55m、短径0.4m、深さ0.23mを測る。

遺物は、土師質小皿（277）が出土している。

P-20



第95図 P-20遺構実測図(1/10)



第96図 P-20~23出土遺物実測図

第2調査区の中央、N V - 1 の南端から南に0.5mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.4m、短径0.35m、深さ0.05mを測る。ピット内部には土師質小皿が24点埋納されていた。小皿はピットのほぼ中央に積み重ねられた状態で出土した。

遺物は、土師質小皿（283～306）が出土している。

P - 21

第2調査区の中央、N V - 1 と切り合い、S K - 37の西側0.8mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.5m、短径0.45m、深さ0.15mを測る。

遺物は、瓦器塊（308）が出土している。

P - 22

第2調査区の中央、N V - 1 と切り合い、S K - 28の北側2mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.23m、短径0.2m、深さ0.1mを測る。

遺物は、瓦質小皿（307）が図示できた。

P - 23

第2調査区の北側、S K - 42の北側2mに位置する。平面形は円形を呈する。規模は径0.2m、深さ0.1mを測る。

遺物は、染付長頸壺（309）が図示できた。

遺物

本遺跡の出土遺物として、遺構及び包含層中より縄文～中世・近世に至るまでのものが出土した。コンテナ数にして約50箱に及ぶ。大別すると、主に縄文時代ものが1割弱、平安時代のものが約3割、6割が中世・近世のものである。

縄文時代の遺物は、縄文土器片と石皿、磨石、サヌカイト剝片などがみられた。平安時代の遺物は、土師器が9割をしめ、その他若干量ではあるが黒色土器、須恵器などがみられた。中世・近世のものは、土師質土器が4割、瓦器・瓦質土器が4割を占める。その他、須恵質土器、陶磁器、瓦類、石製品、鉄製品などがみられた。

A. 縄文時代の遺物

S K - 1・2 及び包含層より約50片の縄文土器片が出土した。大半が細片で磨耗が著しい為詳細は不明であるが、体部片のはか口縁部、注口部、底部などがみられた。

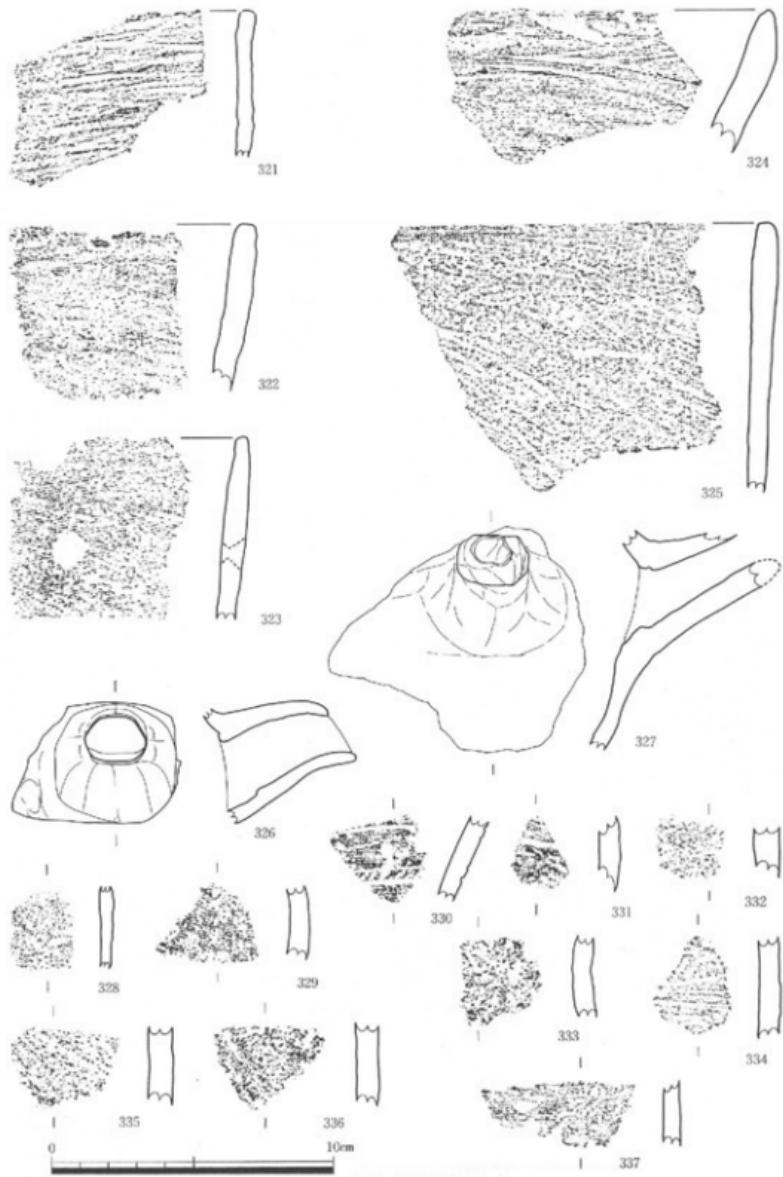
〔縄文土器〕

S K - 1 (1) は体部片であるが、詳細は不明である。S K - 2 出土の土器片は細片の為、実測するに至らなかった。

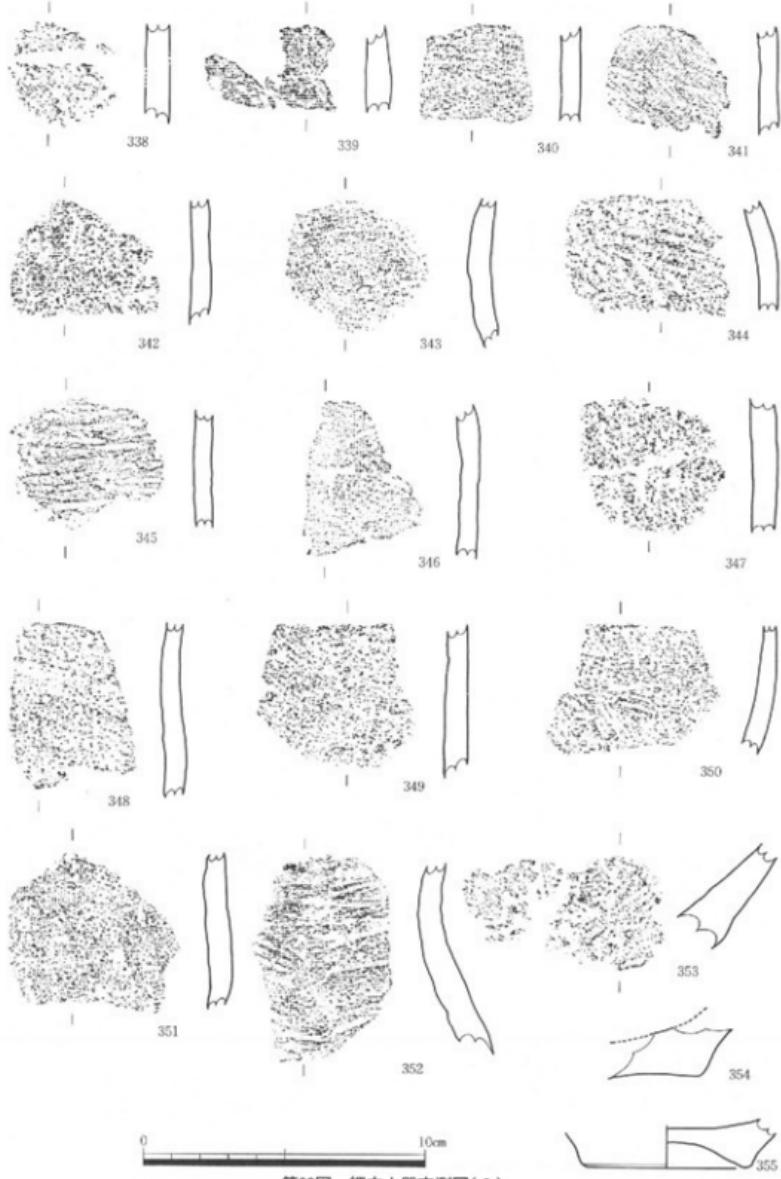
(310、311) は外側に肥厚する口縁部外面に、R Lの斜行縄文を施すもの。北白河上層2期のものと思われる。(312) は外反する波状口縁を呈す深鉢の口縁部片。口縁部の波頂部外面をつまみ出すように山型に突出させ、その部分の口縁部上面に棒状工具による刺突紋を加える。また突出部の両端には一条の沈線がみられる。元住吉山I式に相当すると思われる。(313～325) は



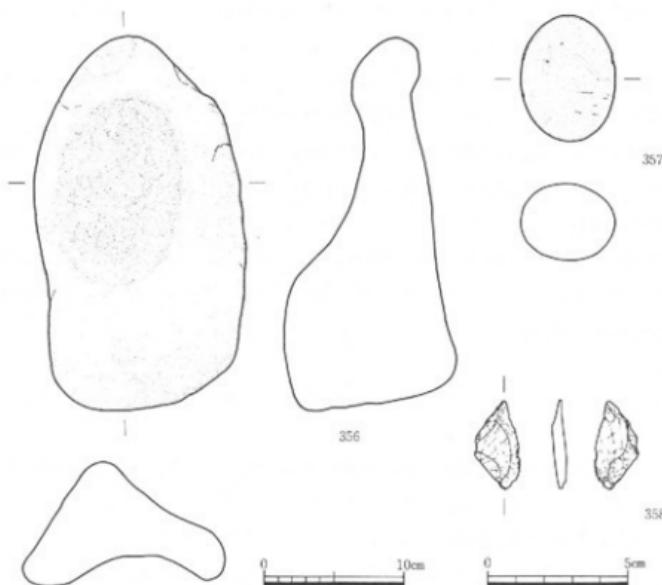
第97図 縄文土器実測図(1)



第98図 縄文土器実測図(2)



第99図 縄文土器実測図(3)



第100図 繩文時代石製品実測図

粗製土器の口縁部片で、口縁部外面に条痕調整を施すもの（314～318、320、321、323～325）、口縁部外面に磨消繩文あるいは紋様を施した後ナデを施すもの（313、319、322）がある。

（326、327）は注口土器の注口部。（326）は先端にかけて細くなるので、注口部先端は緩やかに湾曲し下方を向く。（327）は先端部を欠損するが、直線的に伸びるもの。

（328～353）は体部片。（330）は幅の狭い2本の平行線の間に斜めの刻み目を持ち、その紋様帶の上方に同様の平行沈線を1本施す。（331）は表面に一条の沈線がみられる。この他、外面に擦消繩文あるいは紋様を呈した後ナデを施す。（328、332、333、342、344、347、349、351）外面に条痕調整のみられるもの（334、336、340、341、345、348、350、352）がある。

〔354、355〕は深鉢型土器の底部片。（353）は底部に近い体部片であると思われる。（354）はやや上げ底気味の厚手の平底を呈す。（355）は上げ底状の底部を呈す。

〔石製品〕

石製品として、石鏃、台石、磨石、敲石、サヌカイト剝片が出土した。

（271）N R - 1 出土の四基無茎式の石鏃で、残存長3.15cm、幅1.8cm、厚さ0.55cmを測る。先端及び基部端部を欠損するがほぼ二等辺三角形を呈す。縁辺部には調節剝離が施される。

（356）研磨の台石として使用されたと思われる。縦長26.5cm、横幅14.4cm、厚さ8.9cmを測る。断面がほぼ三角形を呈し、三面の内二面に使用痕がみられる。（357）は（356）と供出した磨石

で、砂岩の梢円形円盤を使用したもの。全体に磨痕、敲打痕がみられる。径9.1cm×6.7cm、厚さ5.5cmを測り、ほぼ手中に収まる。

(358) 全長3.2cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを測るサヌカイトの翼状剝片で、縁辺部の一部を粗く削り、刃部を形成している。石刃として使用されていたと思われる。

出土した縄文時代の遺物は、細片が多く全体を把握できるものはなかったが、粗製の無紋土器が主を成しており、およそ縄文時代後期から晩期に相当すると思われる。

B. 平安時代の遺物

平安時代の遺物は、第一調査区南側の遺構SB-1、SK-3・4、P-7~12及び包含層から出土した。特にSB-1、SK-3・4から土器が一括して出土しており、土師器の他、黒色土器、須恵器などがみられた。

〔土師器〕

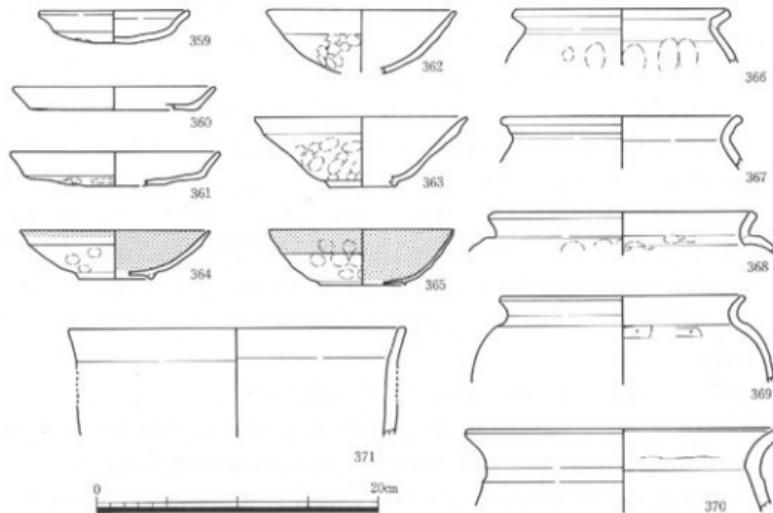
土師器は一括して出土しており皿、壺、塊、片口鉢、甕、壺、土釜などがみられた。

<皿>

皿には、口径約10cmの小皿(359)と口径約14~15cmの皿(10~13、39、47、360、361)がある。中でも、口径約14~15cmの皿には3つのタイプがみられる。

(360)は、平坦な底部から屈曲して立ち上がり、外上方に短く開くもの。

(11~13、39、48、361)は、外面にユビオサエを伴う平底から口縁部は屈曲して立ち上がり、強いヨコナデの為外反し外上方へ開くもの。前者よりやや器高が高い。



第101図 平安時代出土遺物実測図

(10、14) は、外面にユビオサエを伴うやや平坦な底部から、なだらかに立ち上がり口縁部を「て」の字上に強く外反するもので、やや大きめのもの。

<壇>

I (2、5、15~23、42) 口径約13~14cm、器高約3.5~4cmを測り、外面にユビオサエを伴う底部からなだらかに立ち上がり、口縁部が外上方へ開くもの。口縁端部はやや肥厚し丸く取める。南河内を中心に分布する器種で、10世紀前半頃のものと思われる。

II (24~27、43、363) 口径約15cm、器高約4.6~5.5cmを測り、Iに逆三角形のしっかりした高台を伴うもので、橙色を呈す。(43)は口径14cm、器高5cmを測り、器壁が薄くつくりがやや粗なもの。Iより後出するもので、10世紀前半から中頃のものと思われる。

III (41) 口径約12cm、器高約3.4cmを測り、口縁部は内弯して外上方へ立ち上がり、口縁端部内面に沈線を施すもの。全体に歪みがありつくりが粗い。10世紀中頃のものと思われる。

IV (3、40、362) 底部からゆるやかに立ち上がり、内弯しながら外上方へ伸びるもの。口径は(3)が13.8cm、(40)が11.9cm、(362)が13.6cmを測る。

<壇>

S K - 1 (4) は口縁部が内弯して外上方に伸び、端部をやや尖り気味に取めるもので、作りが粗く、器壁が薄いことから粗製高台付壇と思われる。

<片口鉢>

S K - 3 (28) は口径15.6cmを測る小型の片口鉢で、内弯気味に伸びる体部から、口縁部をやや尖らせ気味に取めるもの。

<壺> (6、45)

やや丸みのある体部から内側に棱を成し、口縁端部を舌状に取めるもので、外面にユビオサエ、内面にユビナデの痕がみられる。口径は(6)が11.6cm、(45)が14.1cmを測る。

<壺> (7、46、366~370)

(7) は頸部を「く」の字形に外反し、口縁端部をつまみ上げ状に取めるもの。(46)は頸部がわずかに外反し、直立気味に口縁部が伸びるもの。(366)は頸部を曲折し、口縁端部をややつまみ上げ状に取めるもの。(367)は頸部を「く」の字形に外反し、口縁端部をやや下方に肥厚して丸く取めるもの。(368)は肩部に張りを持つ体部から内面に棱を成して屈曲するもの。

(369) はやや丸みのある体部から頸部がゆるやかに外反するもので、口縁端部をやや上方に肥厚し丸く取める。(370)はゆるやかに外曲する頸部を有し、口縁端部内面に一条の沈線を施すもの。

<土釜>

(371) は鐔部を欠損するが土釜であると思われる。直立気味の胴部からやや外傾する口縁部に至り、端部は平面を成すもの。

[黒色上器]

S B - 1、S K - 3・4、P - 7・10・11及び包含層より若干量ではあるが黒色土器片が出土した。大半のものは内面及び外面口縁部を黒色化する黒色土器A類で、台付皿、壺、塊などがみられた。

＜台付皿＞

S K - 4 (29) は復元口径13.1cm、底径6.7cm、器高2.1cmを測り、平底から浅く外上方に開く皿部に低いが幅のある高台を持つもの。口縁部は外折し丸く収める。

＜壺＞

平底から体部は内湾して立ち上がり外上方へ伸びるもので、底部との境に幅のある高台を伴うもの。全体に薄手である。口径約13~15cmのもの (30~32、364、365)、口径約17~18cmのもの (33~35) がある。(32、35、365) の内面にはヘラミガキがみられる。特に (35、365) の見込部にも細いヘラミガキがみられる。(31、34) は口縁部をやや外反するもの。(33) は口縁部内面に沈線を巡らせるもの。橋本久和氏の黒色土器編年に照らし合わせると、I期ないしIIa期 (9世紀末~10世紀初頭) に相当すると思われる。

＜塊＞

(44) は口径13cm、器高5.1cmを測るもので、体部はほぼ半球形を呈し、体部との境に逆三角形のしっかりした高台が「ハ」の字形に付く。口縁端面内面に沈線が一条巡り、内面及び見込部に細かいヘラミガキがみられる。黒色土器編年のIIb期 (10世紀中頃) のものと思われる。

〔須恵器〕

若干量であるが壺、瓶、甕などの細片がみられた。

S K - 4 (37) は壺で、中央部がわずかに凹む底部から、口縁部は屈曲して外上方へ内湾気味に伸びるもの。底部には明瞭な回転糸切り痕がみられる。S K - 3 (36) は甕で、平底から丸みをもって立ち上るもの。底部に回転糸切り痕がみられる。

〔石製品〕

S B - 1 (8) は径10~11cm、厚さ7.2cmの偏球形をした敲石。表面中央部に敲打痕、全体に研磨痕がみられる。S B - 1 (9)、S K - 4 (38) は砥石と思われる石片である。

平安時代の遺物は、主に土師器壺、黒色土器などからおよそ9世紀末から10世紀後半頃までの時期に相当すると思われる。

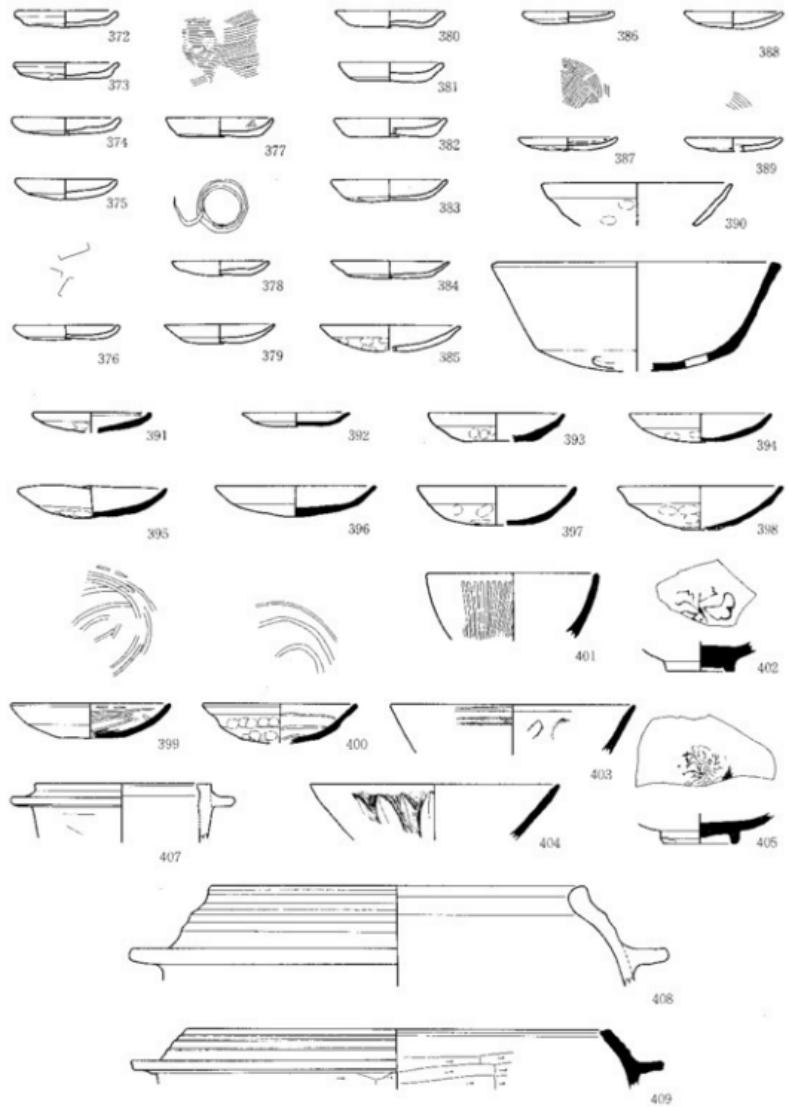
C. 中世以降の遺物

調査区全域から中世及び中世以降の遺物が多数出土した。中でも土師質土器、瓦器、瓦質土器を中心とする日用雜器類が主を成す。その他、陶磁器類、瓦類、鉄製品などがみられた。

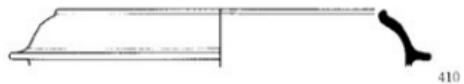
「土師質土器」

上師質土器は最も多くの出土量があり、その種類も多く、小皿、塊、すり鉢、羽釜、壺、甕などがみられた。

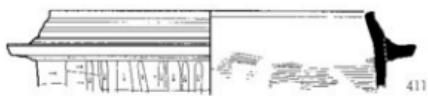
〈小皿〉



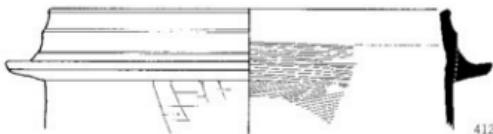
第102図 中世～近世出土遺物実測図(1)



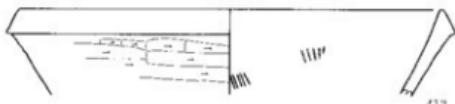
410



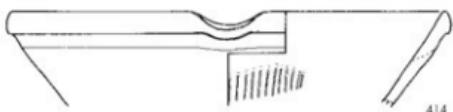
411



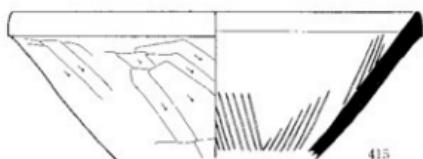
412



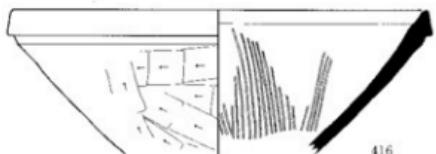
413



414



415



416



417

0 20cm

第103図 中世～近世出土遺物実測図(2)

A (47、49、154、169、196、197、199、283～306、377)

口径6.7～7.2cm、及び7.8～8.2cm、器高1.3～1.5cmを測り、平底から屈曲し口縁部が外上方に伸びるもので、やや深みがあり箱状を成す。P-20より一括出土した(283～306)は器形が一定しており、口径6.7～7.1cm、器高1.3～1.5cmに収まるもの。

B (50、66、91、115、151、152、155、167、168、194、195、198、201～205、268、277、372～374、380～384、425)

口径7.2～8.2cm、器高1.1～1.3cmを測り、Aより浅めのもので、やや平底より段を成して屈曲し、口縁部が外上方へ外反気味に開くもの。(155)は内面にクモの巣状のハケ目、(307)は内面にヨコ方向のハケ目がみられる。

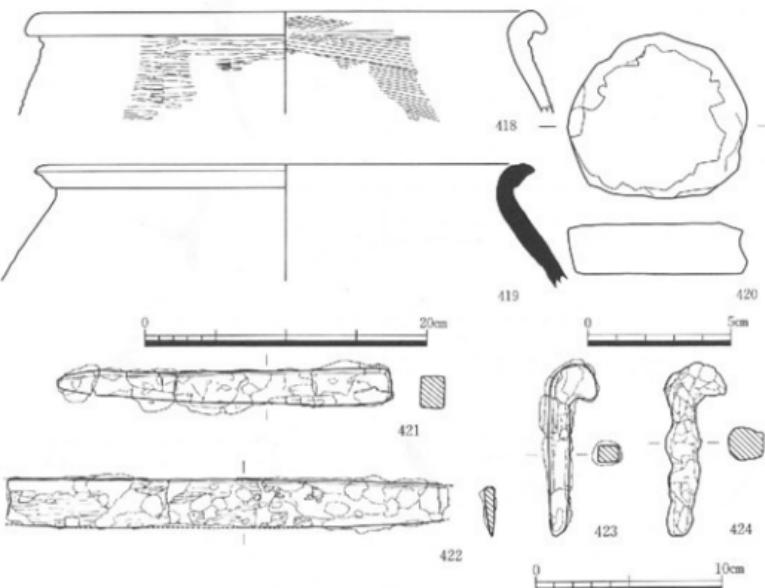
C (82、88～90、132、245、246、248、272、275、276、280、375、376、378、379、387、388)

口径6.5～9cm、器高1.2～1.8cmを測り、わずかに丸みのある底部からゆるやかに立ち上がり、口縁部が外上方に伸びるもの。(387)は口縁端部の一部を内側に巻き込むもの、内面に洗い不定方向のハケ目を施す。

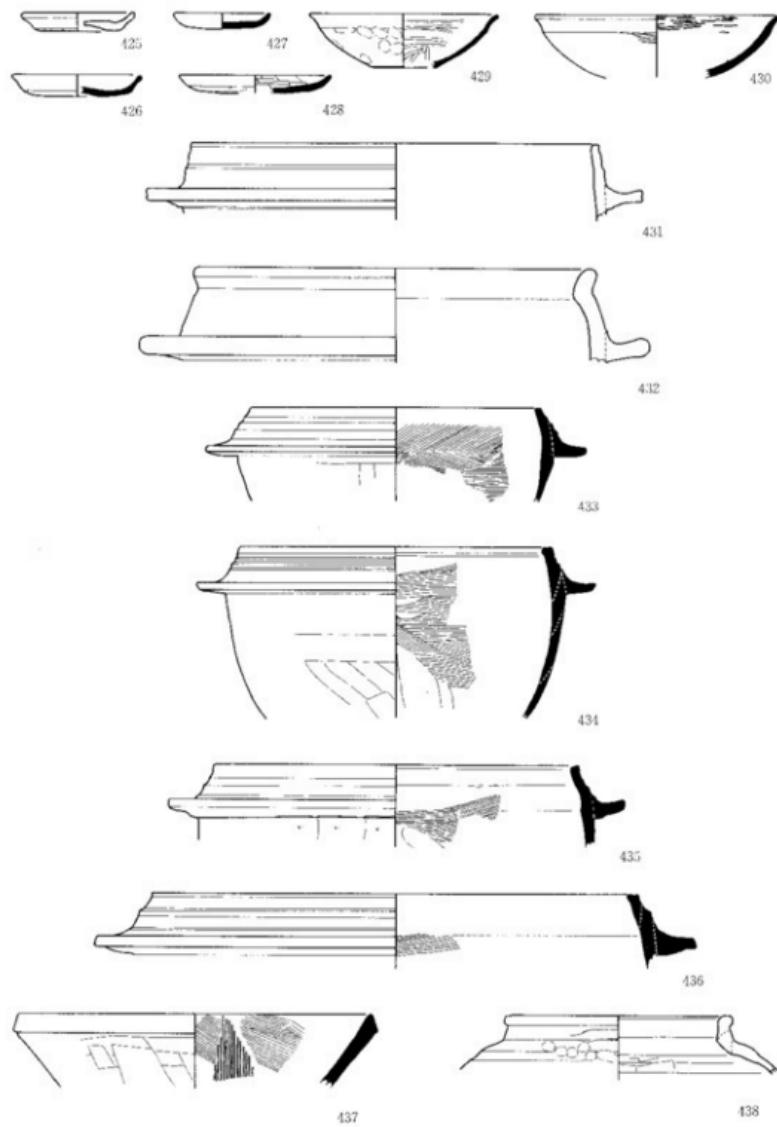
D (85～87、103、118、131、133、153、191～193、200、261、273、278、279、386、389)

底部から口縁部は短く外上方へ開き、器高0.5～1.1cmと低いもの。口径6.3～7.8cmを測る。

(131)の底部には粘土のつなぎ目がみられ、内面には放射線状にヘラ状工具によるナデが施



第104図 中世～近世出土遺物実測図(3)

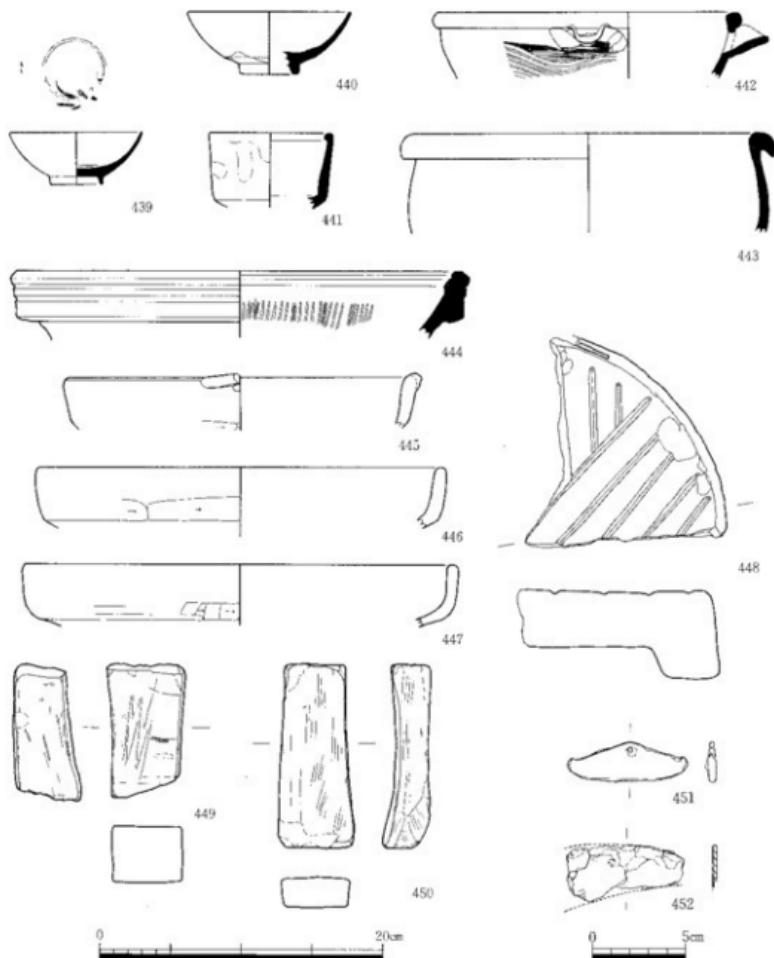


第105図 中世～近世出土遺物実測図(4)

される。(86、87)は内面に粗い不定方向のハケ目、(278、279、389)は内面に粗いヘラミガキがみられる。

E (51、160、247、385)

口径8.4~11cm、器高約2cmを測り、丸みのある底部から口縁部がゆるやかに伸び、碗型を呈すもの。



第106図 中世～近世出土遺物実測図(5)

F (120, 206)

底部から「て」の字状に外反して立ち上がり、外上方に大きく開く口縁部を持つもの。口縁部は肥厚し丸く取める。(206)は口径11.6cm、残存高3.1cmを測り、(120)よりやや深みを持つ。

<台付皿> (170)

脚部を欠損するが、外上方へ開く浅型の杯部に、器壁が厚くやや高めの高台が付くと思われるもの。

<塊> (207, 390)

内湾気味に外上方へ伸びる体部を持ち、口縁部は自然に取るもの。外面ユビオサエ、内面ナデを施す。いずれも口縁部のみの出土で全容は不明である。

<すり鉢>

(111, 413, 414)は、口縁部外面に三角形の縁帯を成すもの。(413)は全体にシャープな感じで明瞭な三角形の縁帯を成す。(111)は口縁端部をややつまみ上げ状に取るもの。(414)は縁帯にやや丸みを持つもの。

(77, 225, 108)は、口縁部外面に縁帯はみられるが、丸みを持ち明確さがないもの。(108)は縁帯を意識した丸みを持つやや肥厚した口縁部を呈す。口縁部内面には斜め方向のハケ目、体部にはヨコ方向のハケ目の後タテクシ目が施される。

(252)は、縁帯がなく口縁部を肥厚させるだけのもの。全体につくりが粗い。

(255)は、復元底径11.2cmを測る鉢底部で、平底から屈曲し外上方に開く体部を有するもの。

<羽釜>

(70, 71, 158)は、口縁部が内向し外面に3条の段を施すもの。内面ハケ目、外面ケズリを施す。菅原正明氏の土釜分類に照らし合わせると和泉D₁型(14世紀後半～15世紀初頭)に相当すると思われる。

(68, 69, 431)は、口縁部が直立ないし外傾気味で、外面に数条の段を成すもの。和泉D₂型(15世紀後半頃)のものと思われる。(69)は口縁端部を内側にやや肥厚するもの。

(84, 408)は、球形の体部から口縁部は内湾して伸び、肩部に幅の狭い鈎を巡らせるもの。口縁端部は肥厚しやや外方により返し気味に丸く取める。河内B₁型(15世紀前半頃)のものと思われる。

(432)は、内向する口縁部から端部を外折するもので、肩部に幅の狭い鈎を巡らせる。河内B₁型に相当するが、前者よりやや古いものと思われる。

(163)は、やや下膨れの体部と「く」の字形に外折する口縁部を有し、口縁端部をやや突出



第107図 中世～近世出土遺物実測図(6)

453

させ、胴部中央部に狭い鈎を巡らせるもの。内面に円形の圧痕がみられる。大和12型（16世紀後半頃）に相当すると思われる。

(407) は、短く直立する口縁部直下に水平の短い鈎を巡らせるもの。

(438) は、口縁部のみの出土で全容は不明であるが、内傾する頸部から直立して伸び、口縁端部を肥厚し外折するもの。

＜構＞ (224)

頸部を「く」の字形に強く外折し、口縁部はヘラケズリにより平面を成すもの。

＜焰培＞ (250、264、445~447)

(250、264) は、口縁部が外傾し、内弯しながら伸びる体部との境に鈎を有するもの。

(445~447) は、丸みを帯びた底部から体部は内弯して立ち上がり、口縁部が上方に伸びるもので、(445) は恐らく2方向に山型の取っ手を持つ。

＜甕＞

(228、229、109、418) は、丸みのある肩部から口縁部はやや肥厚し、端部を短く外折する。外面に細かい平行タタキ、内面は細かいハケ目を施される。15世紀中頃のものと思われる。

(166、230~232) は、ほぼ球形を呈す体部から口縁部は肥厚して上方に伸び、玉縁状を成すもの。外面にやや粗めの平行タタキ及び斜め方向のタタキ、内面はハケ目を施す。底部は平底を呈す。15世紀後半頃のものと思われる。

(233、259) は、やや丸みを持つ底部から、ずんぐりした樽型の体部を持つもの。外面に斜め方向の粗いタタキ、内面は粗いハケ目を施す。16世紀初頭のものと思われる。

(263、265、267) は、平底から体部は内弯気味に外上方へ伸び、頸部でやや絞られ、口縁部は肥厚し断面逆台形の帯状を成すもの。外面は平行タタキ及び斜め方向のタタキ、内面は粗いハケ目の後ユビナデを施す。いわゆる湊焼甕で、16世紀後半のものと思われる。

(260、262、266) は、体部が内弯気味に伸び、腰部から底部にかけて絞られるもので、底部は凸レンズ状に突出する。口縁部は断面逆台形を呈す。外面はタタキが施されるが、所々にハケ目がみられる。内面はハケ目の後ユビナデを施す。16世紀後半から17世紀初頭のものと思われる。

S K-39 (253) は半球体の体部から頸部が「く」の字形に外反するもので、内面はヨコハケ目、外面上半部にタテハケ目、下半部にケズリを施す。胎土はやや粗く灰黄褐色を呈す。

〔瓦器・瓦質土器〕

土師質土器に次いで多くの出土量があり、その種類も多く小皿、塊、すり鉢、羽釜、甕などがみられた。

＜小皿＞

I (54、55、171、208、92)

口径6.7~8.4cm、器高1.0~1.5cmを測り、平底から強いヨコナデの為口縁部は屈曲して外上方へ伸びるもの。(54、55、171) は口縁部がやや外反する。

II (52、53、56、209~212、93、94、104、121、281、307)

口径7.2~9.2cmを測り、ユビオサエを伴う底部から口縁部との境で肥厚屈曲し、外上方へ伸びるもの。(52、53、56、210、212、93、121)は口縁部が外反するもの。(211)は口縁部の一部が片口状を成すもの。(93)は口縁端部を舌状に収めるもの。(428)は口径10.6cmを測り、内面にヘラナデを施すもの。

III (67、391)

口径8.3~8.6cmを測り、丸みのある底部からゆるやかに立ち上がり、口縁部がつまみ上げ状に短く収めるもの。(67)は内面にハケ目がみられる。

IV (122、282)

口径約10cm、器高約2cmを測り、浅い碗型を呈すもの。

<塊>

瓦器塊は上師質小皿同様大量に出土した。おおむね和泉型瓦器塊の様相を呈す。

A (430)

復元口径17.2cmを測り、やや深みのある塊型を呈し、全体に厚みのあるもの。外面及び内面にヨコ方向のヘラミガキがみられる。尾上実氏による瓦器塊編年によらし合わせると、II-3に相当すると思われる。

B (83、269)

口径14~14.5cm、器高約5cmを測る。丸みのある底部からゆるやかなカーブで立ち上がり、口縁部を外反せるもの。高台は断面丸みを持つ三角形を呈す。内面見込部は平行線状のヘラミガキ、体部はヨコ方向のヘラミガキを巡らせる。尾上編年でIII-2に相当すると思われる。

C (60~62、95、216、217、429)

口径12.4~13.8cm、器高3~3.8cmを測る。やや浅い体部と退化した高台を持つもので、内面にはラセン状のヘラミガキを施す。尾上編年ではIV-1に相当すると思われる。

D (57~59、178~181、213、218、219、398)

口径11.5~13.4cm、器高約3cm強を測る。高台は形骸化し粘土ヒモを張りつけた程度となる。内面のヘラミガキは粗いラセン状を呈す。尾上編年でのIV-2~3に相当すると思われる。

E (174~177、249、274、308、399、400)

口径9.8~12cm、器高約2.7~3.3cmを測り、高台を伴わない浅い塊型を呈す。内面のヘラミガキは粗くなり数周巡る程度となる。全体につくりが丁寧で、ユビオサエの痕も目立たないもの。尾上編年でIV-3~4に相当すると思われる。

F (156、172、173、214、215、393~397)

口径10cm前後、器高3cm未満を呈し、全体につくりが粗で歪みのあるものが多い。内面のヘラミガキはほとんどみられず、ナデが施される。外面にはユビオサエの痕が顕著にみられる。焼成も悪く、灰白色を呈す。尾上編年でIV-5~Vに相当するものと思われる。

<すり鉢>

(141、119、437) は、口縁部外面が明確な三角形の縁帯を成し、円状に收めるもので、全体にシャープな感がある。

(142、99、415、416) は、肥厚した三角形の縁帯を成すが、明確さがなく平面を成すもの。

(226、125、126、417) は、肥厚し丸みのある三角形の縁帯を成すもの。(226) は口縁部内面にヨコハケ目がみられる。

(227、127、128) は、縁帯はみられるが明確さがなく、口縁部をやや上方につまみ上げ状に收めるもの。

<羽釜>

S E - 3、S W - 1・5 などから數点一括して出土した。菅原正明氏による土釜の分類によると、大半は和泉D型又は河内D型で、このほか和泉K型、大和H型などがみられた。

(139、220、221、251、124、409、433、434) は、口縁部が内窵気味に短く伸び、口縁部の傾きに統けて肩部に鈎を巡らせ、外面に数条の段を有するもの。

(72~74、140、165、98、123、270、411、435) は、口縁部が内上方に伸び、外面に3条の段を有するもの。(98) は口縁部に2つ孔穴があり、おそらく繩などを通して使用したものと思われる。

(75、106、137、164、223) は、口縁部が直立して短く伸び、外面に間伸びした段を有するもの。

(138、222、412) は、口縁部が直立ないし外傾気味で、肩部にやや上向き気味の鈎を巡らせるもの。口縁部外面には間伸びした数条の段がみられる。

(149) は、短く直立した口縁部の下に幅の狭い鈎を巡らせるもので、器壁は厚く、復元口径53.8cmを測る大型のもの。和泉K型に相当するものと思われる。

(410) は、口縁部が内窓して膨らみ、口縁端部を上外方に折り返すもの。肩部に幅の狭い丸みのある鈎を巡らせる。和泉H型に相当するものと思われる。

<甕>

(146、159、234、235) は、口縁部を肥厚して直立した後口縁端部は外折し、断面を「コ」の字状に收めるもの。

(80、81、257、117、129、130) は、口縁端部を短く外折するもの。(257) は丸みのある肩部を有するもので、外面にタタキ、内面にハケ目を施すもの。

(147、148、112) は、口縁部が短く巻き込まれた状態のもので、玉縁への過渡的なもの。

(78、79) は、口縁部の返りがなくなり玉縁状を成し、全体の体型に丸みを帯びるもの。

(256) は、口縁部を肥厚して直立し、口縁部断面の形態が長方形の帯状を呈すもの。

およそ15世紀中頃から15世紀後半頃のものと思われる。

<その他の瓦質土器>

SW-5 (161) は火舌の口縁部で、花弁の刻印を施し、その下に一条の突線を施すもの。

(406) は、丸みのある底部から体部は屈曲して外上方に伸び、口縁部に至るもの。底部には複数あると思われる孔穴がみられ、甌として使用されたものと思われる。

「須恵器上器」

若干量ではあるが、練り鉢、壺、甌などの細片が出土した。

〈練り鉢〉 (76, 182~184, 107)

(76) は、外上方に伸びる体部から縁帯は持たず、それを意識した丸みのある口縁部を有するもの。(182~184) は、外上方に伸びる体部から口縁部との境で外方に肥厚し、やや丸みのある縁帯を成すもの。口縁端部はつまみ上げ状に丸く収める。(107) は、外上方に伸びる体部から口縁部はやや肥厚し、外面に三角形の縁帯を成すもの。全体にシャープな感がある。

〈壺〉 (135, 136, 238)

SW-1 (135) は、直立する口縁部に玉縁を成す短頸壺。SW-1 (136) は、鉢又は台付壺の高台部で、高さのあるしっかりした高台が「ハ」の字形に付くもの。SK-14 (238) は外反する口縁部を呈すもの。

〔陶磁器〕

出土した陶磁器類として青磁碗、白磁碗、皿のほか、染付碗、鉢、壺、甌などの日用雑器がみられた。

〈青磁碗〉 (237, 96, 116, 401~405)

(237, 96, 116) は、外面に線刻の蓮弁文を施す口縁部。(116) は口縁端部を外反し舌状に収めるもの。(401) は、外面に縱方向の降線を施すもの。(403, 404) は、口縁部が外反し舌状に収めるもので、(403) は外面口縁部にヨコ方向の沈線を巡らし、内面に片切彫りの幾何学文を施す。(404) は外面に明確な鏤蓮弁文を施す。(402, 405) は高台片で、内面見込部に片切彫りの花文を施す。いずれも龍泉系青磁碗と思われる。

〈白磁皿〉 (236, 97)

SD-1 (97) は、斜上方に伸びる体部から口縁部は屈曲し外上方へ外反気味に伸びるもの。

SK-19 (236) は、口縁部が内弯して外上方に伸び、口縁端部を丸く収めるもの。

〈白磁碗〉 (157)

SW-4 (157) は、口縁部を上下に肥厚し、やや厚みのある玉縁を成すもの。

〈国産陶磁器〉

(241, 419) は、口縁部をN字形に屈曲する常滑焼甌片。(145) は常滑焼体部片で、やや間延びした頸部から張りのある肩部に統くもの。

(254, 442) は刷毛目唐津鉢で、内外面に赤褐色系の刷毛目文がみられるもの。

(444) は備前焼すり鉢で、口縁下端部を大きく肥厚して端部内面に段を成し、縁帶に四線を二条巡らせるもの。内面の摺目は6本1単位で垂直におろされる。SD-1 (100) は玉縁を成

す備前焼壺の口縁部。SW-1(144)は平底を呈す備前焼壺の底部。SK-14(240)は、口径24.5cm、底径14.5cmをはかる備前焼壺で、底から肩に丸みを持つ体部を有し、頸部はやや直立て玉縁を成す口縁部に至るもの。(239)は平底を呈すもの。

(185)は外面に「梅花文」、(439)は「草花文」を施す染付碗。(309)は染付の長頸壺口縁部片である。

(110)は施釉碗の体部片で、外面に黒褐色の釉垂れがみられる。(443)は口径24cmを測り、内外面が淡黄色の施釉鉢で、口縁部が肥厚して外下方へ屈曲するもの。表面には細かい貫入がみられる。(441)は志野焼風筒茶碗で、口縁端部を内側へ巻き込むもの。

〔瓦類〕

SD-3(105)は軒平瓦で、瓦当に均整唐草文を施すもの。SE-2(63)、SK-6(186、187)、SK-31(242)は平瓦で、(63、242)の内面には布目、(186、187)の内面には繩目がみられる。

SD-4(113)、(420)は、平瓦の周りを打ち欠き、円形にした瓦の二次製品で、径5~6cm、厚さ約2cmを測るもの。

〔石製品〕

SD-4(114)は三面に研磨痕がみられる砥石。SK-24(243)、(449、450)は草履型を呈し厚みのあるもので、四面に使用痕がみられる。

SK-6(189)は滑石製石ナベの体部片で、表面には細かいタテ方向のケズリ、内面はケズリの後磨くもの。

(448)は石臼の上臼で、復元口径32cmを測り、断面U字形を呈す。表面には1区分5溝の臼目が施され、側面には横打込式に木を固定する穴がみられる。

(453)は、「・・泉寺社・・」と読める線刻文字がみられる石片で、詳細は不明である。

〔鉄製品〕

(64、258、101、102、423、424)は鉄釘で、大きさは大小あるが、ほとんどのものが断面方形ないし長方形で、釘頭部を打ち屈曲するもの。

SW-5(162)、(421)は、長さの違いはあるが、外形がほぼ二等辺三角形で、先へいくほど細くなるもの。楔として使用されたものと思われる。

SW-1(143)は、残存長4.2cm、幅約2cm、厚さ0.3cmを測り、両端を欠損するが、おそらく刀子であると思われる。

(422)は残存長23.5cm、幅1.9~2.6cmを測る短刀の刃部で、断面三角形を呈し、刃部は鋭く磨かれていたと思われる。

(451)は長さ6.5cm、幅2.2cm、厚さ0.2cmを測り、底部がやや弓状の三角形を呈すもので、やや外反気味の二辺の頂点部には、釘をさし込んだと思われる穴が空いている。おそらく火打ち鎌として使用されたものと思われる。

(452) は背部がやや弧を描くように湾曲する形態から、鍔の刃部であると思われる。

S D - 1 (65) は鉄さいで、大きさ8.6cm×6.1cm×3.1cm、重さ111.8gを測る。表面はガラス質化し、気泡が多く見られる。全体に青緑色を呈す。

〔その他の出土遺物〕

S K - 6 (188) はフイゴ羽口で、体部復元径約8cm、内径約2cmを測る。融解した鉄の付着が著しく、一部ガラス化し変色しているところもある。

S K - 27 (244)、S W - 5 (150) は、おそらく鑄型片であると思われる。(244) は外面にケズリ、内面の一部にナデを施す。(150) は最大径約39cm、高さ約9cm、厚さ約5cmを測り、外面は未調整であるが内面は削られ、平滑である。いずれも熱を受け断面が変色する。

(4)まとめ

今回の調査で、調査地域を地形的に2調査区に分けたが、遺構の状況は時代、遺構の性格等で同様に分かれるようである。

A. 繩文時代

検出された遺構は不定形な土坑だけであったが、遺物は多く出土した。繩文時代の土坑及び遺物を出土する地域は第2調査区にはば限定できる。時期は後期初頭に位置づけられる。

B. 平安時代

この時代の遺構・遺物は第1調査区の南側約200mに限定される。時期も10世紀に限られているようである。

C. 中世

第1調査区は中央部から北側にかけて遺構が集中している。これらの遺構は建物の復元は出来なかった。しかし、特徴的な遺構としては焼上や炭を伴う方形土坑或は石組を伴う方形土坑である石組遺構である。これらの遺構以外にSK-6からは輪の羽口や鉄滓等が出土し、鍛冶関係の遺構の可能性を示唆している。

また、第2調査区からは建物の一部などが検出され、現集落に建物群が存在することを示唆している。このことから、第1調査区が鍛冶関係つまり生産域とすれば、第2調査区は居住域としての可能性があり、中世の生産域と居住域の関係を示す良好な遺跡である。

D. 近世

第2調査区に集中し、現集落と重複するようである。

以上のことから、当遺跡は繩文時代後期に、この段丘上に人々の生活が始まり、平安時代の限定された時期に人の生活が一部見られる。中世の15世紀ぐらいになると遺跡の東側を南北に走る東高野街道を一部とりこんだ、居住域とそれを見下ろす段丘の上に生産域をもつ、現集落の原形が造られたものと考えられる。

図版



調査区全景



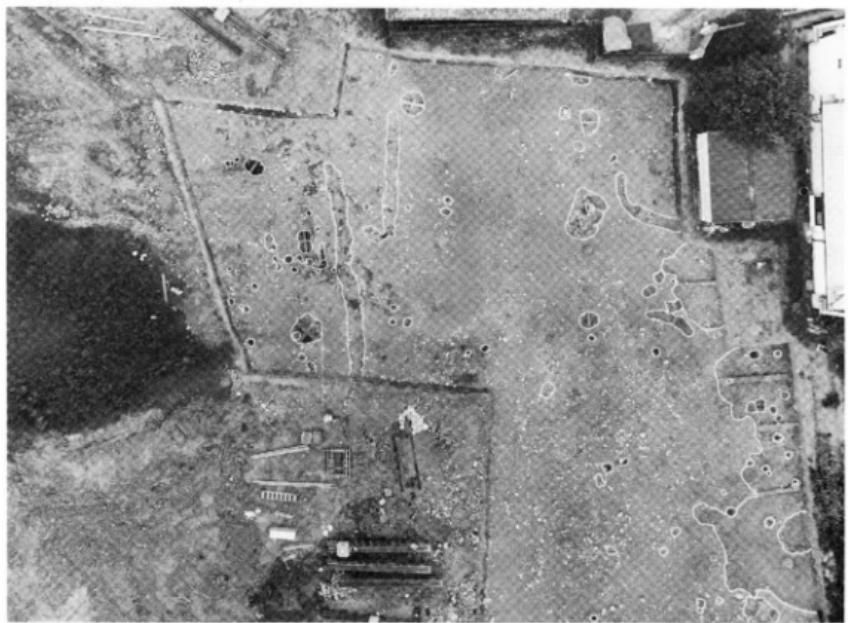
第1調査区



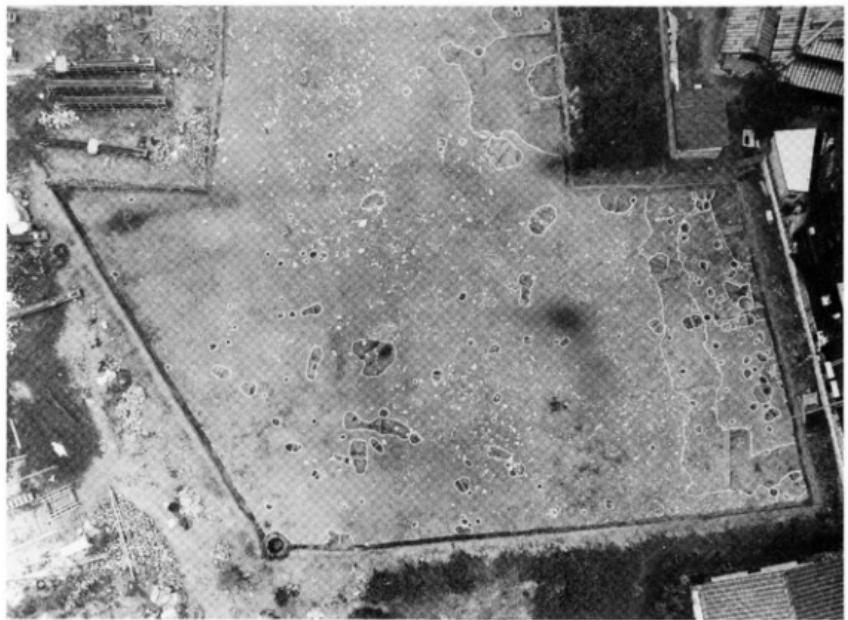
第1調査区 西から



第1調査区 北から



第2調査区



第2調査区



SK-1・2



SB-1



SK-3・4



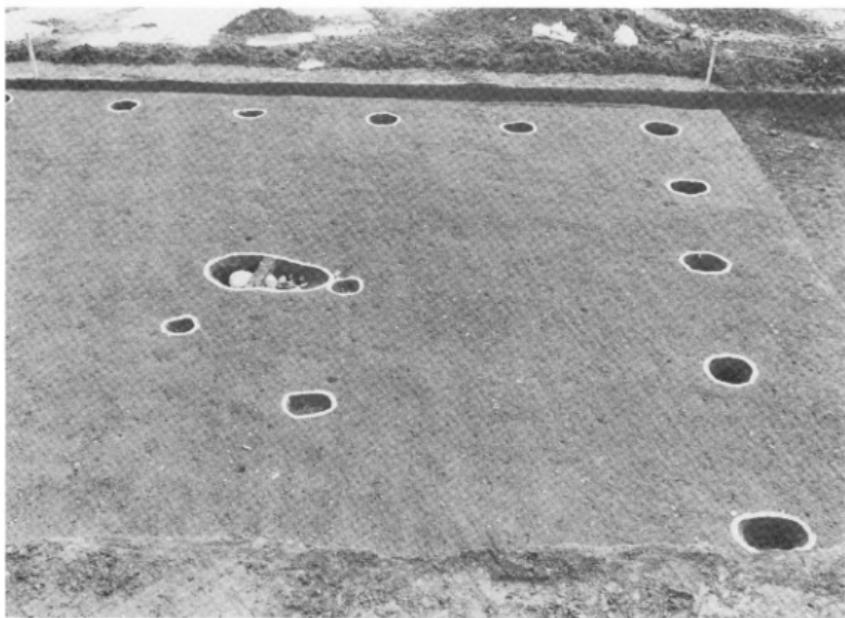
SK-4 土器出土状況



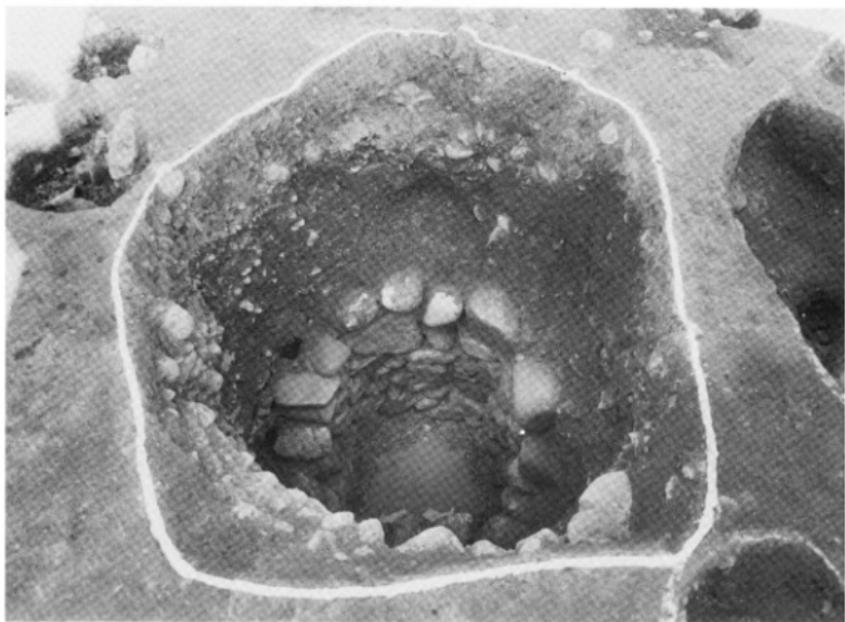
SB-2・3、SD-7 (南西から)



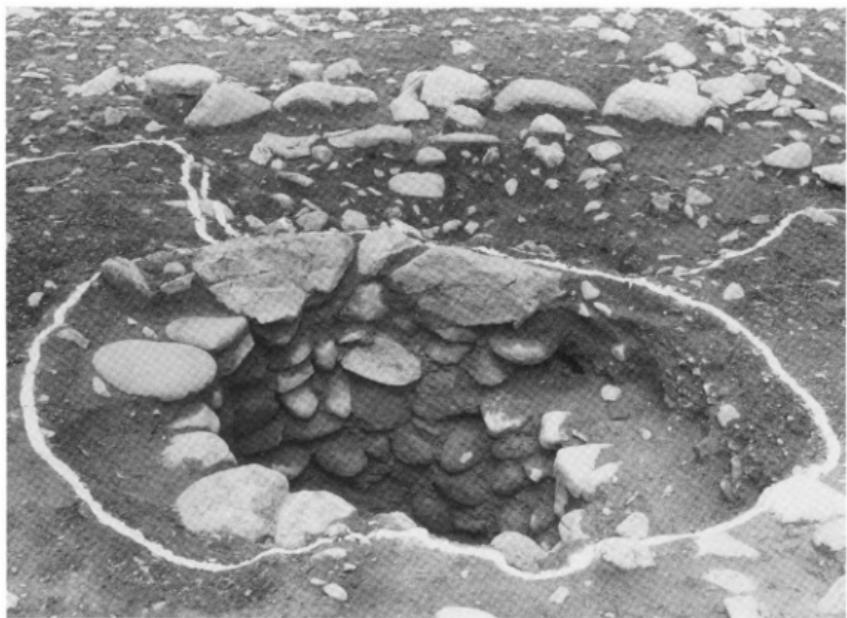
SB-2・3、SD-7 (北から)



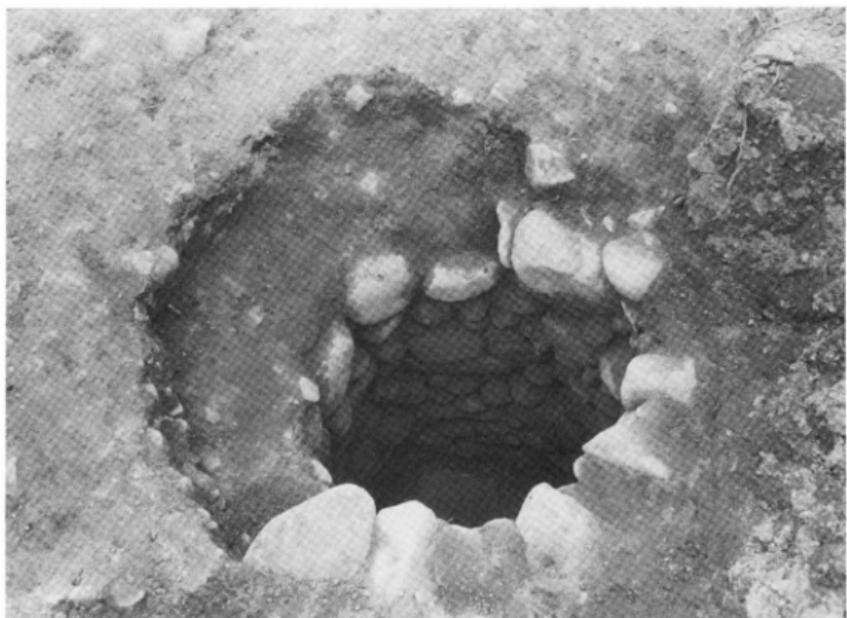
S A - 1



S E - 2



SE-3



SE-4



SE-5



SD-1



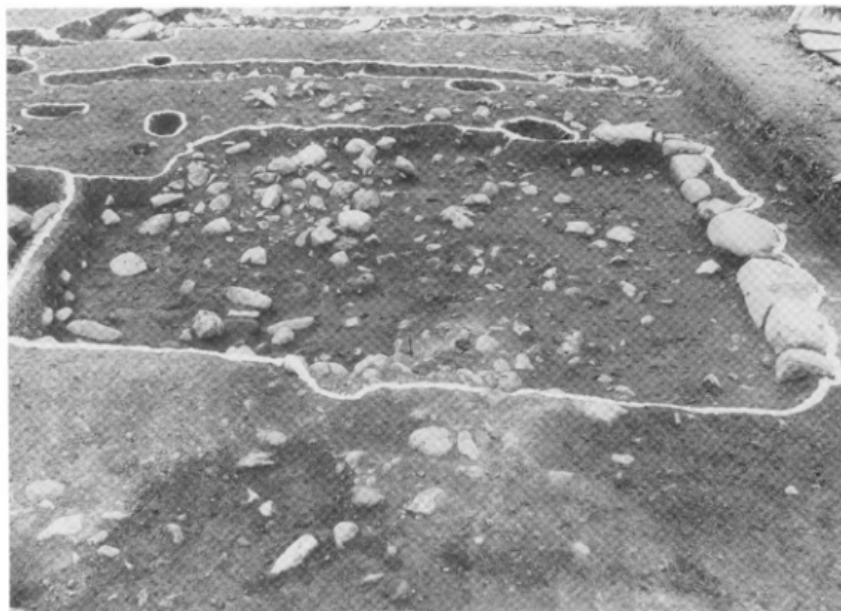
SD-4



SD-5・6



SW-1



SW-2



SW-3



SW-4



SW-5



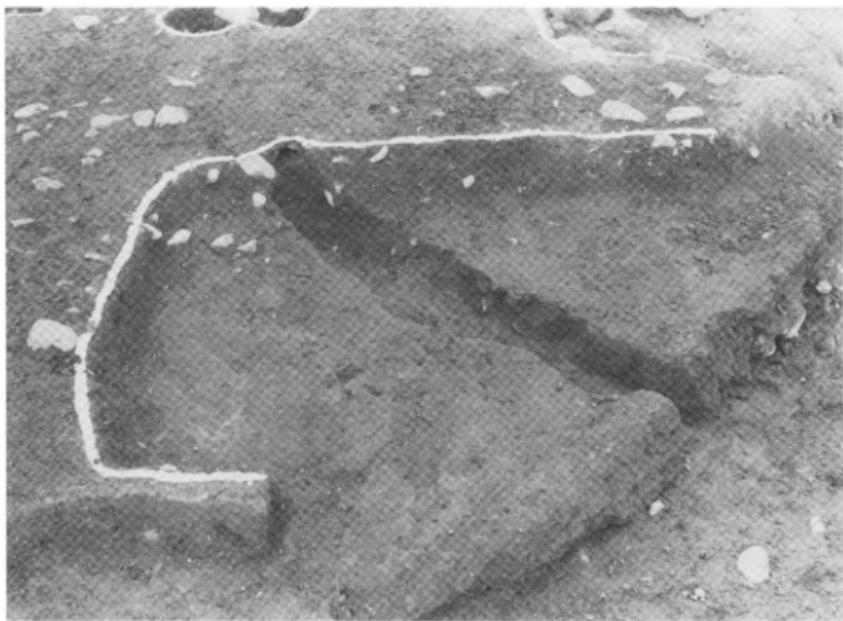
SK-5



SK-6



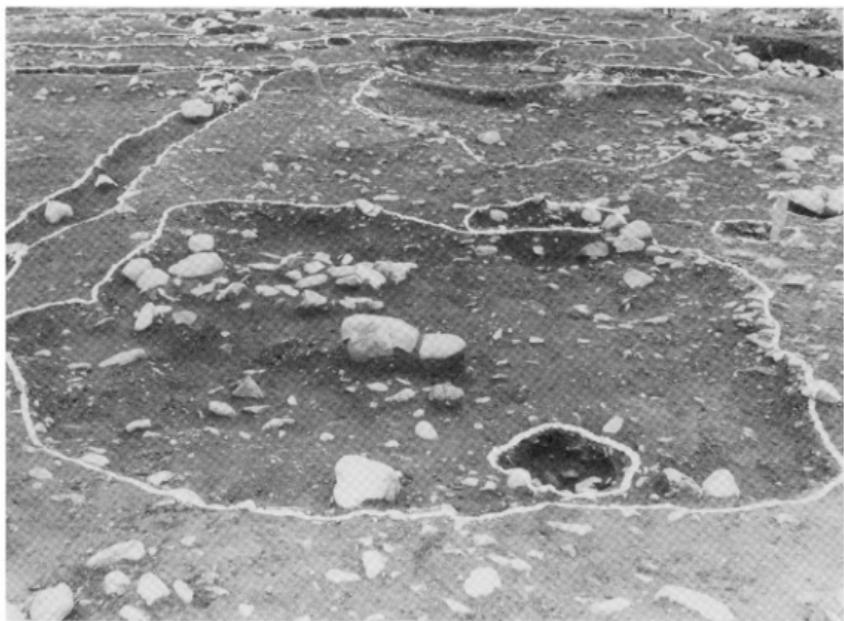
SK-8



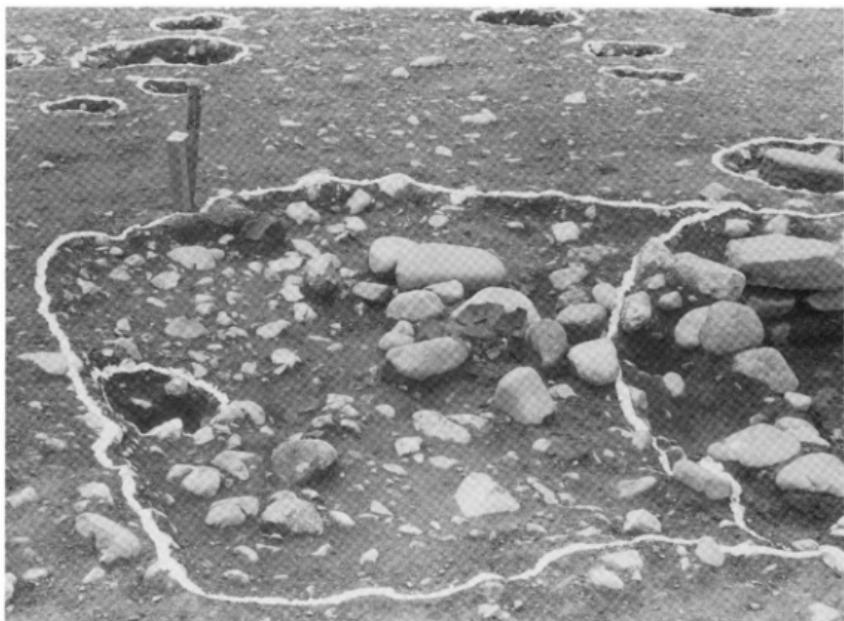
SK-9



SK-14



SK-18



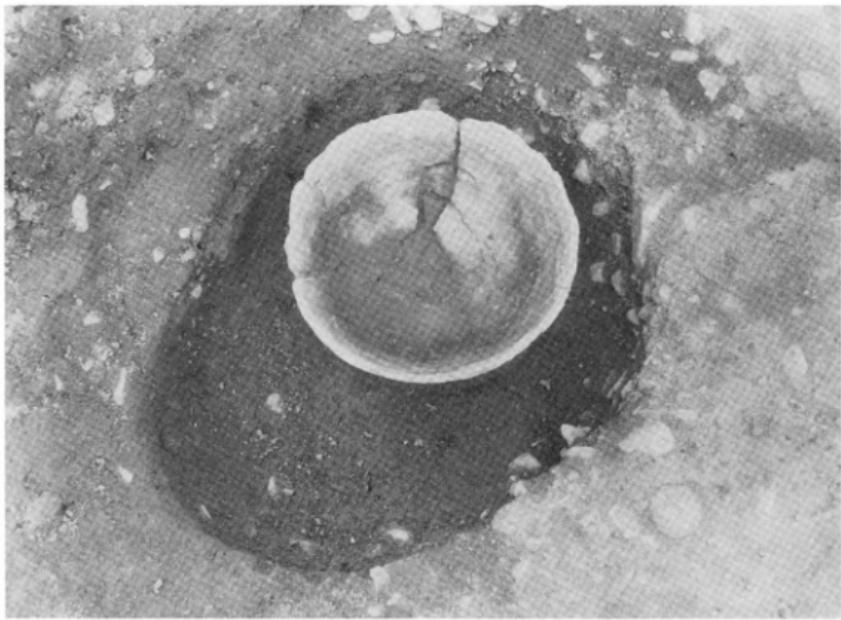
SK-30



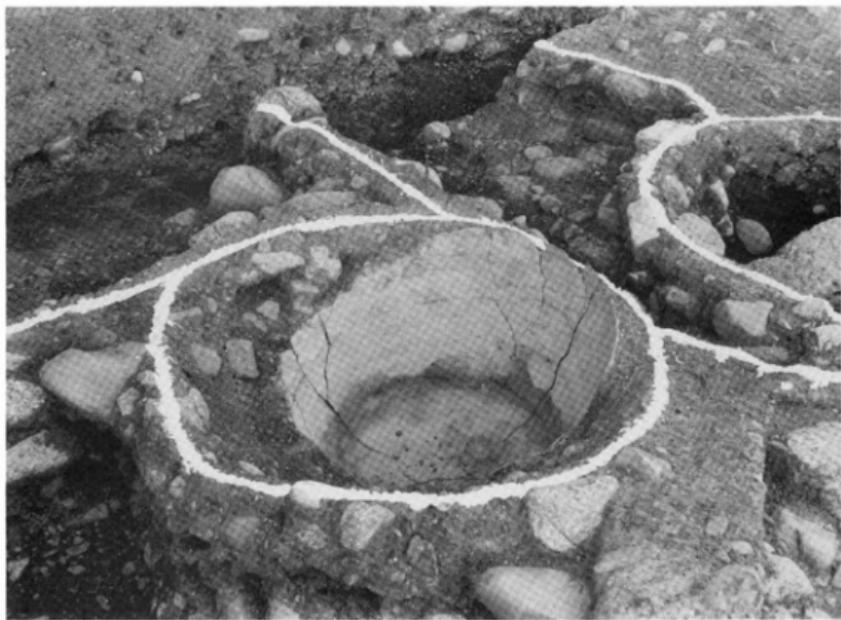
SK-42



SX-1



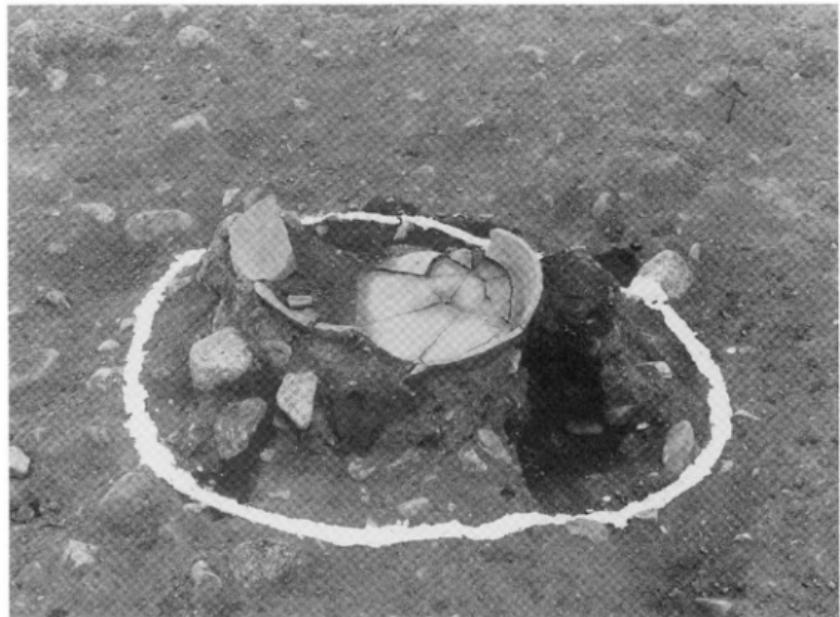
S X - 2



S X - 3



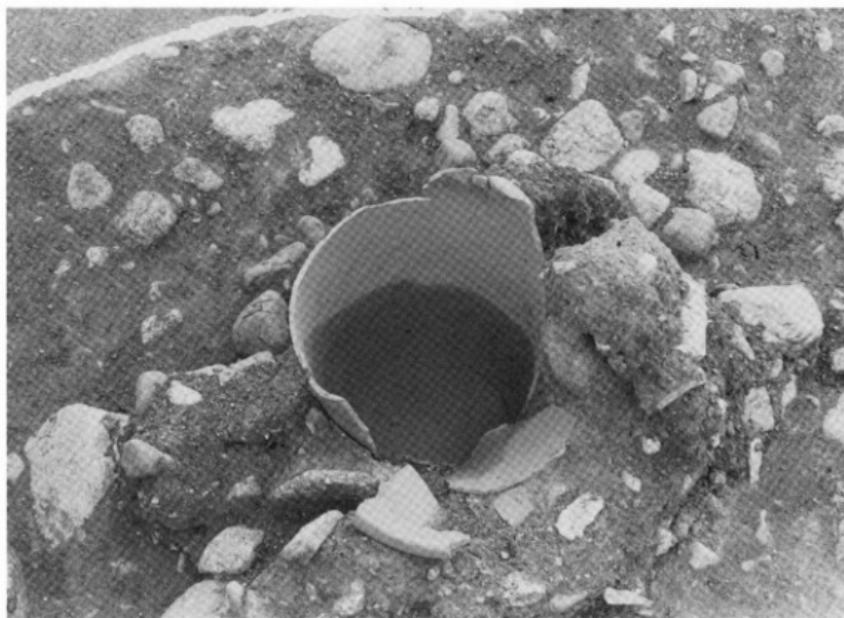
S X - 4



S X - 5



S X - 6



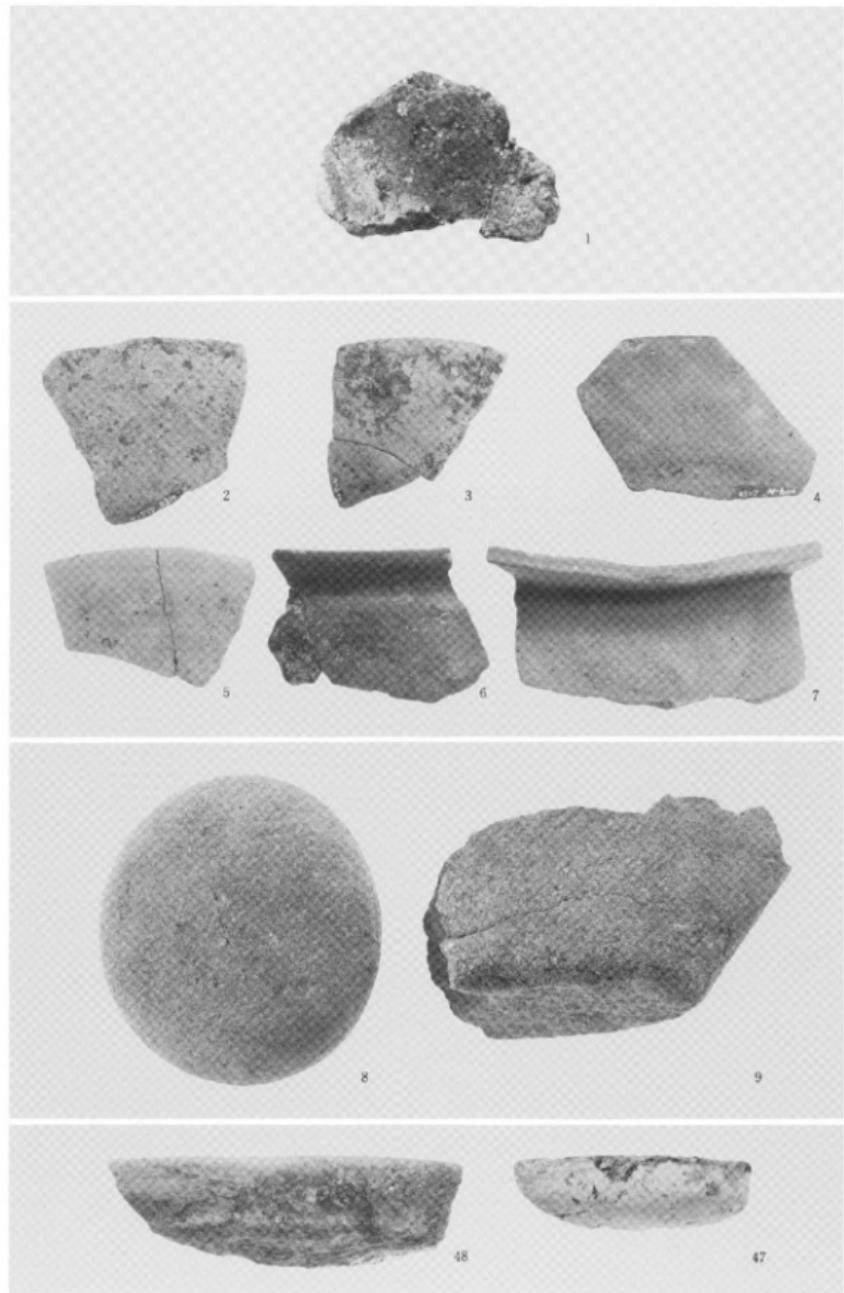
S X - 7



NR-1

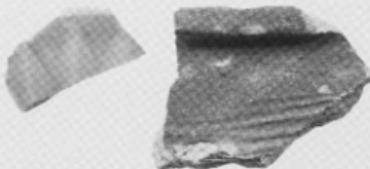


P-20





115



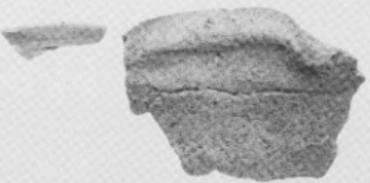
116



117



38



118



119



10



11



15



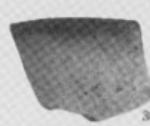
22



24



28



30



31

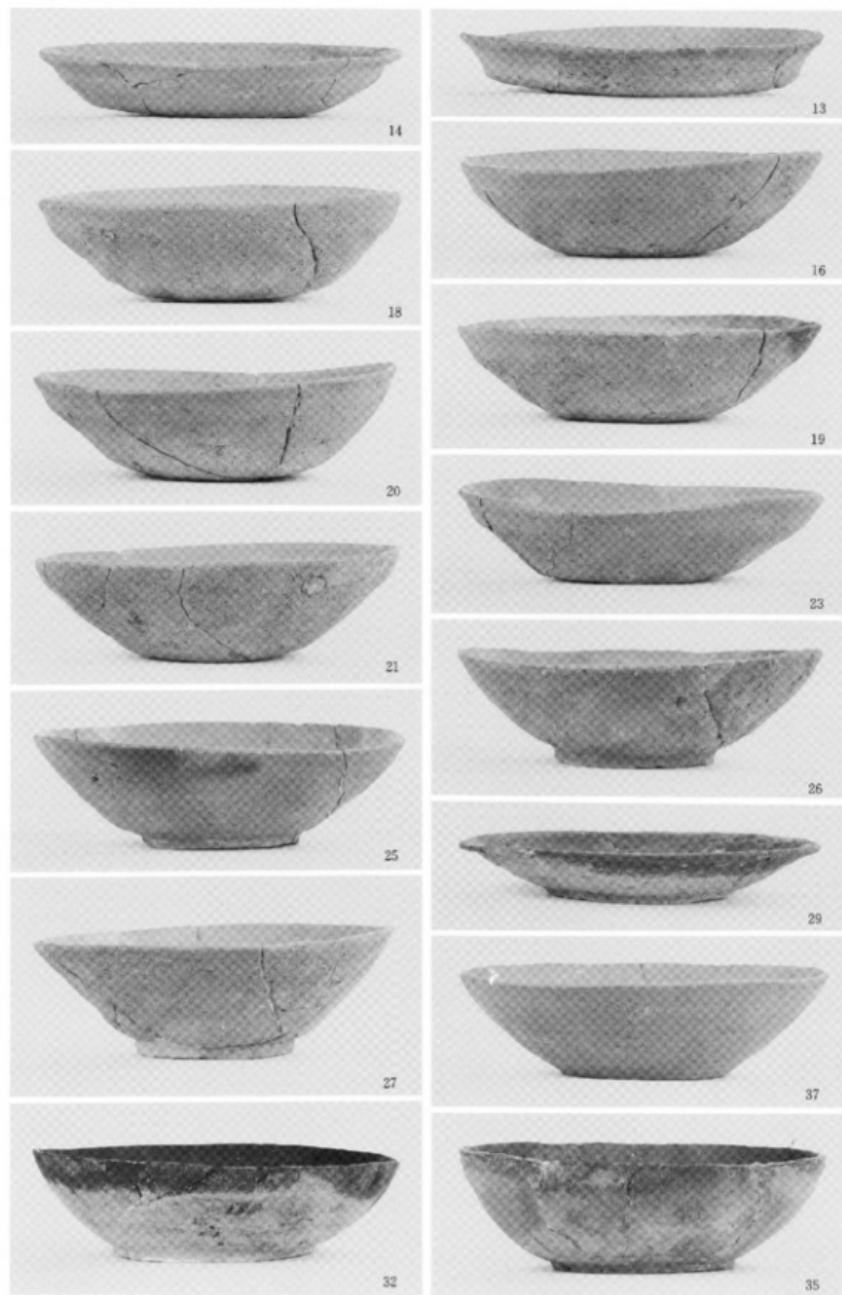


33



36

(10・11・15・22・24・28・30・31・33・36・38・115～119)



(13・14・16・18・19・20・21・23・25～27・29・32・35・37)



44



43



275



281



279

280



282



269



278



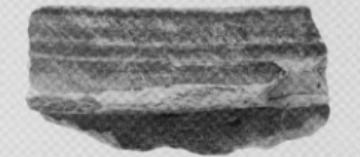
271



268



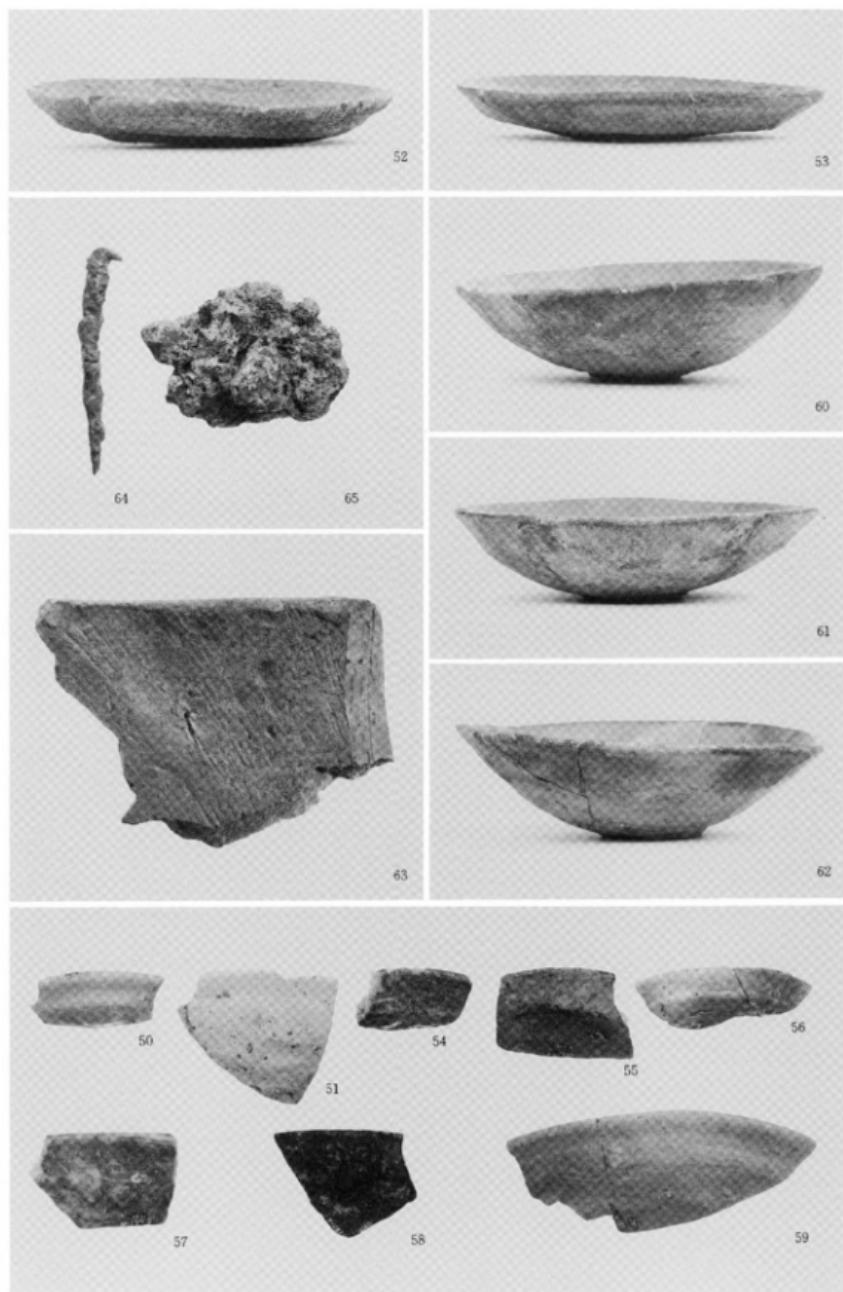
308

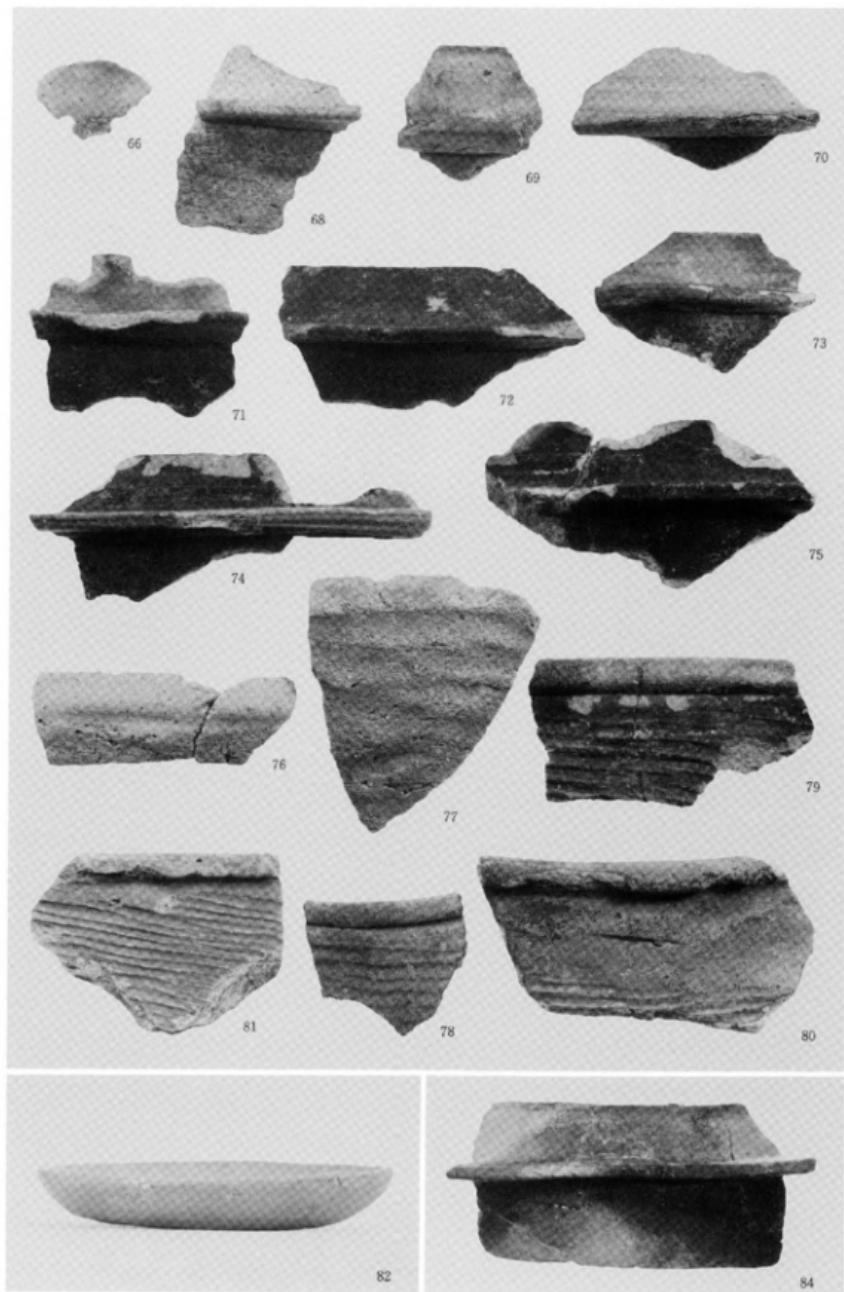


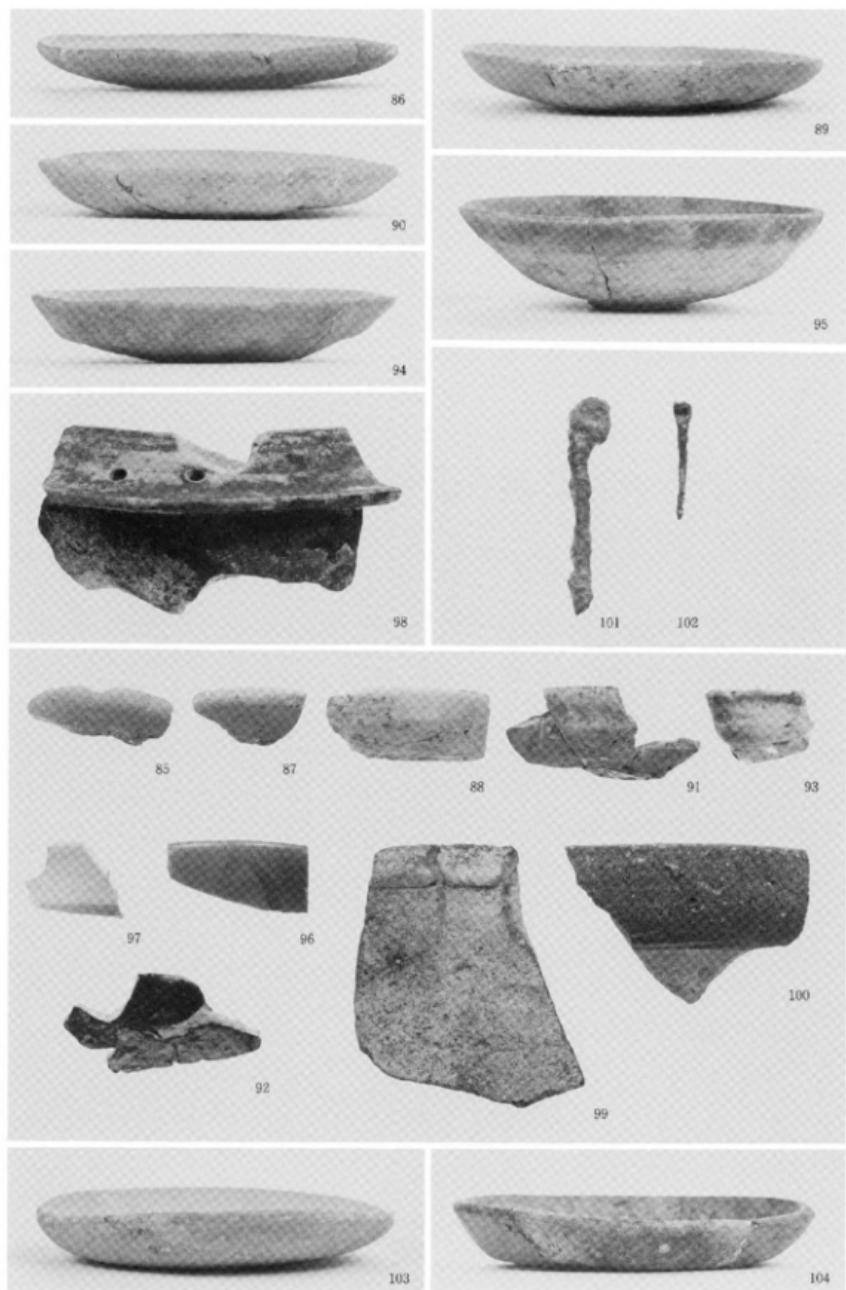
270

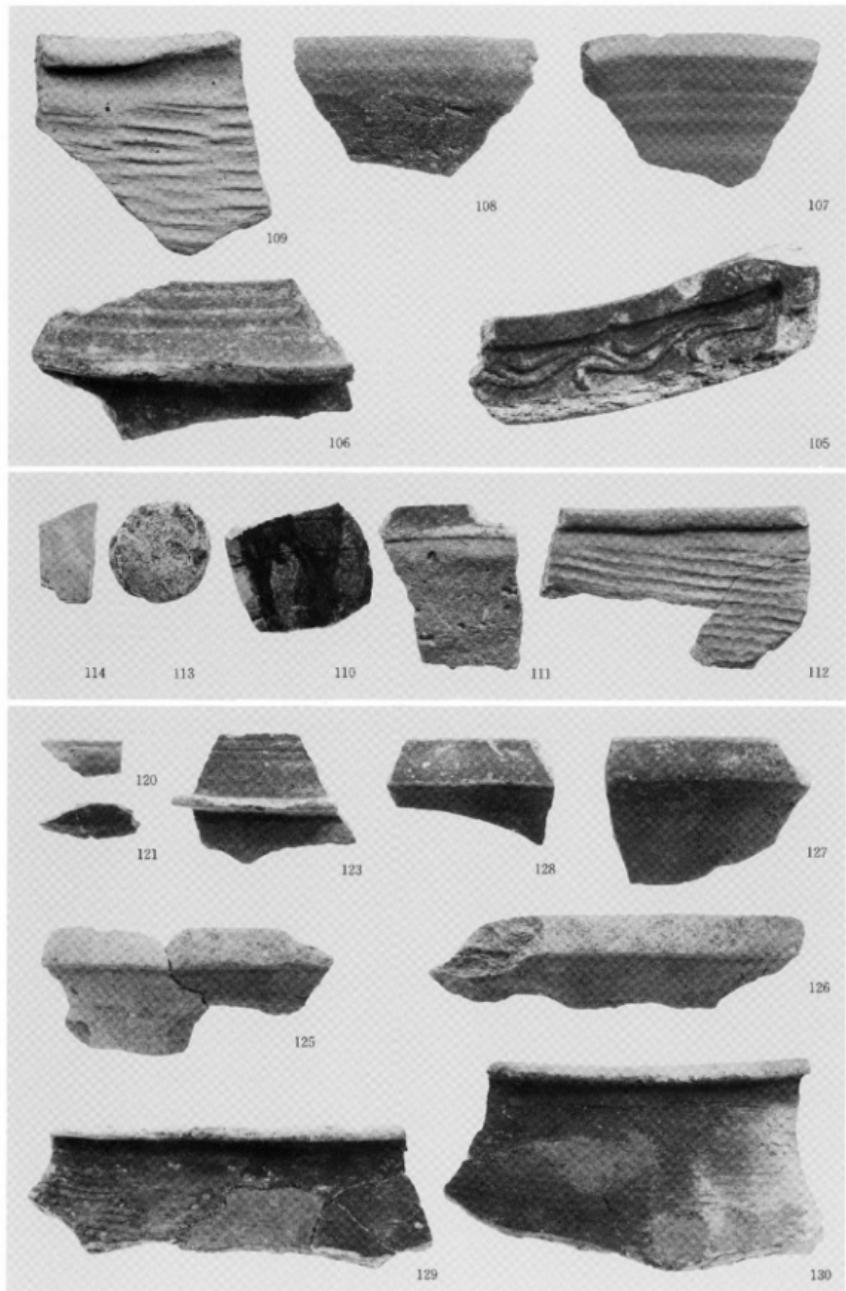


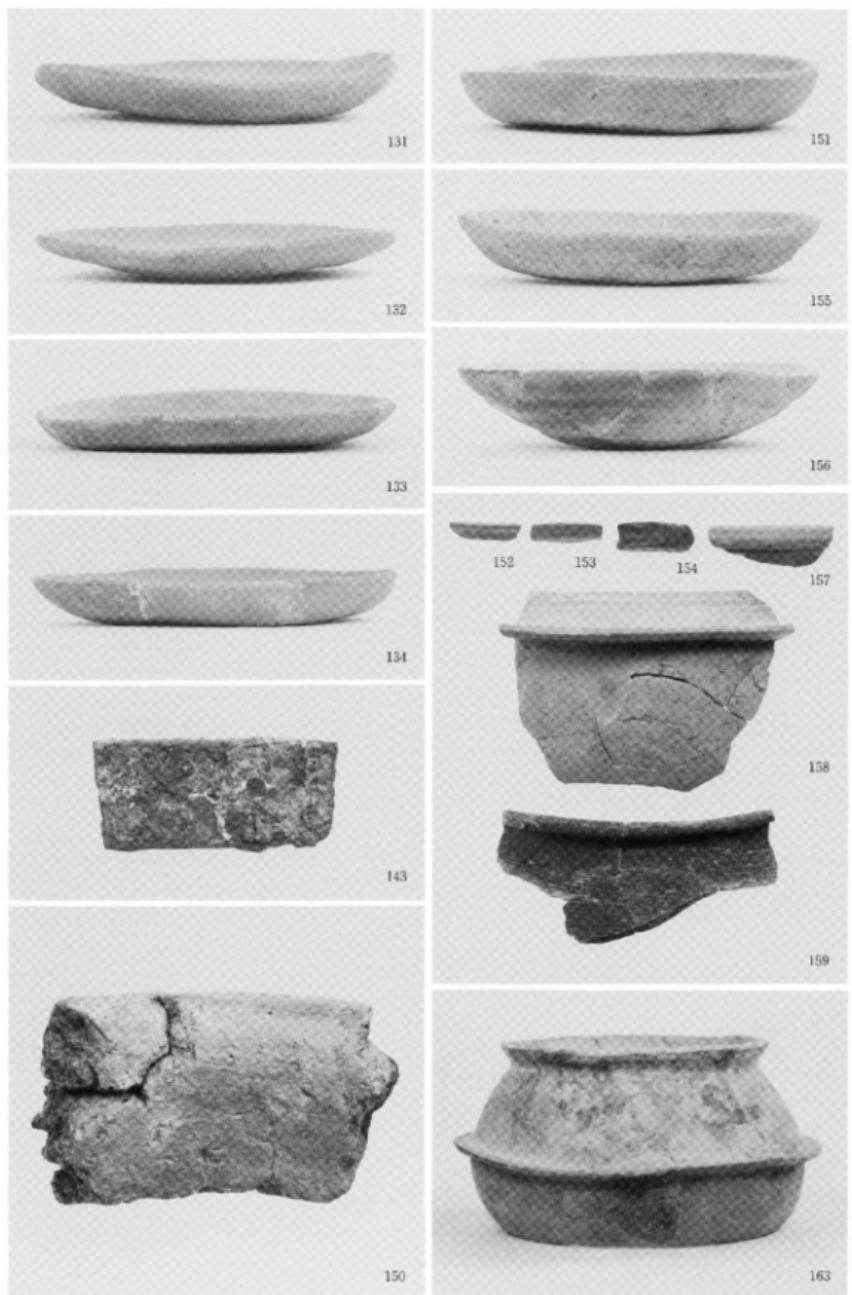
307











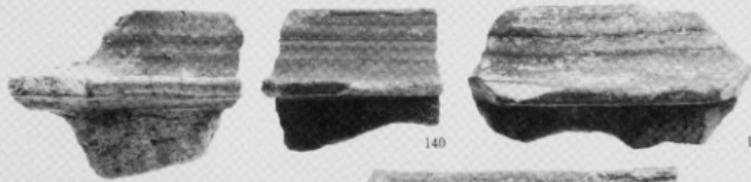
(131~134・143・150~159・163)



136

135

137



138

140

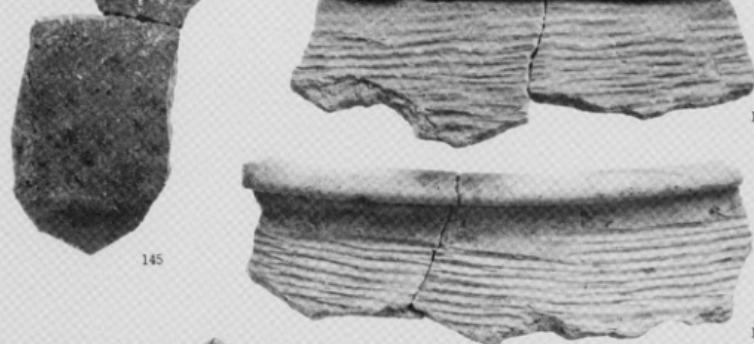
139



145

146

147



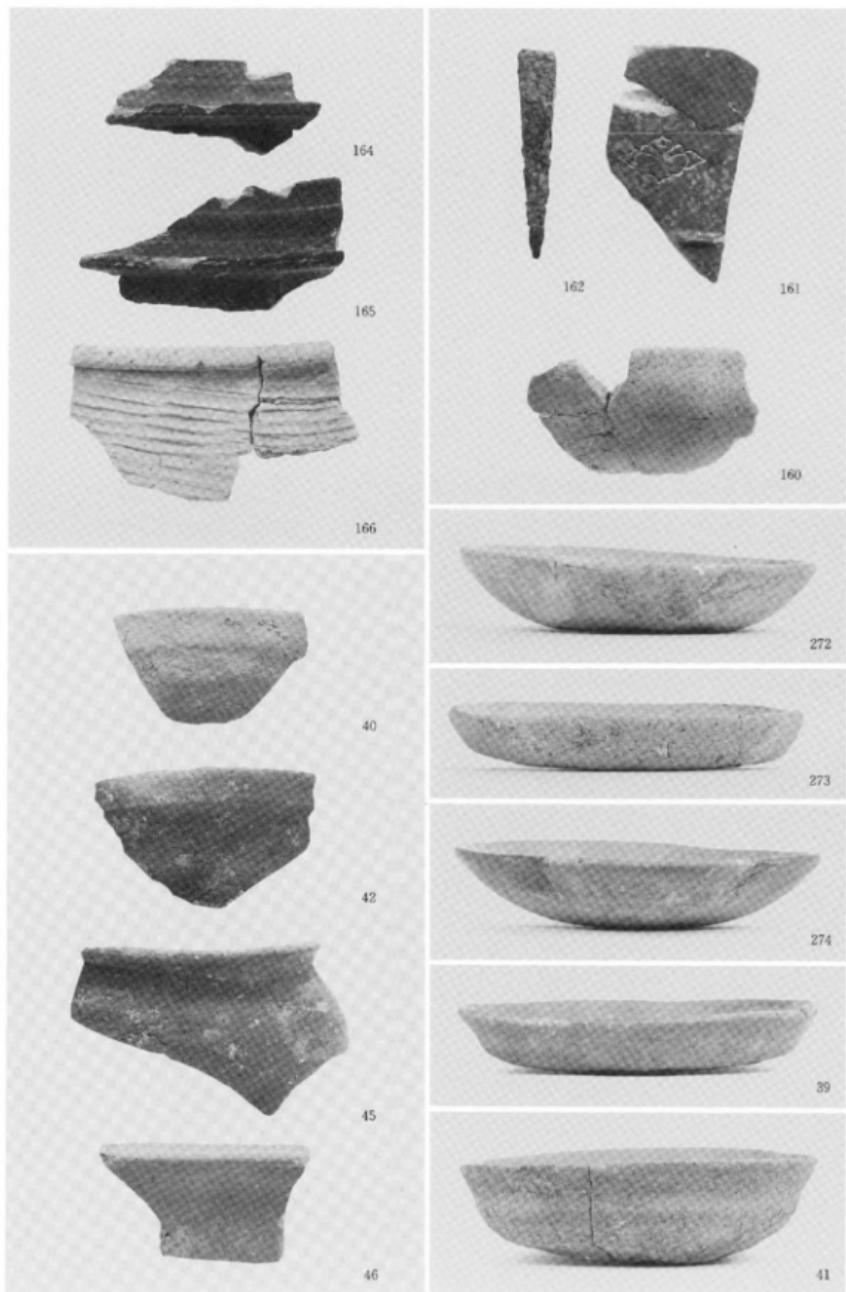
148



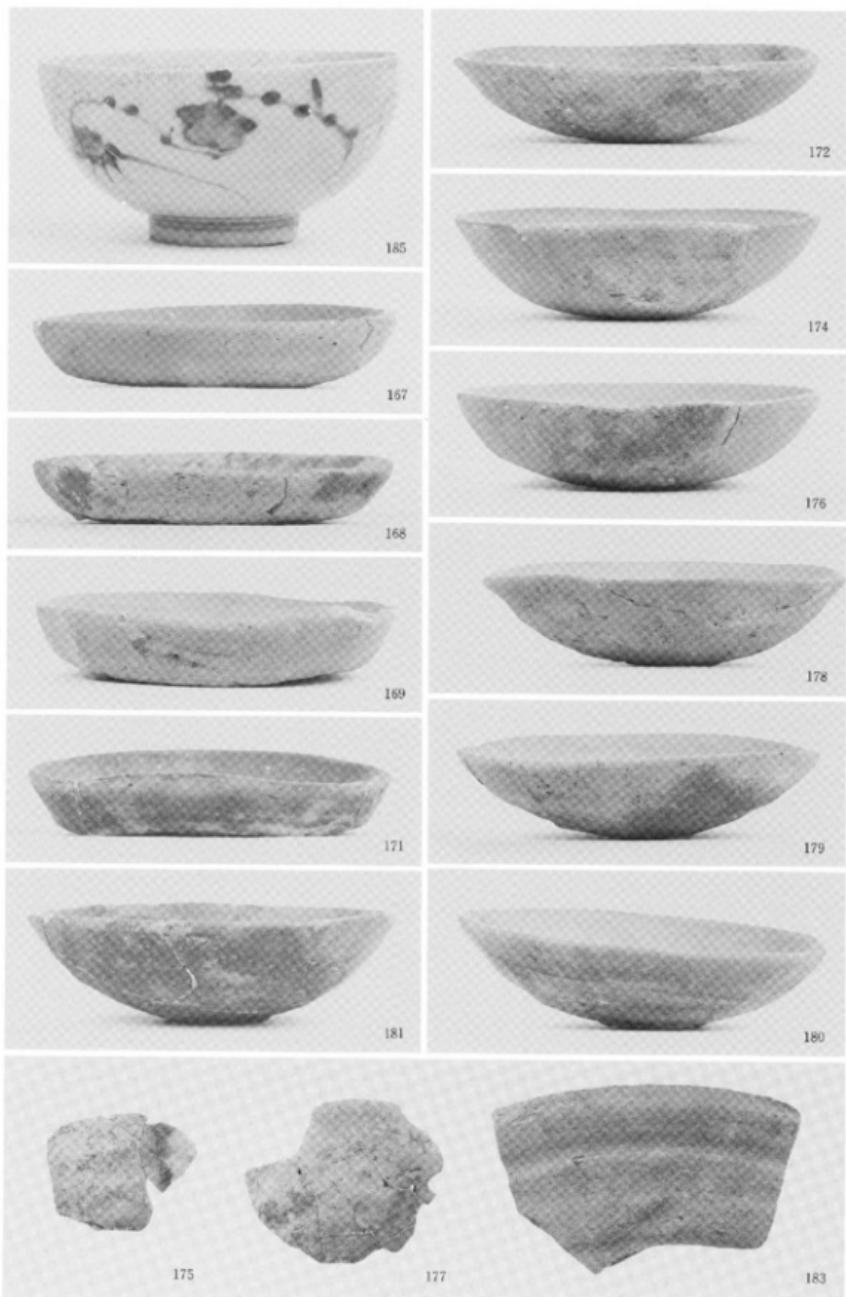
144



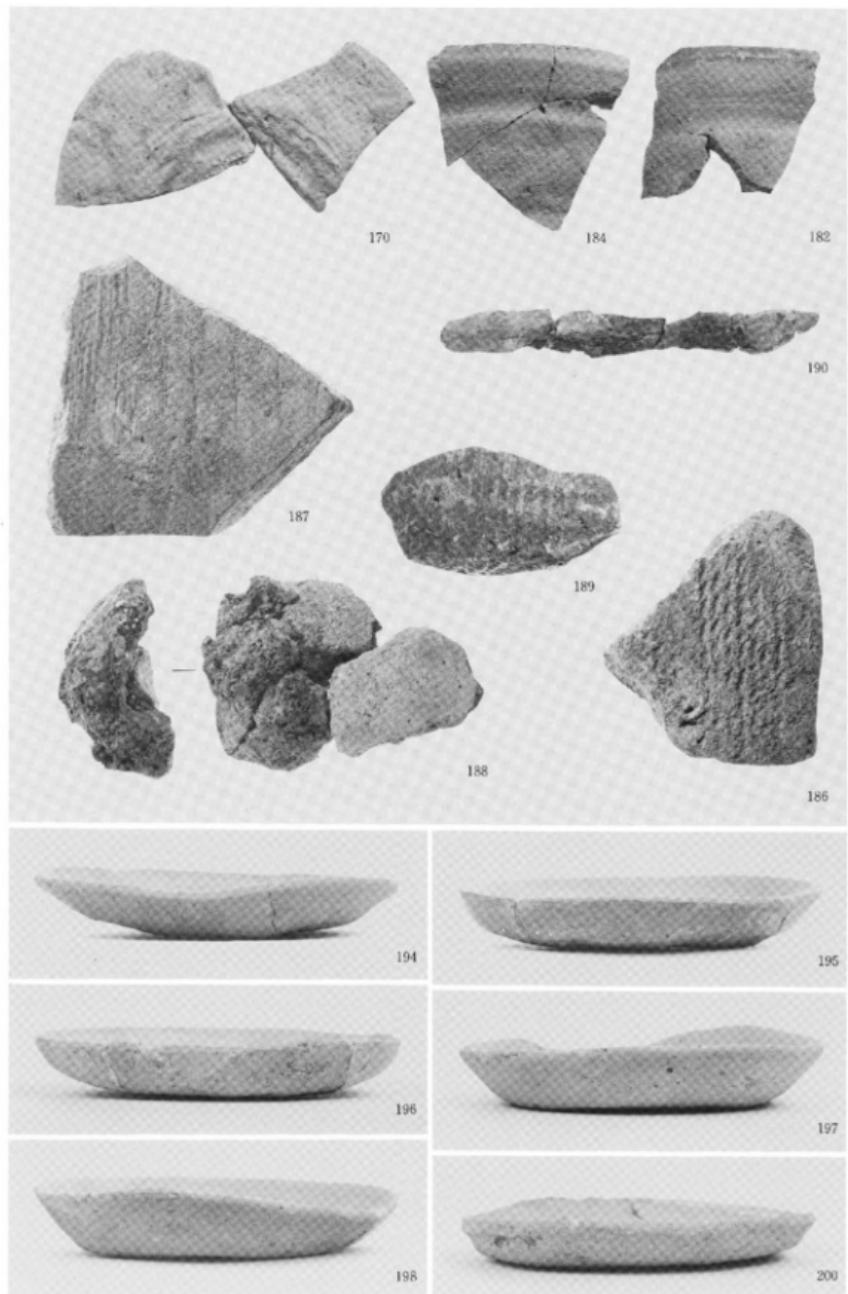
149



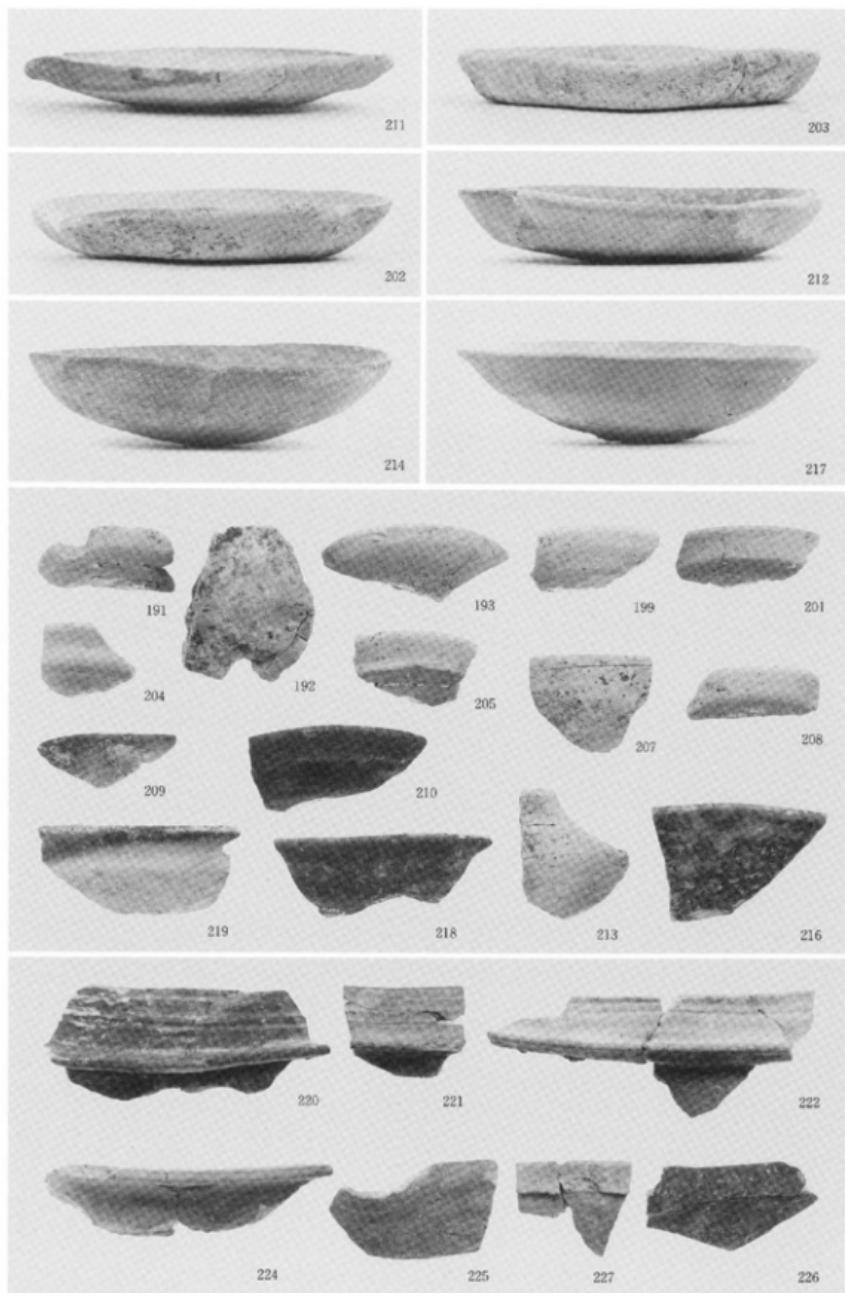
(39~42・45・46・160~162・164~166・272~274)



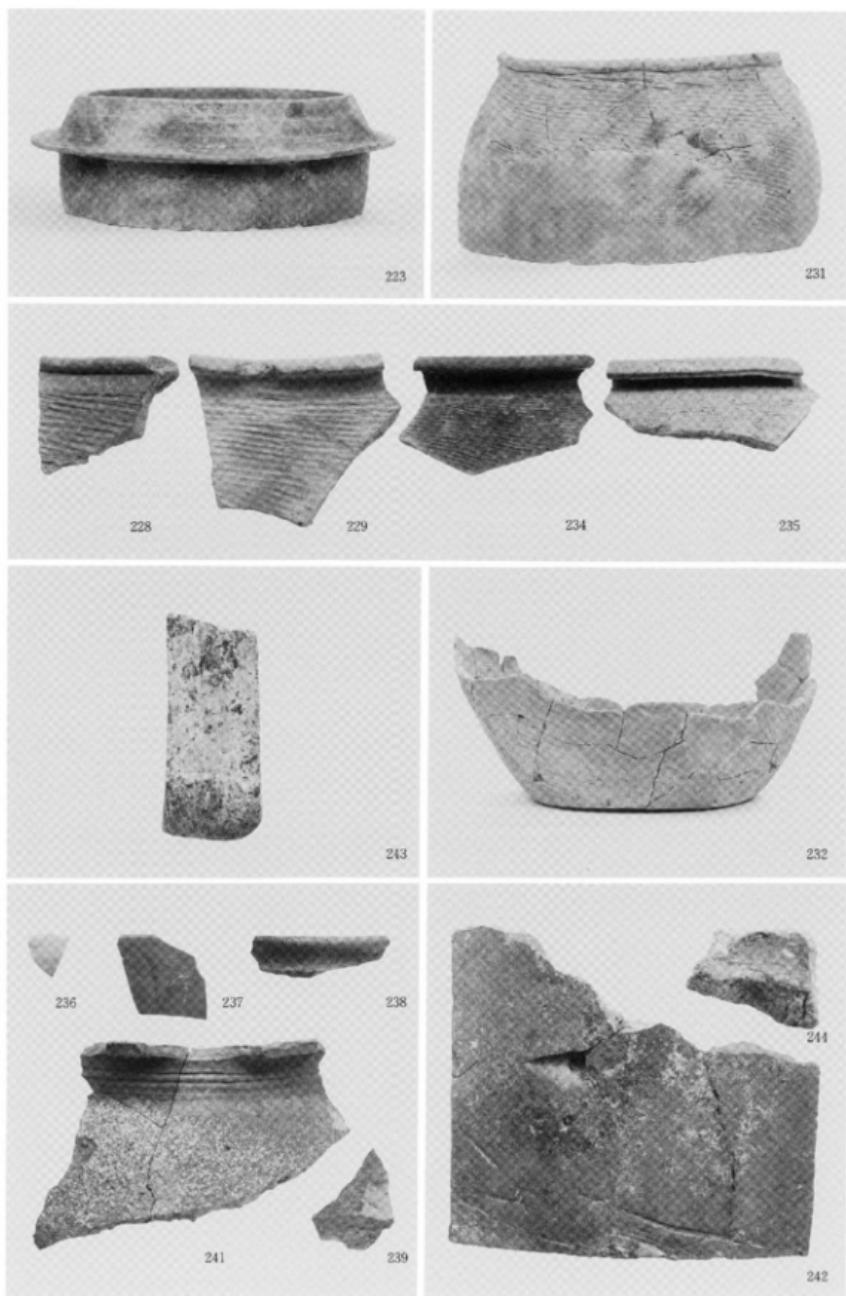
(167~169・171・172・174~181・183・185)



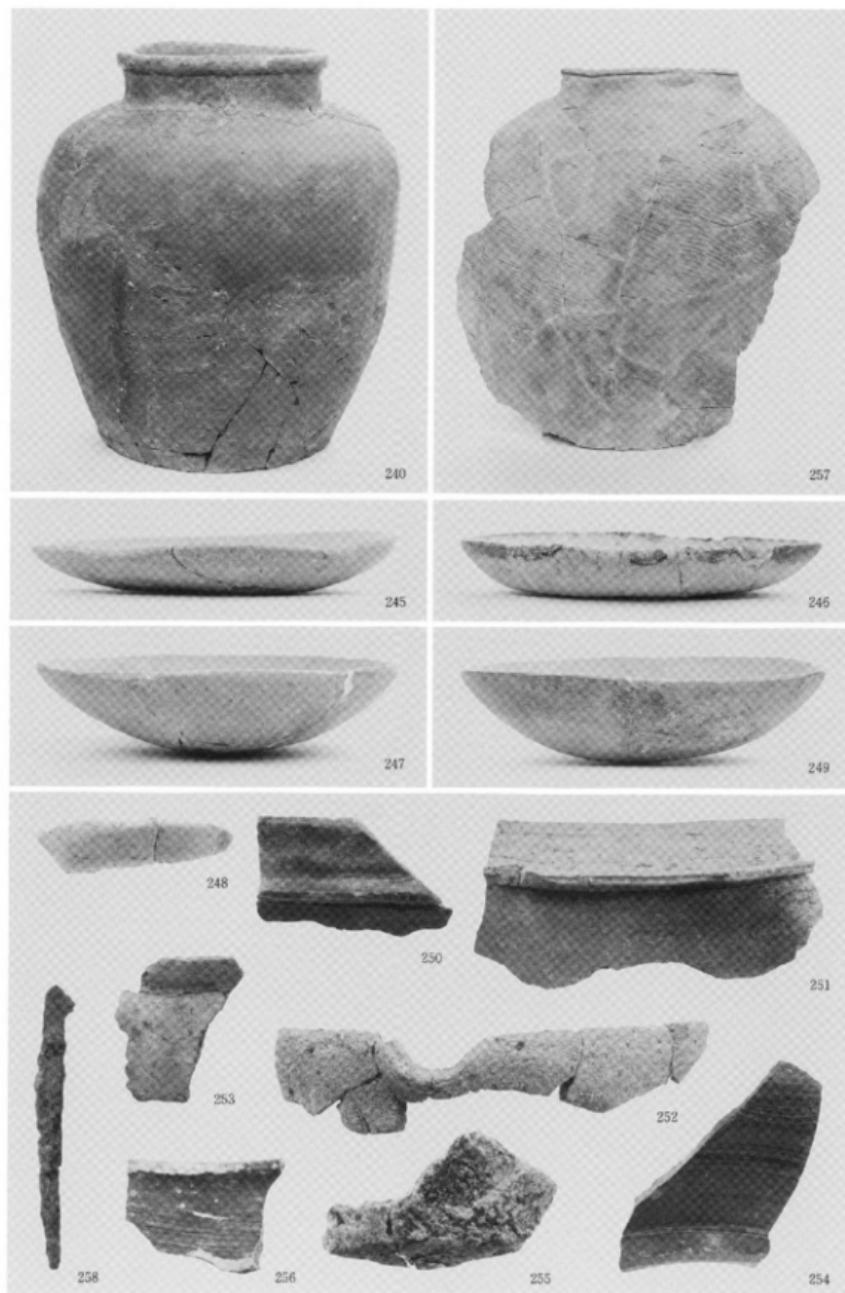
(170・182・184・186～190・194～198・200)



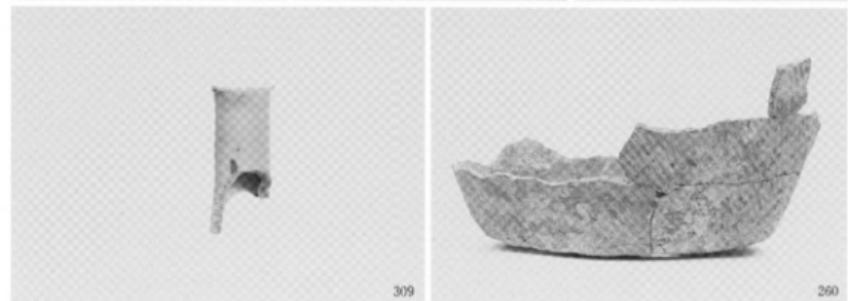
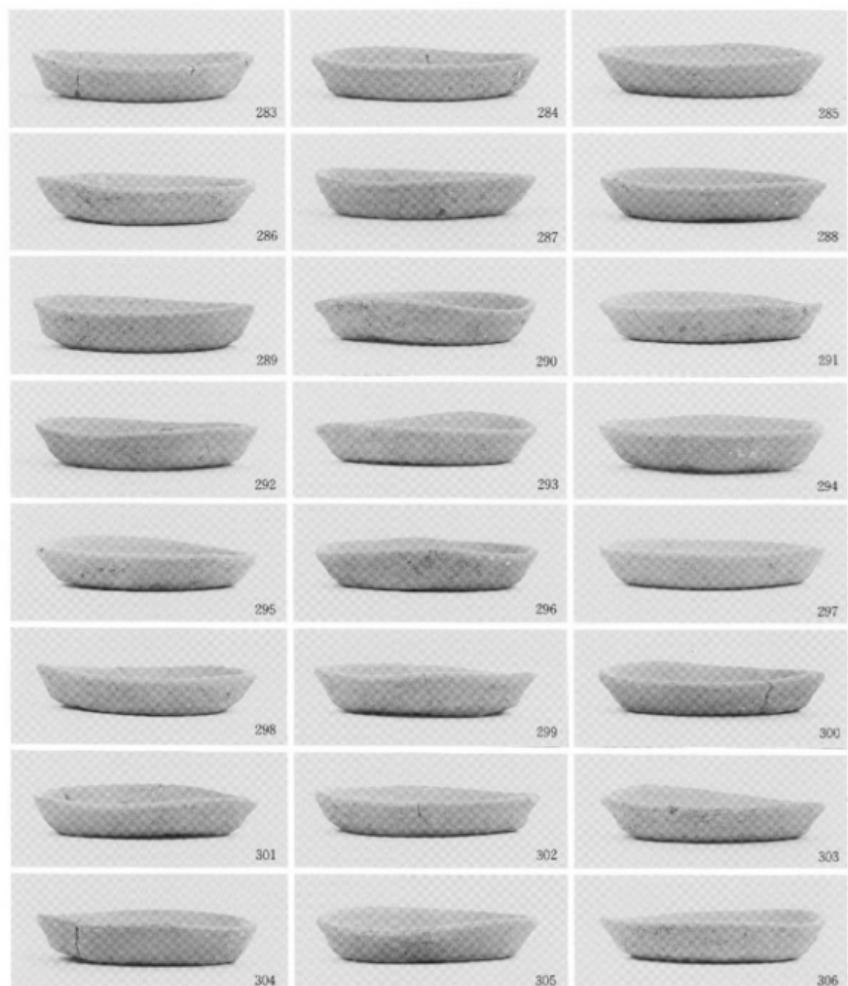
(191~193・199・201~205・207~214・216~226)

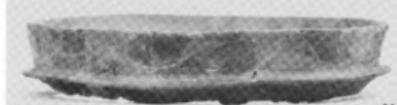
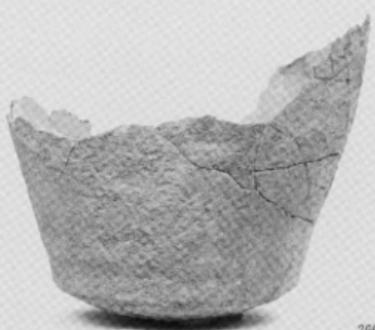


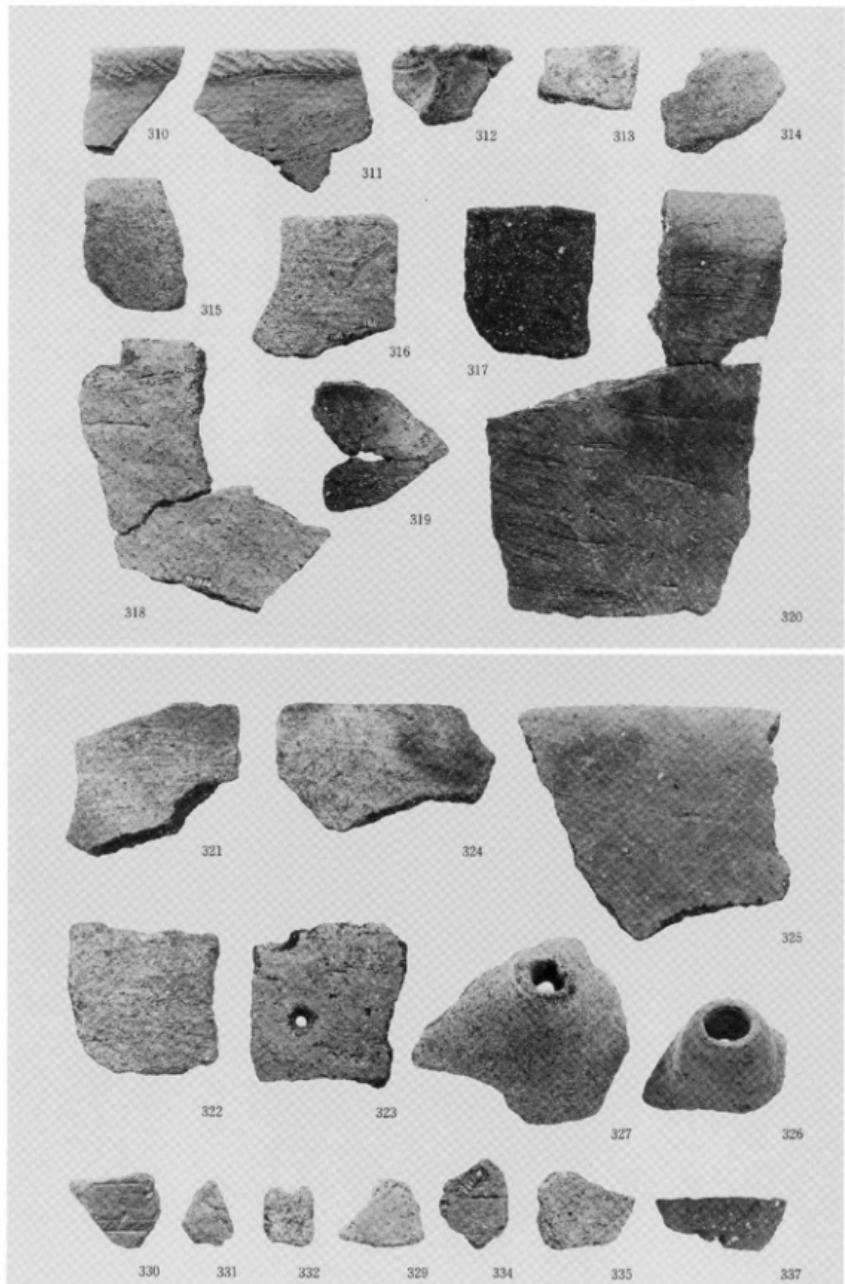
(223・228・229・231・232・234～239・241～244)



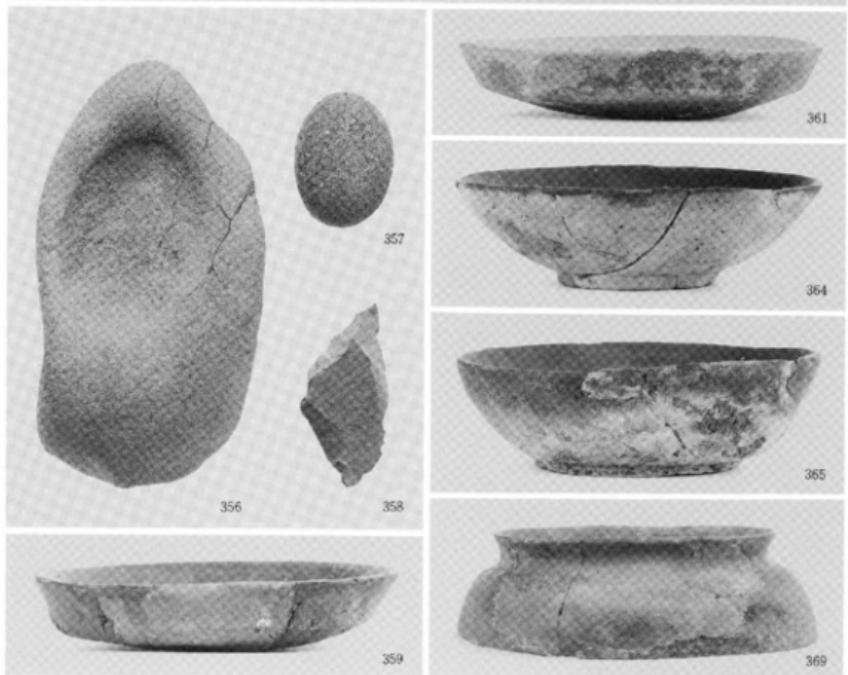
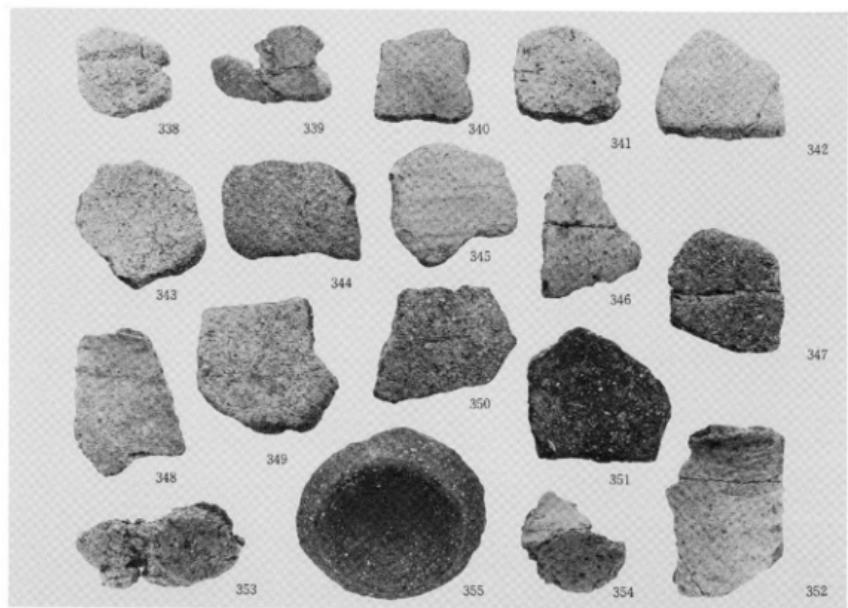
(240・245~258)



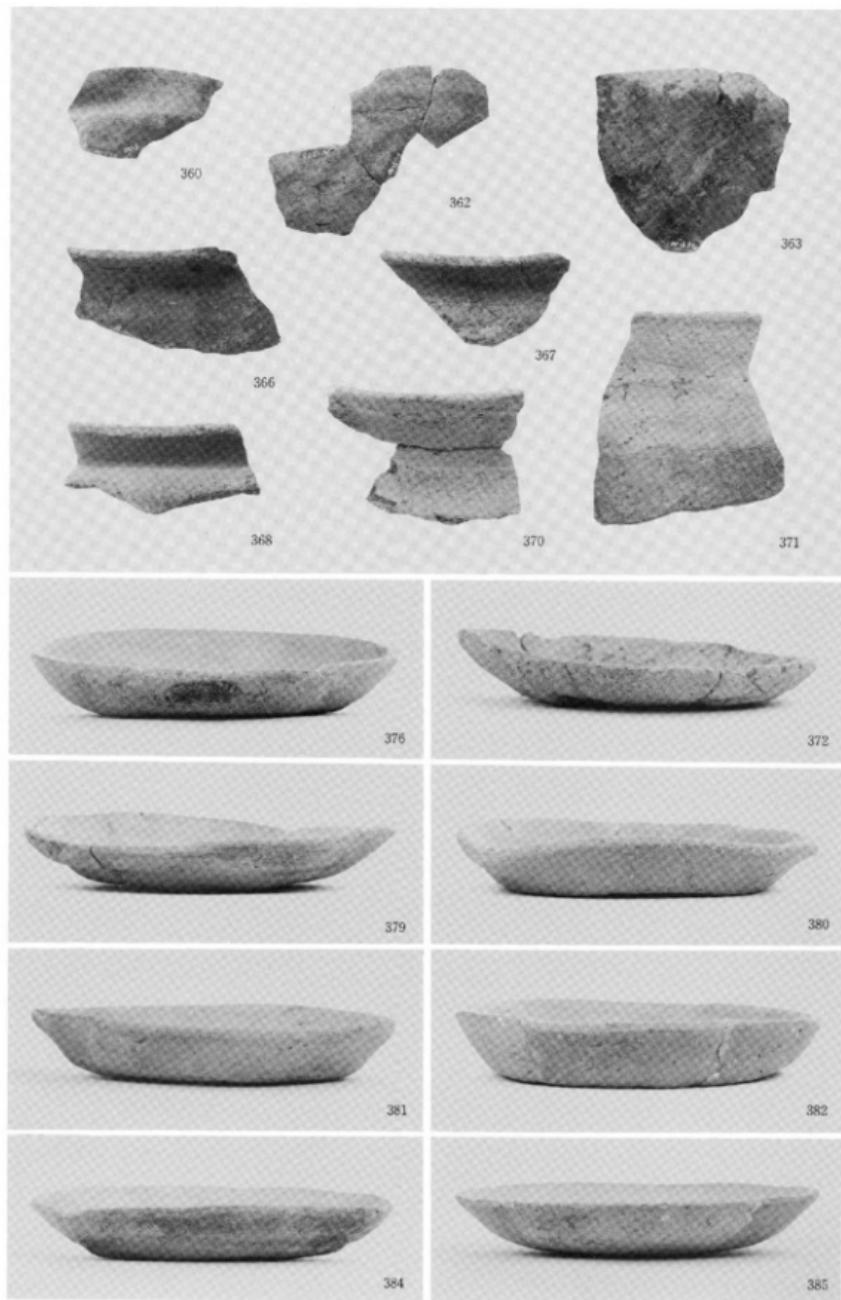




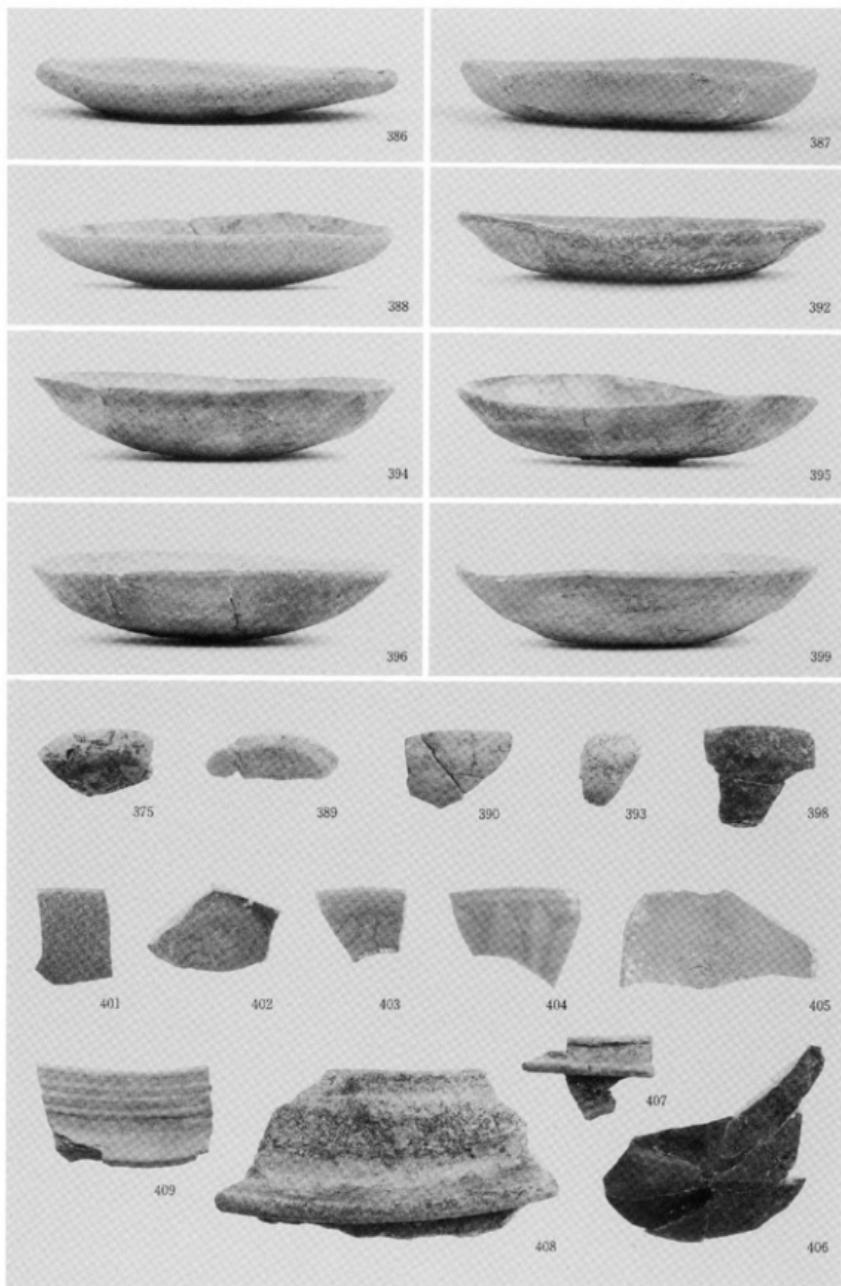
(310~327・329~332・334・335・337)



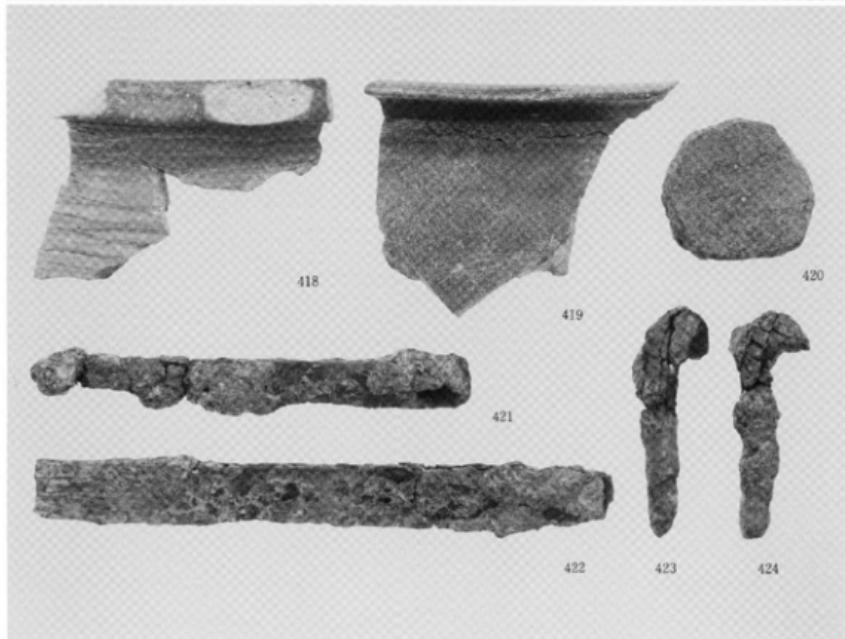
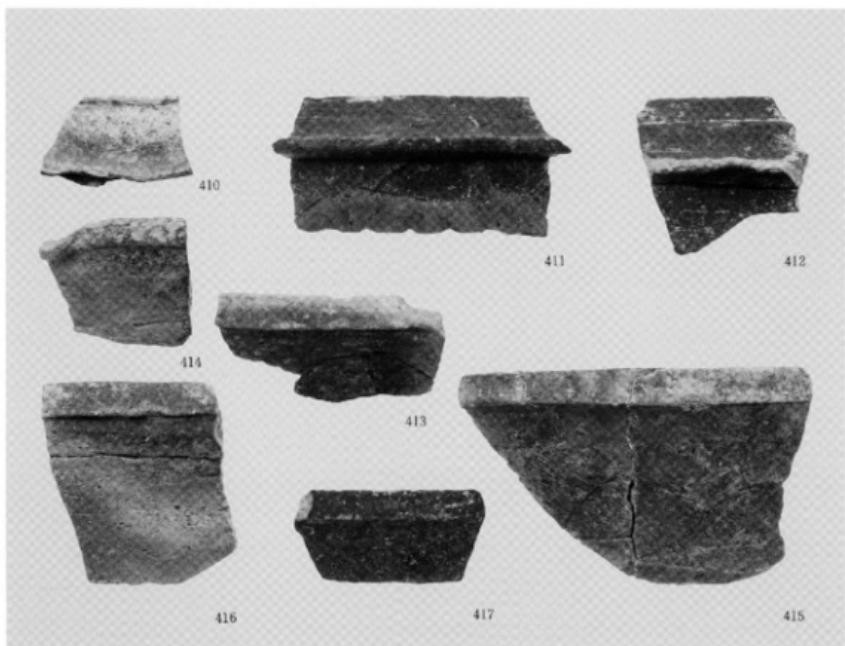
(338~359・361・364・365・369)



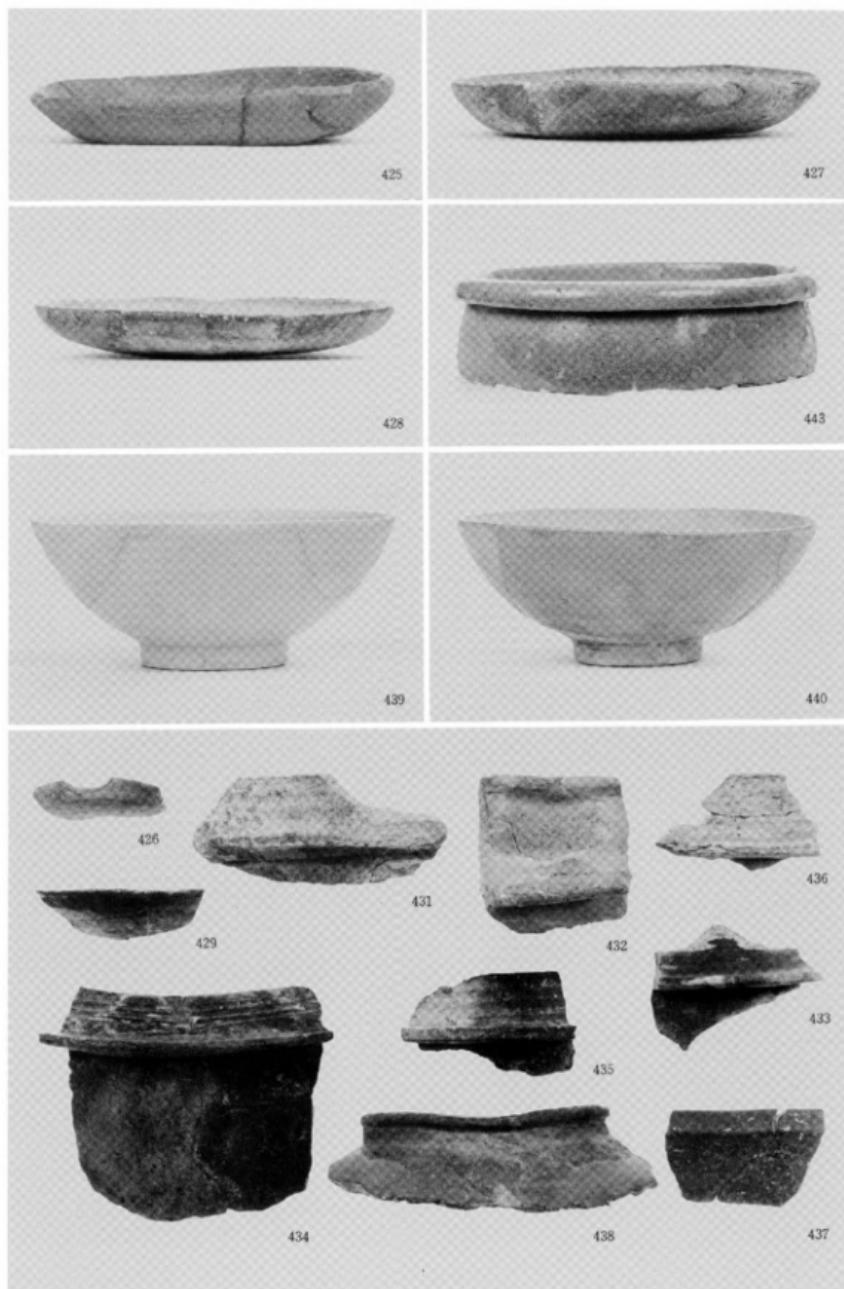
(360・362・363・366～368・370～372・376・379～382・384・385)



(375・386~390・392~396・398・399・401~409)



(410~424)



(425~429・431~440・443)



441



442



444



445



446



447



448



449



450



451

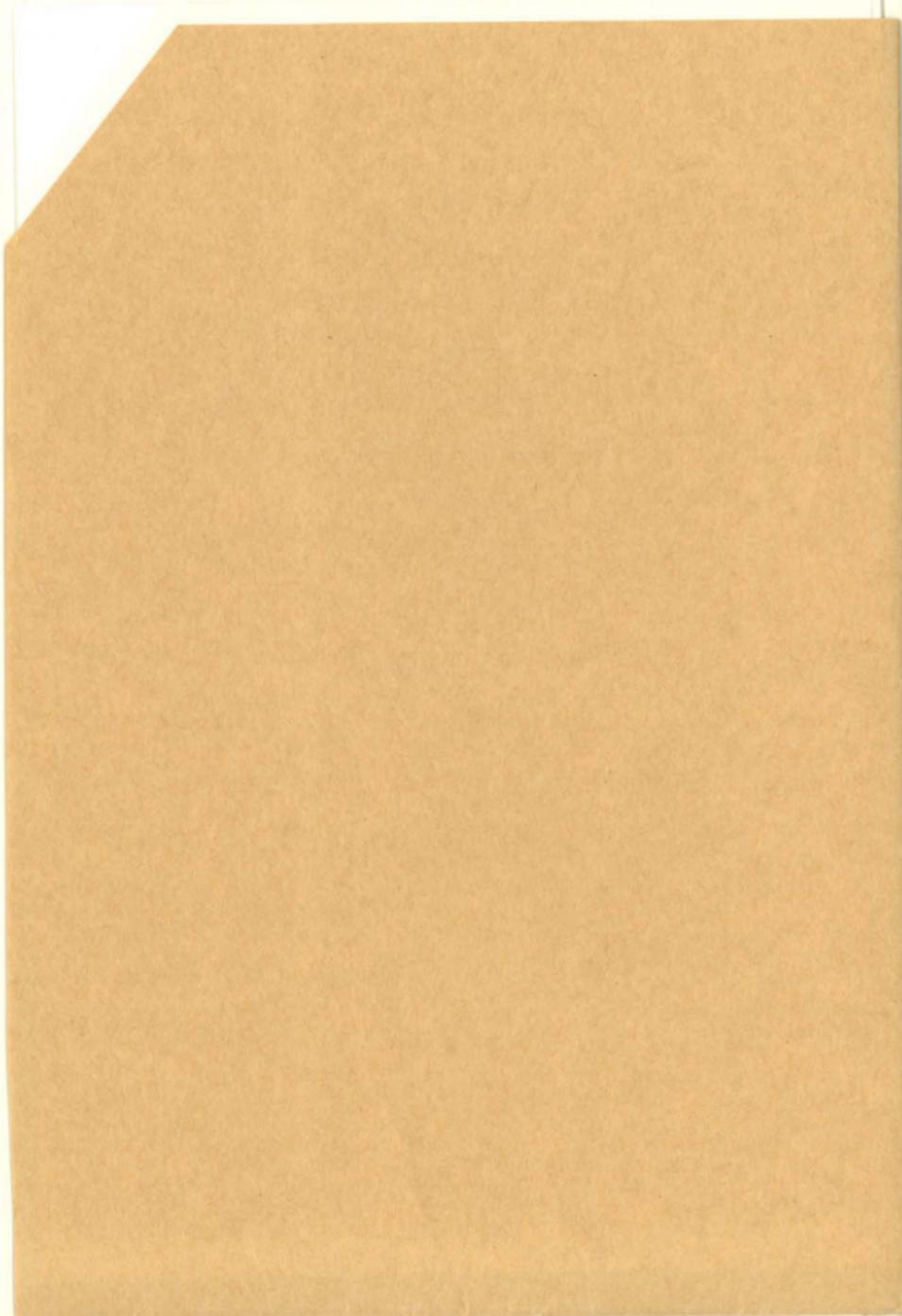


452



453

(441・442・444～453)





付図 向野遺跡遺構全体図 (1/400)

